
高二患者の暴挙

狩人二乗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高二病患者の暴挙

【Nコード】

N3656L

【作者名】

狩人二乗

【あらすじ】

気弱な少年。言動が意味不明な少年。気が強い少女。遅刻寸前の少女。体育館倉庫に閉じ込められた少女。女子高生が大好きな教師。どこにでもいそうな少年と、車椅子に座る少女。そして……絶大な力を誇る、一人の少年。少年があるルール下で自分のやりたいことをしようとした時、学校に関わる全ての人間の運命が狂う。

プロローグ

目を覚ました時、少年は横たわっていた。瞬間、勢いよく立ち上がる。彼は今、最終的に自分はどうなったのか、そしてあの少年がどうなったのかについての思考を張り巡らしている。開けた瞼を再び閉じ、彼の柄には合わない、冷静でゆっくりとした思考で状況を把握しようとする。

まず、自分の中に眠る能力には何の変化もない。恐らくたわいのないことかもしれないが、少年はそういう小さなことすらも把握しておきたかった。それだけ現段階における少年の心中は追いつめられている。何でも、何でもいい。とにかく、自分がどうなったのか、そしてあいつはどうなったのか。

怪我はさほどなかった。学生服にこべりついた血糊はとれそうもないが、我慢するしかないだろう。視界を閉じながら、少年は依然考え続ける。あの少年　あいつはどうなったんだ、と少年は心の中で呟いた。自分達の手にかかり、生きているのか、はたまた死んだのか。いや、死んだ、という事実は全くもってありえない。あいつはそういう奴だ。あんなものでは多分死なないだろう。あいつの体が三方向から貫かれる様子を確認した見たは見たが、それであいつが死ぬとは思えない。だからあいつは生きていると仮定した方がいい。

そして、そういう仮定を少しでもたてられるなら。

彼女を生き返らせることも、可能になる。

簡単ではあったが、少年は自分の考えをまとめることに一応は成功した。閉じた視界を開けようとする。少年は聞いたことがあった。人間は、五感に頼って生きている、と。その五感の内、一つでも閉じると集中力が増すのだ、と。だから少年は視界を閉じていた。外界からは何も聞こえなかったし、何も肌で感じる事が出来なかった。自分の中で出来る状況把握は終わった。ならば、次は、視界か

ら得られる外界の状況把握に徹することにしよう。少年はそう思い、視界を開ける。

「な……」思わず零れるため息も、無理はない。「何だ、ここは！」少年の視界には　　白色しか存在しなかった。
白。

何物にもとらわれないその純潔で彩られた壁で、つくられた部屋の中。作られ、造られ、そして創られた部屋の中に、少年は立ち尽くしていた。白い部屋の大きさはそれ程大きくない。だが、少年の視界の端に、別の部屋へと繋がれる、電車の連結部分を模した通り道の存在があつたことにより、白い部屋と部屋で構成されているであろう『何も無い空間』の全体像が掴めない。急いで白い部屋を駆け抜ける少年。四畳半並の大きさだ、と少年は目算する。以前に、高校を卒業したら一人暮らしをしようと思っていた少年は、沢山の部屋の間取りをみてまわつたことがある。その帰り道の途中、友人に見つかりごまかしたのは良い思い出だ。

思い出の中に居た、友人の姿。

ふいにその姿が脳裏に浮かび、続いて他の友人達の姿が浮かび、最後に彼女の笑顔が浮かんだ。少年は焦り、走る。早くこんな訳のわからない場所から抜け出すんだ、そうして早く、あいつを見つけないと。

白い部屋の天井はさほど高くない為、少年が跳躍をすると頭が天井に着いてしまう。少年は走りながら、次の白い部屋に移動しながら、白い部屋の構造を理解しようとする。彼自身、それは信じられない挙動だった。以前の彼ならここまで頭を目まぐるしく使うとは思わなかっただろうし、恐らく使ったところで底が見えていただろう。けれども、今、彼はこのように頭をフル回転して使っている。それは焦りからくるものなのか、それとも今までの体験により少年の精神の強さが向上したという皮肉からくるものなのか。彼自身にもわからない。

少年は数秒かけて次の白い部屋にたどり着くことが出来た。しか

し、何も変わらない。目の前には白色がひろがり、端には通り道が見える。少年は駆けた。だが、目に映る光景は何も変わらない。次も、次も、次も。白い部屋は、果てしなく続く。

走るだけでは駄目だ。そう考えた少年は、すると、能力を使ってみようという思考にたどり着いた。直ぐさま立ち止まり、『瞬間移動』の能力を使おうとする。だがしかし、使えなかった。当然といえば当然だろう。少年はその事実をおぼろげながらも理解し、大声を出しながら涙を流した。激昂し、白い壁に向けて攻撃を開始した。殴る。蹴る。頭をぶつける。色々な方法を壁にぶつけ、その度に大きな音が白い部屋を響かせる。なのに、それなのに、白い壁には傷一つ付いていなかった。

「……………」少年は沈黙の状態になる。頭の中では再び思考の渦が展開されていた。巡り巡る彼の思考。現状を打開するにはどうすればいいのか、最善の打開策は何なのか。そうして。

少年は、とりあえず白い部屋を転々と駆けることにした。彼の目は死んでいない。このような状態にあっても、彼の目は死んでいない。わずかな可能性を信じ、走り続ける。その先にある筈の、光りを求めながら。

「この学校の生徒は真面目過ぎると思う」

その言葉を聞いた瞬間、霧島君は一体何を思っ
てこんな話題を切り出してきたんだろう、と狩谷操は率直に思った。

ざわつく朝の教室。

その中に、一際目立つ男子生徒が一人居る。

高校生男子の平均身長を軽く越し、黒い学ランの前を全開にし青ぶちの眼鏡をかけ、長いであろう黒髪をウェーブに整えたそのチャラい外見が、周りで楽しく雑談する生徒全員
の存在を霞ませる程の印象を一人で担っていた。何も知らない第三者がこの教室に入った時の第一声が「あの男子誰さん？」になる程だ。

「な？ そう思うだろ、ミサオ」

「……何がさ」

「だからよ、周りの奴らを見てみるよ。やれ生真面目だやれ真面目だやれ面目だ、全員が全員普通の格好してやがる。今のご時世、高校生が第一ボタンを開けねーとか間違っ
てないか？」

「なんか一個変なの混ざってた気がするけど。……うーん、別に間違っ
ちやいなと思うよ。真面目なのはいいことだっ
てどっかの会計も言っ
てたし」

「だろ？ だからよ、俺は考えた訳だ。おいおいお前、これどうすりゃこのクラスの不真面目さが保てるんだ？ ……っ
てよお。そして考えた結果俺は思いついた。こうすりゃクラス全体が不真面目になる」

「僕を完全無視してるよね霧島君……。で、何を考えつ
いたの」

「俺一人がクラスメイト全員の分のボタンを自分の服に付けてそれを外せば、面目立つ」

「意味不明過ぎてどうリアクションしたらいいかわからないよ」

霧島が教室の中央で机に腰を掛けながら喋る傍ら、その前にある

椅子を霧島の方に向けながら、ため息をつく男子生徒もいた。高校生男子の平均にまるで届いていない小柄な体格に加え、やけに気弱な印象を持つ。第三者が見た時の第一声が「あの所謂草食系男子って奴じゃね？」になる程だ。

そんな男子の名前は狩谷操。

そのすぐ後ろの机に座り、足を椅子に乗せている男子が霧島巧。

梅雨入り前の六月。夏の暑さが垣間見る晴天。

一見正反対に見える二人が高校二年生になった時。名字の順番制の影響により近くの席に座っていた二人の仲が良くなるのはまさに一瞬の出来事だった。

始まりは、霧島の「お前のこの名前ってさ、『あやつ』って読むのか？ おいその者。あやつを引つ捕らえろみたいな？」という言葉。その言葉に「どこの時代劇好きだよ僕の父さん母さん」と答えた狩谷が笑いながら霧島の顔を見て、「僕の名前はミサオって読むんだよ、霧島君」と言ったことがキツカケだった。

「ほら見てみるよミサオ。このクラスの俺を除いた四十三人分のボタンを今日の朝、購買で買ってきた。今すぐお前の手でこれ学ランに付けてくれ」

「……せめて裁縫道具を持ってきた上で言つてよそついうこと」

「何だよ！ お前、裁縫道具なんてつまんねーもん使わねーと裁縫出来ねーのかよ！」

「なんなのさ霧島君……」

がたがたごたごたためかしてねーで俺の学ランに付けてくれよ、と言いながら霧島が学ランの内側ポケットから出したボタンの数は確かに四十を越えていた。故にジャラジャラと、『学』と書かれた金色のボタンが机に出される。自信あり気にその一連の言動をこなす霧島に対し、狩谷はため息を一つついた。

初めて喋った時にも感じたけど、霧島君は一体全体何を考えながら行動してるんだろう……。

狩谷はそう考え始めたが、どうせ考えたって答えはないんだろう

し、そもそも霧島君はこの訳のわからない行動が面白いんだからいいじゃないか、と結論づけると、「取り敢えずボタンしまつてよ。流石に四十個全部を机の上に置くのは厳しいって」と零れ落ちそうになるボタンを両手で抑えながら霧島に言った。

「ん？ ということはお前、ボタンを俺の学ランに付ける気になったのか？ てかなったんだろ。よし、遠慮せずにやっちゃってくれ。パツパツパツと」

「無理だつていくらなんでも」

「何だよ。手芸部つてのはそんなもんなのかよ」

「……手芸部をどんな人達だと思ってるのさ、霧島君は」

「服を作ってくれる奴ら」

「工場に頼んで」

狩谷の言葉に、「バカかお前。金かかるだろ」と返すと、霧島はしぶしぶボタンを学ランの内側ポケットに手づかみで乱暴に入れていく。そんな様子の霧島に「ていうか霧島君、熱くないの？ 今日最高気温二十七度つてニュースでいってたんだけど。周りの皆も学ランなんて着ないで学校来てるし、僕もそうだし」と狩谷が聞く。霧島は汗をかいた額を服の袖で拭いながら「汗もしたたる良い男……そんな男に俺はなりたい」と学ランを両手で下に一度引つ張り、発言した。狩谷が何も言わずに無表情で霧島を見ると、それを見た霧島は「ああ、スマネエ。元から霧島君は汗がしたたるどころか泥水だつてしたたる完璧な男だよつて言いてーんだよな、ミサオは。いやースマネースマネー俺としたことが。さっきの発言は忘れなさい」と満面の笑みで言い切る。

完全なる無心の状態。

そんな仏の境地に、ほんの一秒だけ狩谷は到達することができた。すると。

うーんこれをどうリアクションしたら僕は霧島君をギャフンと言わせてやれるのかなと本気で模索し始めた狩谷の耳に、「はあ？ 霧島、あんた何言っちゃってんの？」というキツイ女性の声が聞こ

えてきた。

「おうおう。何だよ高柳。俺に何か用かよ」

「寧ろあんたが用を作ってるんだよ。学ランは五月から校則で禁止されてんの。早く脱ぎなさい……って五月からあんたに言ってるわよね。何であんた脱がないのよ。ほら、脱ぎなさい」

「上か？ 下か？」

「バカじゃないのあんた」

学ランって言ったわよね私。ねえ、確かに言ったわよね私と狩谷に聞いてくる女子生徒。狩谷は苦笑しながらも、「うん。一応ミカは言ってたよ」と言うと、高柳はハアアアア、と気合いを溜めているのではないかと思われる程の長いため息をつき、狩谷にこう言った。

「ミサオ。あなたはしゃきつとしなさいよしゃきつと。朝っぱらからなよなよしてる男なんて、私、嫌いだから」

「……ごめん」

「謝らないで」

「……めんご」

「黙れ霧島あ！」

「黙らないもんね！ ああ俺は黙らないさ！ 言論の自由万歳！」
うるっさいんだよあんたは！ と周りの生徒の声に負けない程の声でギャーギャーと喚きたてる高柳と、霧島の二人。そんな二人を見ながら、人知れずため息をつく狩谷。

なんかこの二人って……お似合いだよなあ。霧島君は黙ってればカッコイイし、ミカは言わずもがな美人だし。身長も僕より少し高いしサラサラな髪をポニーテールにまとめるしキツイ目とかもいいしスレンダーだし……。

「あんたはあんたで何ぼーつとしてんのよ」

「う、うわ！ 何でもないよ！ 何でもない！」

気付くと狩谷の視界には近付いた高柳の整った顔が広がっていた。慌てて俯く狩谷。その様子を見てもう一度ため息をつく、「ん？

なんだミサオ、お前顔赤いぞ。リンゴにでもなりたいのかお前はよっしゃ、なり切ったら俺がお前を食ってやる」と言う霧島に向かつて「戯言も大概にしなさいよあんたは」と高柳が忠告すると、高柳は尚も俯く狩谷にこう言って浴びせた。

「……もういいわよ、ミサオはそれで。とにもかくにも私、文化祭の準備で疲れてるから。朝の七時に学校集合して会議とかあの生徒会長一体何考えてんだろ」

「エロいことだな」

「……もういいわよ霧島。あんたはそれで一生食っていきなさい」
啞然とする高柳。「こんなバカはどうでもいいわ。ミサオ。とにかく私、そういうことだから。今日も結構遅くなっちゃうけど、ちゃんと南門で待っててよ。出来るだけ走って行くから」

そう言つと、わかつたわねと狩谷に念を押す。その様子を見て苦笑した狩谷だったが、内心嬉しい狩谷は「うん、わかつた。でも走らなくていいから、ゆっくり来て」とちゃんと真っ直ぐ高柳の顔を見ながら言った。

「……うん、ありがと。じゃ、そういうことだから。私はこれで。また後でノート写させてね、ミサオ」

言つと狩谷と霧島が居る教室の真ん中から離れようとする高柳。

「え、どういうこと？」疑問を表情に浮かべる狩谷を見ると、霧島は机から降り、狩谷の肩をぼんぼんと軽く叩いた。

「察してやれよミサオ。……あいつ、恐らくデカイ方を出す気だ」

「もはやセクハラの部類でしょあんた。……違うわよ。サボリよサボリ。朝五時半に起きて眠いの。保健室行つて一時間だけ寝てくるわ」

「……よくそんな生活態度で生徒会に入れたよね、ミカつて」

呆れながら狩谷が言つと、「溢れ出る人徳と私の美貌のおかげじゃない？」と自信満々な表情で狩谷と霧島の二人に言い、笑顔で手を振ると、教室から出て行った。

その姿を見送り、二人は顔を見合わせる。

「結局ミカはこの教室に何しにきたのかな」

「察してやれよミサオ。恐らくあいつ……大の方だ」

「霧島君ってさ、それ言いたいただけだよな」

「まあな！」

「高らかに断言しないでよ……」

この短時間で何度目になるかわからないため息をもう一度つくつくと、
「いやーしかしあれだよな。ミカの奴は何が目的でミサオと一緒に帰ろうとしてるんだろうな」と真顔で聞く霧島を横目に、狩谷は言う。

「そんなの、僕とミカの家が隣り合わせだからだよ」

その言葉に口を開けて驚く霧島。「なに……お前らって幼なじみだったのかよ！」

「いやいやそうじゃなくて。四年前の四月にミカが隣りに引越してきたんだよ。それから僕とミカはだいたい毎日登下校を一緒にしてるんだ」

「ほー。そうなのか。……って前もこんな話ししなかったっけか」

「したよ」

「いつだ」

「昨日の朝。今と同じ八時十五分。ていうか一昨日もだよ。どういうことなのさ、霧島君」

「……男はな、過去を振り返らないもんなんだよ」

「それも昨日聞いた」

「マジか。カツコイイ台詞だと思ったのによ……」そう呟く霧島。

「因みに一昨日は」

「因みに一昨日も」

「……男はな、過去を振り返りたくないもんなんだよ」

「その通りだと思う」

実のところ、この時狩谷は霧島を目の前にして話しをしながら、全く別の事を考えていた。

四年前の四月。

ミカは確か、僕と中学で初めて一回目が合ったその翌日に、引越してきた気がする。

これってもしかして……。

そんな感じの自問自答の繰り返しを、この四年間狩谷はずっとしてきたが、自問に対する自答はいつもいつも、ある一つの事実に行き着くのだった。

ミカが僕を好きなんて百パーセント有り得ない。

成績優秀スポーツ万能の八方美人。それに加えて高校生二年生になつてからは会計の役職に就き、生徒会の一員としても活躍するようになった。

対して自分は何もない 平凡な男子。いや、平凡で留まれたらどれ程良かったらう。身長も百六十センチ前半と小さく、ミカと横に並んだら明らかにミカの方が大きいとわかる。成績も中の上止まり。部活は帰宅部。これまでの人生、先輩と呼んだ人も居らず、かといって先輩と呼ばれたこともなかった。

そんな、男子と女子。

それが、狩谷操と高柳美香という二人の高校生の違い。

「それなのに、ミカが僕を……なんて、有り得ないよね……」

「ん？ 何か言ったか、ミサオ」

「ううん。何でもない」

苦しくてもなんとか笑顔を返すと、霧島は「そうか。お前、そこまでフー祖父さんが死んだの悲しかったのか」と訳のわからないことをまた言っていた。

「ところでよ、ミサオ」

「何、霧島君」

「この学校の副会長って誰だったっけな」頭をかきながら急に思い付いたように発言する霧島。「いやさ、俺、生徒会のメンバーで知り合いじゃないのって副会長だけなんだ。だから気になった。教えてくれ」

いきなりの質問に面をくらった狩谷だったが、霧島君のこのテン

「荒く息を膝に手を付きながらなんとか整えようとしていると、「ちよつとちよつと、その貴女」とパンチパーマをかけ、サンダルを穿き、買物袋を右腕にかける。見るからに噂好きそうなおばさんが斉藤にいきなり話しかけてきた。

「な、なんでしようか」怪訝に思いつつも返事をする。その様子を見ながらおばさんは「まあね、たいした用じゃないんだけどね」と話しを切り出す。

「貴女、こんな朝にどれだけ走ってるの？ おばさんもね、若い頃はいっぱい走ったのよ。そりゃ今はあれだけど、若い頃は一時間のランニングを一日に三回やってたんだから」

「そうですね……」

汗を拭いながら、このおばさんは一体何を喋りたいんだ？ と疑問に思う斉藤。言いながら赤信号をチラチラ見てまだ青に変わっていないことを確認していると、「でね、おばさんも若い子に負けたと思われたくないな」なんて思ってたね。そりゃ今はあれだけど、おばさんの若い頃の走り込みと貴女みたいな可愛い子の走り込みを比べたいな」なんておばさん思ったの。で、貴女、今日の何時から走り始めてるの？」とおばさんが斉藤に聞いてきた。可愛い子と言われて少し嬉しかった斉藤だったが、自分みたいに百七十センチ越えるデカイ奴が可愛い訳ないだろ。社交事例だ社交事例と思ひ直し、笑顔をつくりながらも答える。

「ええと……今日は六時半から走り始めてます」

その言葉に驚きを隠せないおばさん。「六時半から！ じゃあ貴女、二時間くらいずっと走り続けているの！」

「はい。そうですね」

「え、ええ！ ……まさか貴女、毎日走ってるの？」

「はい」

「は」。近頃の若者は軟弱だとかよく言うけど、貴女みたいな女の子も居るのねえ。おばさん感激。握手させて、握手」

言われるがままにおばさんと右手を握手する斉藤。近頃の若者は、

というくだりに先程のホームレスおじさんの顔が思い浮かんだが、無理矢理消した。大きな目を開け閉めし、再びにじみ出そうになる涙を止める。

彼女　　斉藤伊里は苦労人だ。家には両親が居ない。にも関わらず、家には弟が三人、妹が二人居る。大家族とは言い難い人数だが、それでも自分を含めて六人の家族が学校より遠くのぼろアパートに住んでいる。

更に、斉藤家で長女の次に歳が上の長男は今年で中学二年生。働こうにも深夜のアルバイトが精一杯。それにより長女である斉藤が働くしかなかった。

学校から帰る途中に一時間だけバイトをし。

その後すぐに帰って六人分の食事を作り。

そうした後、小学一年生になる三女を寝かし、長男と共に深夜のバイトに勤しむ。

中学三年の受験シーズンのさなか、初めは斉藤も高校に入学しようとは思っていなかった。しかし、受験シーズンにも関わらずバイトに行き続ける姉の姿を見て察した五人の家族が　彼女に高校生になって欲しいと泣きながら頼んだのだった。

斉藤は最初、それは無理だと思っていた。当たり前だ。中学をサボりながら行くバイトだけでは全く生活費が足りない。家族全員で外食にも行ったことがないし、弟や妹の欲しい物を買ってあげることが一切出来なかった。

高校生になりたいと思ったことがないという訳ではない。周りが一生懸命『何か』に向かって勉強している姿を見て何も感じない訳ではなかった。

だが、それは叶わぬ些細な夢。

だから、斉藤はその頼みをあしらった。

その時は。

翌月、斉藤が住む街にある法案が可決された。

それは、公立高校の場合、入学費と授業料　加えて交通費や給

食費が免除になるという法案だった。長男が血相を変えながらその報せを持ってきた時、斉藤は涙を流しながら長男に抱き着いた。

それから学校、バイト、家事、勉強の毎日が繰り返されることになったが、次男や三女までが家事を手伝ってくれたこともあり、なんとか体調を崩すこともなく入試を受けることが出来た。

そして、今。

彼女は毎朝走り、電車を使っていると学校側に嘘をついて登校している。その嘘によって出来たお金は、家計費へと変わる。罪悪感がないといったら嘘になる。いくら家計が厳しくても、これ程までの待遇を受けながら尚も施しを受け取ろうとする自分の傲慢さが嫌いじゃないといったら嘘になる。

副会長になったことも、その罪悪感が一因を担っていた。副会長になり、少しでも自分を受け入れてくれたこの学校の役にたとうと思いい、立候補した。

なのに　彼女は今、遅刻寸前の状態である。

「おばさんもね、流石にそこまでは走り込まなかったのよ。そりゃ今はあれだけどね、あの頃は私の走る姿見て男の子達が群がったものだわ。知ってる？　運動中に流れる汗ってね、異性を興奮させる作用があるんだって。だから女の子は皆、運動が出来る男の子が好きなのよ」

一方的に喋りながらも依然と喋り続けようとするおばさんに内心嫌気がさしていた斉藤。信号の色はこれまでにもう二回は変わっている。急がないと、本気で遅刻してしまうことが容易に理解出来た。ヤバイぞこれは……文化祭準備に遅れただけでも怒られるつのに、その上遅刻でもしたら……新聞部の奴になんて言われるかわかんねえ……。

運動からくる汗とは別に冷や汗も流れ始めた斉藤は　はあ、やそうですか　などの相槌をうつことを止める決心をし、「あの！」とおばさんの話しを遮って声を出した。

「なに、いきなり大声出しちゃって。おばさん驚いちゃったわ」

「す、すいません」頭を下げる斉藤。「あの！ 私、学校があるんで！ 今日のところはこれで！」

そう斉藤が言うのと、おばさんは「あらあら、スポーツウーマンの上に真面目な子なのね。今はあれだけど、おばさんね、昔はよく寝坊して遅刻したも」

「すいませんさようなら！」

何を言っても喋ることを止めなさそうな気配を察した斉藤は、信号が青になったことを確認すると脇目もふらずに走り出した。後ろから、「あら。ホント真面目な子ねー」と感嘆にも似たような声が聞こえてきたが、無視を決め込むことにする。

「遅刻だ遅刻だ遅刻だ遅刻だ遅刻だ遅刻だ遅刻っ！」

再び斉藤は、叫びながら走る。文化祭準備で使う予定だった、体育館倉庫の中にある赤いカラーコーンを あの生徒会メンバーの中で誰かが取り出したのかもしれない、と少し気にしながら。

「気持ち悪いんだよ新島！」

「そこでずつと閉じこもつてればー？」

「消えろよ、私らの視界から！」

朝の八時十五分。予鈴がなる五分前の時間に、新島春香は女子生徒三人に罵声を浴びさせられながら、体育館倉庫に閉じ込められた。外から鍵が閉められ、暗い空間には一つの窓からしか光が届かない。カラーコーンやマット、跳び箱などが発する独特の土臭さが充満したその空間に、一人閉じ込められてしまったのだった。内側から開けようとしたが、外側からしか開かない構造の扉だった。諦めた新島は、しかしたため息を一つもつかず、跳び箱の横 体育館倉庫の端 盛り上がったマットの上にちょこんと体操座りで座り、小柄な体を丸くする。目にかかる長髪を払いのけながら、その払いのけた髪のことを考えようとする。

あーせいせいしたわあんな奴消えてさー。ホント、死んじやえばいいのにね、あんなの。アハハ、ウケルー。

体育館から出る三人の女子生徒の声が微かだが聞こえる。確か、あの中には生徒会会計の川崎直美がいたはずだ。恐らく彼女が体育館倉庫の鍵を持ち出したのだろう。

「……………」
涙は出なかった。出そうだったが、出さなかった。自分のこうした待遇に怨恨を抱かなかったことはない。寧ろ、怨恨を高校二年生になってから抱き続けているといってもいいだろう。

彼女　新島春香は同級生三人からイジメを受けていた。初めは言葉による暴力。だが、次第にイジメのレベルはエスカレートしていき、机一面に死ねと書かれたり、上履きを隠されたりは当たり前。酷い時は掃除中、バケツを頭に置かれ、たっぷり入った水を頭から被ったこともあった。

そして、今日。
彼女は朝、誰からも喋りかけられない中本を読んでいると、川崎直美がリーダー格として君臨している三人組から呼び出された。

呼び出された理由は　新島が持つ長い金髪。
見た者全てを振り返らせるその輝く金髪は、自分から染めたりしたもので決してなく、ただ単純に、彼女の自毛が金色だったのである。

私は、生まれた時から金髪だった。お母さんやお父さんから驚かれたけど、二人は私の髪を受け入れてくれた。小学生の時も中学生の時も高校一年生の時も、初めは同級生の皆から驚かれたり先生に怒られたりもしてたけど、皆、結局は私の髪を受け入れてくれた。

「……………だから、私は私の髪を違う色にしない」
黒にも白にも青にも赤にも。

例えば私がこの先ずっと金髪を変えないでも。

例えば私がこの先ずっと金髪を変えないで虐められることになろう

ら震える新島。その姿には、何の決意も見られない。

新島は、怖かったのだ。

黒い髪を初めて金色に染めるように。

その逆　金髪を初めて黒色に染めるのが、怖かった。

私は今のままでいい。今までみたいに金髪で、同級生友達とカツコイイ人の話しをしたり、テニス部で運動して時折笑ったり、朝昼夜と三食キツチリ毎日食べて、毎日毎日同じ生活をする事が出来ればそれでよかった。

「なのに、何でこんな……」

新島は、声に出して泣き始めた。自分は変わらなければならぬのかもしれない。それはそうだろう。周りの状況が一向に変わらないなんてことは有り得ない。中学の時、ある男の先生が歩行者天国でナイフを振り回して三人殺してしまい、学校にテレビの取材がいつぱい来たり　　中学から高校に移った時もそれなりの変化はあったし　　彼氏が出来たり　　彼氏と別れたり　　いつぱい　　いつぱい変化はあった。

今までは、その状況に自分が順応しようとしなくても、自ずと順応出来ていた。

だけど、今回ばかりはそうはいかないのかもしれない。金髪を黒色に染めなければ、いつになってもこのイジメは終わらないのかもしれない。

「……ヒグッ」

でも。

新島は、怖かった。いきなり髪を黒に染めた時、周りの皆がどういう反応をするのか。同級生だけではない。教師は。両親は。何を言っ、どんな表情を新島に浴びせるのかわからない。

それが、怖い。

「ヒグッ。小学生の時、一日風邪で休んだ後、お母さんに行きたくないって言ってもう一日学校休んだっけ……」

涙が出ないように、うす暗い空間の上を向く。体育館倉庫の天井

がそこにはあった。

「私、どうすればいいの？」

思わず出た本音だったが、それに応えてくれる者は誰も居なかった。再び、体育館倉庫に静寂が訪れる。

新島はしっかりと両足を両腕で押さえ込み、膝と胸の間に来た空間に頭を沈める。

「丹羽先生……お願い……助けて……」

丹羽昭博の日々の楽しみは、女子生徒の笑顔を見ることだった。

「おはようございます、丹羽先生」

「おう。おはよう」

言いながら丹羽は、生真面目な女子の硬い挨拶もいいもんだな、と朗らかな気分になる。

「おっはよー丹羽ちゃん！」

「うるせーよお前は」

「な、せんせーい、生徒に向かってうるさいはないでしょ、うるさいはー！」

はいはいごめんなさいねと応えながら丹羽は、活発な女子もまた、うん、いい。ミニスカートがいいね、うん　と、笑みが自然とこぼれる。

教師になって本当によかったと思う至福の時間が、丹羽には三つあった。

まず一つ目に、自身が受け持つ体育の授業。本校に所属していた女性の体育教師が産休で居らず、急遽三年生の男子を受け持っていた丹羽がその女性体育教師の代わりを務めることになったのだ。

つまり、女子高生の体操着姿見放題。更に更に、その体操着という薄着の状態で、女子高生が跳んだりはねたりするのだ。その動作の連動として自然と動いてしまう部分を見るのが、丹羽の何よりの

幸福だった。これがブルマだったらもう何も言うことはないのに……と思うこともないのだが、そんな贅沢はいつていられない。丹羽は、とにかく一年の眼福を心置きなく楽しむだけだった。一学期の女子種目は創作ダンス。それだけでもう充分だろ。今の内だ。堪能しとけ、自分。

思えば四月の割り振りの時に泣いてしまいたかったのだ。男子だけて。男子の体操着見ても何にもならないだろ。ふざけんじゃないぞ校長。そういう流れで殴りかかろうとした拳をよく押さえ込めたものだとも思う。体育教師になったのも女子高生の体操着を見る為だけだったのに。その為に牛乳を一日五リットル飲み身長を百八十センチまでのばし、筋トレをして体全体をマッチョにまでしたのに。チョーマツスルを略してマッチョだ。略せてないとか略し方がおかしいとは言わせない。

そして、もう一つはこうした朝の挨拶の時だ。職員室まで続く廊下の途中、見かける女子生徒から挨拶されることが気持ちがいい。気分がいい。これは教師にならないと得られない特権だった。しかし、同時に教師として、男子生徒も平等に扱わないといけない。霧島のようなテンションの高い生徒は鬱陶しいし、かといって狩谷のようなテンションの低い生徒も厄介だった。男子のハイテンションに合わせることや、こちらから挨拶をしなければならぬというのが尋常じゃないくらい億劫なのだ。その中でもまだ許せるのが新聞部。生徒会長のあいつの挨拶だけだ。新聞部の場合、必ずといていい程可愛い女子が隣に居る。何故かはわからないが、恐らくというよりも確実に、新聞部はモテるのだらう。全校生徒満場一致支持率百パーセントの名は伊達じゃないということか。

「……ったく、ああいう奴が勝ち組っていうんだらうな」

「おはようございます」

「ん。おはよう」考え事をしつつも女子からの声が聞こえれば挨拶に転じる。「……って谷山と三嶋か」

「なんですかその言い草」

言いながら、男子生徒　三嶋勇氣は丹羽に申し立てる。「なんです。俺とニヤニヤが一緒に居てなんか悪いことあるんですか」
「……ニヤニヤって誰のことを言ってるんだ？　まさか谷山のあだ名か？　三嶋。お前、いつも谷山のことをそんな風に呼んでるのか」
呆れたように言う丹羽だったが、頭の中には谷山皆瀬という名前
のどこにあだ名が『ニヤニヤ』になる要素があるのか探したいとい
う欲求と、谷山の全身をなめるように眺めたい欲望を抑えるにはど
うすればいいのかということしかなかった。

「ちよつと勇氣。お願いだから、先生の前で私をそんな風に言うの
はやめて」

「なんだよ。ニヤニヤも俺のこと、いつもみたいにウキウキって呼
んでくれてもいいんだぜ」

「ウキウキとニヤニヤってどんなあだ名だお前ら！」

ネーミングセンスのかけらもないだろその二つに！　と叫ぶ丹羽。
今度は、三嶋勇氣という名前はどこにあだ名が『ウキウキ』になる
要素があるのかを頭の中で考え始めたが、直ぐさま思考の無駄遣い
だと止め、二人を見た。

谷山皆瀬と三嶋勇氣。

生徒会書記の肩書を背負っている二人だ。今期生徒会選挙はそれ
はもう例年に比べるまでもなく凄まじいものだった。斎藤伊里のよ
うに前々から色々な意味でネームバリューを持つ者もいれば、高柳
美香や川崎直美　新聞部のように持ち前の外見で勝負をかける者
もいた。

その中で　この二人は、その両方をもつて挑んだのだ。

グラウンドに集められた全校生徒を目の前にし、二人はマイクが
置かれている壇上へはあがらず、わざとその横で、三嶋勇氣が出来
る限り大きな声で公約を発表していた。ざわつく全校生徒。ざわつ
く職員達。その中に、丹羽も居たのは言うまでもない。そんな演説
を三嶋勇氣は行い、そのすぐ近くでフランス人形のように谷山皆瀬
は押し黙っていた。

しかしながら、その公約を聞いている者は誰一人いなかった。

全校生徒がざわつく理由は二つ。

前々から気になっていた 車椅子に乗る美人さんが生徒会書記に立候補してきたという事実と、その側でいつもいつも美人さんの車椅子を動かしていた正義感溢れる男子が 何故だか一緒になつて演説をしているという事実。

三嶋勇気が公約を言い終わると、静かに黙っていた谷山皆瀬がいきなりこんなことを言い出した。

「私と勇気は二人で生徒会に入ります。片方が落ちたら片方も立候補を取り下げます。…なので皆！ 投票してねっ！」

無表情だった谷山皆瀬のいきなりの笑顔と、普段だったら決して言わないそのハイテンションな言葉は、見る者聞く者全てを魅了したという。

「ズルイよなあ、お前は」

「え？ 私がですか？」

「違う違う。三嶋だよ三嶋」

「俺ですか？ ……何ですか」

何でもなにも、車椅子に座るお嬢様みたいな感じの谷山と、お前は使用人って名目でいつも一緒にいられるじゃねえか、とは丹羽は口が裂けても言うつもりはなかった。

そもそもこの二人は外見だけでいうと全くといっていい程釣り合っていない。三嶋勇気という男は身長も体重も運動神経も成績も全て標準レベル。髪は寝癖がそのままの状態で、特徴がないことが特徴ともいっていい程特徴がない男だった。

対して谷山皆瀬は高レベルの美少女。きめ細やかな肌色に、色気たっぷりの唇。髪をツインテールにまとめる。ミニスカートではなくロングのスカートということが残念な要素だったが、それを補う程の雰囲気醸し出していた。病弱な体がまたその雰囲気を良い方向へと押し上げる。

そんな女子生徒が谷山だった。学校に居るほとんどの時間無表情

なのだが、家に帰ると笑顔で話してくる　という噂を丹羽は別の女子生徒から聞いたことがあった。因みに情報源は三嶋勇氣らしい。まず間違いなく嘘だろう。嘘であって欲しいと思わざるを得なかった。

「……無言になったね、丹羽先生」

「うんそうだな。まあいつか。もうすぐ予鈴もなるしよ、早く校長室に行っちゃおうぜ、ニヤニヤ」

「ニヤニヤって呼ばないで。……ウキウキ」

「お前らとつと俺の前から消える」二人に見兼ねた丹羽は怒りを表情に出して言う。「特に三嶋。てかお前もう家に帰れ。親御さんが心配してるぞ」

「なんでこんな朝早くに帰らなきゃいけないーんだよ、丹羽先生」

呆れた口調で言うと、三嶋は谷山が座る車椅子を動かしてその場を去ろうとする。車椅子を押す三嶋の後ろ姿を見て、心の中でその立ち位置俺と替わってくれと頼む丹羽だったが、何も替わりはせず、徐々に三嶋の後ろ姿が小さくなっていった。

「……ったく。最近良いこと少しかねーなあ。春香とも別れちまつたし」

ボソツと呟いた口を慌てて塞ぐ丹羽。その動作からは危機感が読み取れる。

丹羽の学校での楽しみ　三つ目。

それは、女子高生と秘密裏に付き合うことだった。教師生活五年間。これまでの期間で、付き合った女子高生　教え子の数は二桁を越す。

サラサラな金髪がよく似合う小柄な少女　新島春香もその内の一人だった。

「ん？」

次は誰と付き合おうか考えながら、丹羽昭博は思い出し、そして疑問に思った。

「三嶋と谷山……あいつら、こんな時間に校長室に行って何するん

だ？」

校舎一階　二階につながる階段を挟み、職員室から少し廊下を歩いた所にある校長室。予鈴前の八時十五分という時間において、校長室という一室には誰も居ないのが日常茶飯事だった。校長という役柄上、予鈴後の教師会議に出席しない訳にはいかないからだ。

「……………」

「ちよつとちよつと校長せんせい。そんな風に押し黙ってもらったら僕が困りますって。谷山さんですかって感じですよホント」

しかし　八時十五分の今。

校長室には、ヒゲを蓄えバーコードヘアの校長先生と、異様な雰囲気を持つ男子生徒の姿があつた。二ヘラ二ヘラと笑い、校長先生という学校で一番偉い職業の年配男性を前にすることなどまるで関係ないかのように、おおらかに振る舞う。両腕を大きく挙げ、「ハハハ。いやー、楽しいですねー校長せんせい」と言ってみせた。何が楽しいものか。本気でそう思う校長先生の額には、いつの間にか汗が流れていた。今は机が自分と男子生徒の間を挟み、この得体の知れない男子生徒との距離がとれているからまだいいが、いつこの男子生徒が何をするか　皆目見当がつかない。

窓から届く太陽の光りを自分の背に感じながら、校長先生は周りを見渡す。

この男子生徒の手から出た、『波動』のような何かによって崩壊した校長室を。

額縁は全て割られ、本棚や植木鉢までも無惨に破壊されつくされている。校長室で破壊されていないのは、机と窓と床と　校長先生くらいなものだった。

「何が目的だ、君は」冷静に、校長先生は疑問を口に出す。

「え？　それ言ったら叶えてくれるんですか、校長せんせい」

「……………」
依然と笑い続ける男子生徒の姿が嫌でも校長先生の目についた。
いや。そもそもこの生徒は、本当に男子なのか？

今まで校長先生は、この生徒を男子だと判断していた。けれども、少ししか声変わりしていないであろう中途半端に高い声や、女性か男性か 判断に迷うようなその中性的な顔と、肩まで伸ばされた髪に惑わされてしまった。わかつていいる。この生徒は間違いなく男子だ。男子生徒の制服を着ている時点で確定している事実だ。

だが、そんなことを思わなければやっていけない状況が、校長先生の前に迫っていた。

「いやはいやはや校長先生。僕ね、もう嫌になったんですよ。数値化されたこの学校って奴にです。成績で全てを決めて、後はもうないがしろにしてしまう学校って奴にです。今までは頑張ってきたよ。そりゃね、僕だって下の成績陣に居るのが嫌だったんで頑張りましたよ。自分のやりたいことを我慢して、自分の全てを投げ出してしまうたい感情をなんとか捨て去って。……でもね、校長先生。もう僕は疲れたんです。学校にも、この世界とやらにも」

そう言う男子生徒の右の掌は、開いた状態で校長先生の方に向けられていた。いつでも『波動』を出して、校長先生を攻撃出来ることを示しながら。校長先生は限界まで距離をとろうとし、窓に背をぶつける。

「き、君は、今まで頑張ってきたのだろう？　そ、それに、君は頑張った結果いい成績をとり続けていた筈だ」しどろもどろになりながら、校長先生はなんとか男子生徒の行動を止めさせようとする。「そ、それなのに、何故こんなことを」

「はあ？　何故何故何故ってうるさいですね校長先生」

瞬間、男子生徒の掌から『何か』が発射された。光りに似た波動を模したその『何か』は、校長先生の前にある机に向けられ激突し、大きな音を起てて木片にまで粉碎される。バラバラと顔に勢いよく降り懸かる木片を両腕で庇いながら、校長先生はとうとう、男子生

徒と自分の間に何もなくなってしまったことを悟った。自然と息が荒くなる。

「本当にね……この世界は間違ってると思うんですよ、僕は。今頃斉藤さんが走ってるセンター街を見てみてくださいよ。車ばかり走ってるでしょう？ いや、それだけならまだしも、電車に乗ってる途中に窓から横に去っていく景色を眺めてみてくださいよ。車が見えない景色なんてありませんよ。どこ見ても車があります。温暖化やら地球環境破壊とかなんとかニュースで昨日もやってたんですけどね、そんな意味のない情報流すくらいだったら折角環境破壊してつくった電気を他のことに使えってんです。矛盾、矛盾。矛盾だらけなんですよこの世の中は。矛盾だらけで整合性なんてまるでない何がしたいんでしょうね、この世界に住む皆は。引きこもりやニートという存在の人達なんか特にそうですね。家から何年も何十年も外に出ず、悠々と両親の施し受けるとか意味不明なんですよ。生きてる意味というものは、僕はね、校長先生。我慢することだと思っただけです。やりたいことを我慢してやらなければならぬことを必死になってやるのが、人生というものです。つまり、それをしなくなったら人間じゃなくなるか……人間を越す存在になれるか、どちらかです。あ、結局人間じゃなくなっちゃってんじゃないですか、これ。アハハ。ま、結局のところつはりはですね、それが今の世の中起こりうる事象で、それがこの学校っていう場所で起こりうる事象なんですよ、校長先生」

あれ？　なんか今の学校の話しじゃなかったような……まあいいかそんなこと　と語り続けようとする男子生徒だったが、突如その口が閉ざされた。

「ひいっ」

「うおつと。てか校長先生「ひいっ」て。大の大人がそんな声出しちゃって恥ずかしくないんですか？」校長先生の横の窓を、ガラスの破片を撒き散らしながら突き破った野球ボールを、左手で軽くキャッチし、そしてそのままボール遊びをし始める男子生徒。

「ほらね。結局は皆、こうして暴れたいんですよ。しかしですね、たいていの人達はそれが出来ないんです。何故かって？ 何故なのかって？ そりゃ簡単ですよ、校長先生。要はあれです、先生達自分達より上の身分の人達からによる罰が怖いんです。しかもまあ小学生みたいな反旗の翻し方する奴だなー。こういう奴がドラマとかでよく見る、倉庫に同級生閉じ込めたりするイジメをするんですよね。イジメ、ダメ、ゼツタイ。とかなんとか言っちゃって。結局は学校の先生方は何もしないし何も出来ないってのが現状な訳ですよ。笑えますよね、大の大人が人生経験の圧倒的に少ないガキの行動一つ防げないなんて」

バカらしいにも程があるつつーんですよ校長せんせーい。そう言いながら、男子生徒はボール遊びを止め、左手にそのボールを握る。「ボールか。これもいいなあ」などと呟きながら。

「ハアツ、ハアツ」

もはや校長先生の口からは、荒く息の音しか出されていなかった。男子生徒の異質な言動から発せられる恐怖という恐怖が、校長先生の体を包む。

「うーん？ 何ハアハア言っちゃってんですかー？ 奥さんに秘密で二十三歳の女性と不倫してることでも思い出してるんですかね、校長せんせーい」

「な！」その言葉に、今までの恐怖がなくなる程に驚愕する校長先生。「な、なんでそれを！」

「なんでもいいじゃないですかそんなの。うつわ、不細工だなこりゃ。僕だったら願い下げですね。こんな人」心底嫌そうな顔で校長先生を見る男子生徒。

「う、うるさい！ 君には関係のないことだろう！ いいからこんなことはもう止めて、今すぐ教室に戻りなさい！」

男子生徒の発言でうるたえた校長先生だったが、しかしその発言によって恐怖が少しだけ拭い取られ、自身が発言出来る余裕を得ることができた。今の内に注意しておこう。そうでもしないと、少し

でもこの状況に抗わないと、自分はこの男子生徒に殺されてしまう。だから、校長先生は男子生徒にそう言った。

「はあ？」だが、それは逆効果だった。「本気の本気の超絶本気で、何言ってやがるんですか校長おいい！」

「ひいっ」

「ひいっ、じゃねーんだよクソが！ この期に及んで教室に戻れ？ お前、今まで僕の話しの何を聞いていたんだ！ だから言っただろう！ 僕はもう我慢しないんだよ！ 今までやりたくてやりたくてやりたくてやりたくてやりたくてたまらなかつたことをやりまくってやりまくるんだよ！ まずは勉学の放棄だつていうのに……はあ？ バカじゃないの？ バカじゃないの！ もうお前、死ぬか？ 正直あんたみたいな大人、僕は嫌いなんだよ！ 校長の朝の挨拶う？ そんなもん檀上にあがつて生徒見下ろしながらやるんじゃないやなくて生徒と同じ目線に立ってやれよ！」

校長先生の側に近寄り、顔をすぐ近づけながら一気にまくし立てる男子生徒。その剣幕は、やつ当たり以外の何物でもなかった。

「ふー。まあ、いいか。ポジティブに考えるとしようか。ポジティブにポジティブに。前向きに前向きに。後ろ向きに後ろ向きに、物事を考えましようかね、校長せんせーい」

今までとは別人のようにニヘラニヘラとまた笑い出す男子生徒。情緒不安定な男子生徒の前で、校長先生は完全に力が抜け、腰が抜けてしまう。女座りで窓がある壁にもたれると、「ハハ、ハハハ……」と笑っていた。ただただ、笑っていた。もうそれ以外、何も出来ないかのように。

その様子を見た男子生徒が「チェッ、やりたいことの一つ目校長先生の前で演説はもう終了かー。つまらないなー」と愚痴をたれる。表情が少しだけ暗くなっていた。

「まあ、いつか」そう言うときまた表情を明るくし、笑顔で言い続ける。

「とりあえず、今から僕のやりたいことを言わせてもらいますね、

校長先生。えーと、順番関係なく言つと……『教師を全員殺すこと』、『誰かを洗脳させてそいつに殺人をさせること』、『学校を文字通り崩壊させること』そして、『マンガやアニメのような、超能力バトルみたいなことを僕が作ったルール下で行うこと』……うん。まあ大まかにいつたらこの四つですね。んじゃ、これからやりたいことやらせてもらうんで、そこんところお願いしますよ、校長先生」

それじゃあ校長先生。長い間お世話になりました。正直、嫌がらせ以外の何物でもなかったです。

「さようなら、校長先生」

「ま、待て。聞かせてくれ」校長先生は笑いながら向けられた掌に怯えながらも、なんとか生き延びようと発言する。

その言葉に「なんですかもう。とつとと言つちやってくださいよー締まりが悪いじゃないですかー」と言う男子生徒。

しかしながら命が少し延びたことを悟った校長先生は、この男子生徒に関する疑問点を片っ端からあげることにした。

「き、君の名前はなんだ」

「宮間深山です」

「ミヤマミヤマ？」

「偽名に決まってるでしょこんなの。ていうか校長先生が生徒の名前知らないとか、笑えますね。じゃ、さようなら」

「ま、待て！」男子生徒の声に、急いで何かを言おうとする。「な、なんで君はそんな魔法みたいなことが出来るようになったんだ？」

その言葉にびたりと動きを止めた男子生徒だったが、何も言わずに掌から『波動』を出し、校長先生の頭を、机と同じように粉碎した。バシヤァン、という音とともに、木片ではなく肉片が行き場を失った首から出る流血と一緒に窓ガラスに叩きつけられる。不思議と、肉片が叩きつけられたガラスが割られることはなかった。

後に残ったのは、ビクンビクンと体を震えさせる首の無い歪な死体だけ。それを見下ろしながら、男子生徒は笑ってこう言った。

「僕はね、校長先生。今日の朝、気違いな神様とやらにある超能力を授かったんです。なんでもできる、凄まじい超能力って奴ですよ。人間、力を持てば使いたくなるもんでしょ。恨むなら、その力を授ける人間を僕に選んだ神様さんにしてくださいな」

言っと男子生徒は、ニヘラニヘラと笑う。そして次第に、クツクツク、と声まであげ、最後は爆笑の域にまで達した。

こんな呆気ないもんなんだな、校長先生の死つてさ。

天井を見ながら、晴れ晴れとした笑顔で心地よさそうに言う男子生徒。何ともいえない開放感が、男子生徒を包んでいた。

そこに。

「失礼しまーす」

「失礼します」

車椅子に乗る美少女と、それを押す少年。

谷山皆瀬と三嶋勇氣が、校長室へと入れるドアを開けた。

「なんやかんや言いつつも、やっぱりなんやかんやで俺は凄いい奴なんだって」

「じゃあそのなんやかんやを詳しく教えてよ」

「ああん？ ミサオ……お前、大事なのは過程じゃなくて結果だろ？ 結果を疎かにするんじゃないやねえ、過程を疎かにするんだ。そうすりゃ皆、俺についてくる」

「その結果に辿り着く為には一体どんな過程をふめばいいんだろうね、霧島君は」

朝礼開始十分前の八時二十分の、その二分前である八時十八分。高柳が保健室へと向かった後も、狩谷と霧島は雑談をしていた。周りのざわめきもおさまらない。教室の中には今日の帰りに提出する予定の数学の宿題を終わらそうと必死になっている者も居る。その姿をちら見した狩谷は、ふと霧島君はちゃんと宿題してきたのかなと疑問に思った。そして霧島が狩谷のちら見した視線の先にある宿題を一生懸命にする男子生徒の姿を見ると、「おおふ」と言いながら顔面が真っ青になる。

「……………」その姿を見て啞然とする狩谷。「あの。霧島君、もしかして数学の宿題やってないとか？ 今回の提出範囲ってプリント表裏を合計五枚だから、今からやってもキツイと思うんだけど」

「いや。一応、やった」

「一応ってどういう意味」

「あいつが今やってるプリントじゃないプリントを昨日やった」
「……………」

「しかもな。驚くことに、そのやったプリントを家に忘れてくるといふ失敗まで俺はやっちゃまってるとんだぜ」

「……………」もはや修復不可能だよその失敗談」

呆れを通り越して恐怖にまで行き着いた狩谷だったが、霧島が毎

回毎回の宿題を必死にやってこようとすると真面目な友人だということとを以前から知っていたのでそれ以上言うことはやめることにした。霧島巧という男子生徒はいつもいつもそのやった宿題を何らかの方法で提出不可能にするのだ。前回の宿題提出予定だった英語のプリントは、全ての解答をローマ字で書くという失態をおかし、提出することが出来なかった。狩谷は、「何だよ！ 英語で答え書けなんてプリントの何処にも書いてねえじゃねえか！」という霧島の担任である丹羽に向けて放った言葉を今でも忘れることは出来ない。

宿題をいつも頑張って取り組んでるのに、その前段階で間違えるのが霧島君の駄目なところなんだよな と思いつつも霧島が「やべえよ。流石に今回の宿題はこれからやっても間に合わねーよ。ていうかこの学校おかしくね？ 昨日と一昨日が日曜日と土曜日だからって俺達高校二年生に重労働要求し過ぎじゃね？ アツハハ、メガネは顔の一部じゃないのに……見てくれよ神様、この俺のメガネ俺につられてふちが青くなっちまったぜ……」というような呟きをぶつぶつと繰り返す姿を見て、ため息をつきながら、自分のバッグをガザガサと探り始めた。

「霧島君」

「ああん？」

「見下ろしながら青ざめた顔でそんな反応しないでよ……。ほら、これうつしていいよ」そう言う狩谷の右手には、びっしりと計算式が書かれた五枚の数学プリントがあった。それを見て固まる霧島。「お前。つまり、俺にこのプリントに書かれている答えを書きうつせって言ってるのか？」

「……まあ、そうだけど」

「断固拒否する」

「何でその結論に至っちゃったの！」

狩谷が叫ぶと、「チツ、仕方ねえ。結論に至るまでの過程を話す俺を後で褒めるよ」と顔を青くしたまま霧島はこう言った。

「あのな、ミサオ。自分じゃない奴が書いた答えをそのまま何も考えずにうつしたら、自分の為にならねえだろ」

霧島がその言葉を言うという事実には動揺したが、なんとか立て直す狩谷。「まあ、そうだけど」

「これすなわち高校生の真理だぜ。宿題をやらない高校生なんて高校生じゃねえ。だったら何の為に義務教育じゃない高校に宿題をやらぬ奴らは入ったんだよ。意味わかんねえよ。マジわかんねえよ。だったらやめろよ。やめちまえよやめちまって全力で親にローリング土下座しろよ！」

机の上に立ち、何故だか天井を指差しながら怒った顔でそう言う霧島に対し、「ちょ、落ち着いてよ。皆見てるよ霧島君」となだめようとする狩谷だったが、そこでどこの学校でも大体お馴染みである例のチャイム音がなり、霧島の言動が一時キツパリと止まった。それに伴い、はいはいもうなれましたよ霧島のこの雰囲気、と言わんばかりの生徒達のため息も止まる。

両腕をだらりと下げ、そしてゆっくりと机から降りる霧島。狩谷は割れ物注意の配達物を見るかの如くその姿を見ていた。

「ミサオ」ボソリと言う霧島。その言葉に、「な、何かな霧島君」と狩谷は答える。

「……俺、一回家に帰るわ」

「いやいや何で！」思わず叫ぶ狩谷。「何でだよ霧島君！今鳴ってたじゃん！予鈴のチャイム鳴ってたじゃん！朝礼開始十分前の合図が予鈴じゃん！それなのに何で帰るの！」

「逆だ。だからなんだ、ミサオ。俺はとうとう聞いちゃったんだ。予鈴のチャイムってやつをよ」

「何そのカツコイイ台詞言う雰囲気！」

そんな狩谷の悲痛な叫びを無視して、霧島は机じゃなく地面にちゃんと立っただまま天井を見上げて語り続ける。

「そして俺は思い出しちゃったんだ。ある一つの事実」体全体が震えたまま、少し涙目になった霧島が狩谷の方を向いた。狩谷が少

止まる訳にはいかなかった。副会長として。しいては一人の女子高生として。文化祭の準備会議に間に合わないだけならまだしも、遅刻は流石にしてはならない。

「そもそも今日は家を出たのがいつもより少し遅かったのが悪いんだっての。そりゃ私だって早く出たかったよ。早く家を出たかったよ。けどしょーがねーじゃんか。二葉の奴が深夜アニメ録画したのをみたくって言うてきかねーんだもんよ。しかしあいつ小三だよな。大丈夫かあいつ……」

「おねーちゃん、もしかしてそれって恐竜王女ラズベリーののことを言ってる?」

「うおあつ!」

気付くと齋藤の横にはランドセルを背負い、学校指定のものだろうか　白いヘルメットを被った小さい男の子がいた。誰も聞いていないと思いついて言った独り言を聞かれたことを知り赤面しつつも、「お、おう。確かそんなタイトルだったぞ、二葉が録画してたのは」と何とか齋藤は返した。

齋藤の言葉を聞き、「へえ。興味深い小学三年生だね、二葉君って人は。友達になりたいなあ」と齋藤を見上げながら子供は言う。

「マジかよ」子供の発言を聞き正気を保ちにくくなる齋藤。「なあ。近頃の小学生は夕方や日曜の朝だけじゃなくて、深夜にもアニメを見やがるのか?」

「まあね。おねーちゃんの昔時代はわかんないけど、少なくとも今の時代の僕の学校では皆見てるよ。今期ではダラララとかが面白いかな」

「墮羅羅羅? 何だそりゃ」

「画数が凄まじいね、おねーちゃん」

ま、後はハンマーハンマーとか、キズの旅とかが面白いかな。その中でも恐竜王女ラズベリーは凄いな。うん凄いな、あれは　と　言う子供を見て若干引きながらも、私の弟は学校じゃこんな感じなのか?　と思つた齋藤は、ある明確な一つの意思を持って、依然喋

り続ける子供の視線と同じ視線の位置になるよう座る。

「なあ、お前」

「僕の名前はお前じゃないよ、おねーちゃん。僕の話はラズベリーの姑と呼んで」

「すまん敵しい」

「じゃあラズベリーの」

「ラズベリーシリーズから離れるよ!」

「なにさもう。じゃあもういいよ。何、おねーちゃん」

「その、恐竜王女ラズベリーってのはよ」言いながら額から冷や汗が流れるのを齋藤は感じた。

それでも 齋藤は口を閉じようとはしない。

この奇妙な子供からどんな言葉が返ってくるか怖くても、齋藤は一つの疑問を聞こうとすることをやめようとはしなかった。

「一体、どんな話なんだ?」

早朝。視聴する準備を早々に済ませようとしていた齋藤には、弟がどんなテレビ番組を見ているのか気になりながらもそれを確認し切ることは不可能だったのだった。

子供の目を真っ直ぐ見据えながら齋藤がそう聞くと、その真剣な空気を読み取ったのか、子供は「どうやらおねーちゃん、本気みたいだね。いいよ。教えてあげる」と答えた。思わずゴクリと唾を飲み込む齋藤。信号はとうの昔に青にかわっていたが、今はそれどころじゃなかった。

そして、一息つくとき子供はこう言う。

「恐竜の龍崎と王女であるミサコと、王子様のラズベリーが繰り広げる三角関係がテーマのどろどろな恋愛番組なんだよ」

「目を覚ませ私の弟!」

青空に向かって叫び、じゃあなラズベリーの姑ちゃんとした小学生らしい人生歩めよ頼むから! と去り際に言うと、青信号の横断歩道を再び駆け抜け始めた。

「二葉……二葉あ! ねーちゃんの育て方が悪かったのか? なあ

？なあ！何でだよ、二葉あ！」

叫んではみたが、周りの老若男女が振り向くだけで、勿論といえば勿論のことだが、遠い場所で今頃学校に居るであろう愛する弟には何も届かなかった。

「忘れよう……って忘れられるかこんなの！」

予鈴が鳴る数分前。新島は自分の金髪を触りながら、丹羽に初めて注意されたことを思い出していた。

「確かあの時、私の髪はまだこんなに伸びてなかったっけ」

高校一年生の入学式で初めて丹羽の顔を見た時、新島は何も丹羽に対して感じなかった。寧ろ、嫌いな印象を受けた。なんだか、上手く言えないけど嫌な人だな　と、その時の新島は思っていたのだ。新島には、周りの女の子が、ねえあの先生かつこよくないと話し合う理由もよくわからなかった。その時、全校生徒が新島の金髪に対して話し合っていたことも新島は気付いていたが、無視することにした。

丹羽という先生にそういう感想を新島は確かに抱いていた。入学式の後、色々な先生や生徒にこの金髪について質問や説教を受けたが、新島は髪を黒く染めるのが怖かったので、全て上手くかわそうと努力していた。

そしてそんな言及も、もうされなくなった高校一年生の冬。

「あー。おい、その盛大に校則違反してる金髪。ちょっと俺んところに来い」と、丹羽は突然新島に言ってきたのだ。下校しようと周りに誰も居ない下駄箱の前で革靴に履きかえようとしたその時だった。

この先生は、今更私に何を言うつもりなんだろう。というか、そもそもこの先生って私の担任でもないんだけど。

不満と疑惑しかなかった新島は、「何ですか。何か私に用がある

なら今ここで言ってください」と自分でもわかる程嫌な表情をしながら丹羽に言った。

その対応を見て一瞬呆気にとられつつも、「なんだ。新島ってそんな反応も出来るんだな」と言いながら、下駄箱の前に居る新島に近づいて行く。

「え、ええ？」うるたえる新島。「な、何……」

そして、何も言わず新島の金髪の頭を右手でポンと軽く丹羽。その顔は、真剣そのものだった。丹羽の突然の行動に顔を真っ赤にし、その手を払いのける新島。

「な、なな、何ですか！ セクハラですか！ これが所謂セクシャルハラスメントですかっ！ 教師と生徒のセクシャルハラスメントなんてどこにも需要ないですよ！」

「そこまで飛躍するとは。スゲーな、新島」

それでも尚、頭に手を置く丹羽を出来る限り睨みながら「何なんですかもう。何が言いたいんですか、丹羽先生」と何とか新島はそう言い放った。

「何が目的かって？」すると丹羽は、新島に向けてこう言う。

「ただ、お前の髪を触りたかったただけだけ」

そう言う丹羽の目は本気だった記憶が、新島にはある。

あの時からかな……私が、丹羽先生のことを普通の先生だっって見ないようになっただのは。いやいや、違うよ！ 普通の先生じゃないっていうのはあの、その、私の金髪を頭ごなしに叱るような先生じゃないってだけで！

「ああ、もう。何なのよ私。女々しいよ、こんなの……」

もう終わったことなんだ、丹羽先生のこととは。

そう思いつつも、心の底では諦め切れない部分もあったと言われると、はつきりと、違うとは言いつ捨てることができないことが、新島の心を苦しめていた。

「忘れたいんだけどなあ、丹羽先生のこと」

やがて、体を丸くする新島が居座る体育館倉庫にも、予鈴が響い

た。

丹羽は少しずつ遠ざかる三嶋と谷山の背中を追った。廊下で走るという校則違反をしている訳だが、当の本人は全く気にしていなかった。

「おい三嶋、谷山」すぐに追い付いた丹羽。「お前ら、ちょっと待て」

「なんだよ。まだ俺達に何か用があるのかよ」

「やめなよウキウキ、そんなに突っ掛かるの」

「だってよー、ニヤニヤと二人っ切りの時間を邪魔するんだぜ、丹羽先生」

「もう、ウキウキしたら」

「よしわかった。一旦黙って先生の話しを大人しく聞け」

三嶋と谷山の絡みを聞いて鬱陶しく感じた丹羽が苛立ちを隠せない物腰で言う。その言葉に何の感慨も抱かないまま、三嶋は「何だよ」と言い返した。

「お前ら、予鈴直前のこんな時間になんで校長室に行くんだ」

「ああ、そういうことですか」丹羽の言葉を聞き対応する谷山。「

私達……」というか、私が少し、校長先生に用がぁあります」

「校長に用？ 何の用だよ」

「この学校のバリアフリーをもう少し広げて欲しいと思ったんです。ほら、エレベーターもないじゃないですか、この学校って。ウキウキ……ユウキが苦しそうにしている姿を見るのが嫌なので、少しでも……少しでも、勇気の負担を軽くして欲しいんです」

「そうなんだよ！ ニヤニヤは俺のことを考えてくれてるんだ！

俺とニヤニヤの間には、バリアフリー以外誰も入れさせやしねえ！」

「ウキウキ。もう、先生の前でそんなこと言わないでよ」

「わ、悪い。なんか、無意識の内に言ってた」

自分を無視して見つめ合ったまま話し合う三嶋と谷山の姿を見た

丹羽は、何だかもう馬鹿らしくなっていていき、「ああそうかよ。もう予鈴もなるから早めに行けよお前ら」と言うと二人を背中にとぼとぼと職員室まで歩くことにした。ため息をこぼす。

「あんな奴らなんか忘れちまえ、俺」

予鈴前の数分。

この数分が　丹羽が三嶋と谷山という二人の生徒と会話が出来た最後の時間だった。

「失礼しまーす」

「失礼します」

そう言いながら校長室に入った二人が見た光景は　にわかには信じられない光景だった。

「えー！」「……キャーッ！」

校長室が　荒らされている。床には木片が散開し、賞状が入っていたとみられる額縁が割られた状態でちりばめられ、本棚の中の本がバラバラにまかれていた。扉の前には少しあるが、その他の場所には足場がないといつてもいいような状況になっている。

そして。谷山の悲鳴の原因。

新鮮な血の臭い。

整った顔を持つ笑顔の男子生徒の後ろに　頭部がない人体が、そこにはあつた。小太りで、身なりをきちんとしている様子だったが、両足を開いた状態でだらしなく座るその人体の首があつた場所から血が流れ　服が赤く、床が赤く染められている。

それなのに。

そんな状況の前に存在して居るのに。

「ああ、谷山さんと三嶋さんか。いやいや、どうもどうもおはようだね二人共。ほら、ちょっと足場がないけど、二人を歓迎してあげよ。ほらほら入って入ってー」

その男子生徒は。

服に返り血を浴びているにも関わらず、ニヘラニヘラと、笑っていた。

「いや。いや。嫌あつ！」

異常な光景を見て頭を抱え込み、悲鳴をあげる谷山。その声を聞き、信じられない光景を見て呆気にとられていた三嶋が、恐怖を無理矢理振り切り、車椅子をひいて校長室から出ようとした。

しかし。

「何だよこれ」

彼の後ろにあつた筈の 扉が、なくなっていた。代わりに白い壁に阻まれており、どうあがいても 拳で何度も叩いても、校長室から出られる気が全くしない。

「何だよ……何なんだよこれはっ！」

三嶋は気付いていた。

扉があるとかないとかそんなこと関係なく、それどころか俺とニヤニヤはこの校長室に完全には入っていないかつた筈だぞ !

「どうやら三嶋君は気付いたみたいだね。谷山さんも気付いたのかな？ ま、どっちでもいいからとりあえず気付いてくれればそれでいいや」そう言つて二人を真正面に見る男子生徒。「そうさ。君達は校長室に入り切っていないかつた。それなのに 校長室に閉じ込められたんだよ。扉はあつた筈じゃないのかいつて？ うんうんそう言いたい気持ちもわからないでもないよ。だけど、それなのに君達二人は、僕 능력によつて閉じ込められてしまつたんだね、これがさ」

いやいやいいね三嶋君の反応は。谷山さんのその悲鳴もそそれるものがあるよ、うんうん と気持ちの良さそうなうつとりとした顔をして二人に言う。校長室には、悲鳴を通り越した谷山の「ヒグッ、ヒグッ」という泣き声と 「開けよ！ 開けよ！ 頼むから開いてくれよ！」という三嶋の声と ガンガンガンという三嶋が壁を拳で思い切り殴り付ける音が響いていた。白かつた壁に、

少量の赤色が染まる。それでも、三嶋は殴り続けていた。

「だからさ、そこは殴っただけじゃ開かないし、その殴る音も向こう側には響かないから何の意味もないよ。あ、因みにさ、谷山さんのあのキレイな悲鳴は全然廊下に響いてないからねー。校長室より外には誰も不審に思わないように何も音を響かせないように、カッチリキツチリ内側だけ防音してるから。だからこの校長室は所謂出来損ないの密室って訳さ。来る者微妙に拒まず、出る者微妙に拒まず されど、出る物極端に拒まず みたいな感じかなー」

こーんな感じの密室が見た目は子供素顔は大人の名探偵の前に現れたら眠りの吾郎さんはお手上げだよねー、と高らかに発言しながら男子生徒は見上げていた。これまでに行った自分の行動。これから起こす自分の行動。それら全てを思い出し想像し、心の底から楽しみながら。

アハハハハと笑いだした男子生徒の姿を把握した三嶋は、すると「おいお前」と言い、ゆつくりと後ろ 男子生徒の方を向いた。その表情には、恐怖など微塵も残っておらず、あるのは怒りだけだった。車椅子の前に出て、男子生徒から谷山を守るように、いきり立つ。

「なんだかい三嶋君。そんなに怒っちゃってさ。あ、わかったよ。あれじゃないかな？ ほら、君って昼間に再放送されるドラマが好きだったじゃない？ だけどあれって日曜日はやってないからそれで怒って」

「黙れよ。もう、黙れ」

「……へえ。この校長先生を見ても、そんなことが言えるんだ。凄いな、三嶋君って」

じゃあもうこんなの要らないかな、と男子生徒がつぶやくと、校長室から、壁によりかかっていた校長先生だった物体が一滴の血まで含めて、全て消え去った。床を汚していた赤色も、ガラスを汚していた赤色も全て消える。

そして、それと同時に、校長室にある残骸が全て消えてなくなっ

た。

校長室に在るのは。

車椅子に座る谷山皆瀬と三嶋勇氣。そして、返り血がすっかりなくなり、ニツコリと笑う男子生徒のみ。

それ以外の物質が全て、消えてしまった。

「……………」

その状況に驚きながらも、三嶋の頭には男子生徒に対する怒りしかなかった。

怒り。そう、怒り。

校長先生を何らかの方法で殺害し、谷山皆瀬を怯えさせた、男子生徒に向けた怒り。

「おい」

「何だい何だい？ 谷山さんのリアクションは正直微妙だったけど、君のそういう無謀なリアクションは好きだよ、僕という人間はさ。いや、寧ろ大好きというべきかな。だってこんな圧倒的な力を見せているにも関わらず尚且つ無謀にも果敢にも僕に立ち向かおうとしてくるんだもんさ」

「うるせー！ その減らず口を今すぐやめろ！」

そう言つと、ダッシュで男子生徒まで近づき、血が出ている右拳で殴りかかるうとする三嶋。

だが。

「そんな単調な展開じゃあ、僕は退屈なんだよねー三嶋君さー」

「は？」

振りかぶった拳が。

男子生徒がかざした右の掌から出た波動によって、バシヤアンと無くなっていた。

「……………うわああああああ！ うわあああああ！ ああああ！ ああっ！」

一瞬何が起こったかわからず静止した谷山だったが、ピタリと立ち止まり、右腕の先にあるべきものがないと知ると 体中なら汗

を噴き出し、血が勢いよく飛び出る先を左手で必死に抑えようとした。その姿をみて、もう一度乾いた悲鳴をあげる谷山だったが、その悲鳴も直ぐさま止められてしまう。

「ん！ んん！ んんんんん！」

「あー、なんか喘いでるみたいだね谷山さん。うんうん、実にいいよ谷山さん。口を開けられないようにしただけでまさかこんな声を出してくれるなんてさー。何？ サービスなのかな？ じゃあ御礼言つとくね。ありがとうね、谷山さん」

すると、男子生徒の声を聞いた三嶋が苦痛の中、男子生徒に向けて苦しげに視線を向けた。右腕を抱え込み、激痛が走る体に鞭を打ち、谷山を傷つける男子生徒に向けて必死で声を出す。

「お、い……」

「……凄いな、三嶋君」感嘆の言葉を漏らす男子生徒。「普通の高校生だったら、右手がない状態で普通に喋るなんて不可能に近いよ。凄い。凄い精神力だね、三嶋君」

「うる、さいってんだ。ニヤニヤに、ミナセに危害を、加えるな。

これ以上、何か、したら、俺、が、お前を、許さ、ない」

「……そんなこと言っただってさー三嶋君。じゃあさ、そのニヤニヤが 危険をかえりみずに僕に危害を加えようとしてる時はどうすればいいのかな？」

「な……」

そう言う男子生徒の言葉によって振り返ると。

「んんんん！ んんんん！」

谷山が。

車椅子の前にフラフラと立ちながら、男子生徒と三嶋の姿を視界に入れていた。

「やめる、ミナセ！ 無茶するな！ お前、立つだけで限界だろ！」

三嶋が言うがすぐに前から音を起てて倒れる谷山。急いで三嶋は駆け出し、口がどうやっても開かない状態で、涙を流す谷山を左手で抱きかかえる。

「んんん、んんんんんっ！」

「ユウキが、死ぬのは嫌っ！」かな。凄いな、この二人。他人の為にここまで出来るなんて……」

抱き合う二人を見ながら感慨深い表情をする男子生徒。

すると、ここで朝礼十分前を示す予鈴が鳴った。

「お、予鈴だね。そつかそつか、もうそんな時間か！。早いね、楽しい時間が過ぎるつてのはさ！。八時からここに居たのにもう二十分経つなんて。信じられないよホントー」

その予鈴に気付くのは、何も男子生徒だけではない。

苦悶の表情で床にへたれる谷山の頭にポンと軽く左手を置き、無理矢理笑顔をつくると、何かを覚悟したかのように立ち上がった三嶋も 例外ではなかった。

「おい」

「その言葉も結構聞いたね！。何だい？ 今度は何をやる気なのかな？ いやー楽しみだな！。三嶋君が何をしてくれるのか楽しみだ！。その行動言動によっちゃあ、谷山さんの口も三嶋君の右手も元通りにしてあげてもいいかもしれないね！」

「それは本当なのかよ」思いもかけない言葉に必死の形相で食らいつこうとする三嶋。「本当に、ミナセを元通りにしてくれるのか？」

「……この期に及んで谷山さんの心配しかりないんだね、三嶋君は。凄いを通り越して素晴らしいよ、君。うん、約束する。ここで何か僕を楽しませてくれることをしてくれたら、君達二人を元通りにしてあげる」

「そつかよ。なら、安心して言える」

三嶋が谷山を守らなければいけないと、思いついたその覚悟。

その覚悟の全貌を、三嶋は言い放った。

「ミナセにこれ以上危害を加えないと約束するなら 俺は今からお前の言うことをなんでも聞いてやるよ。校舎を壊せというなら校舎を壊すし、人を殺せって言うなら そいつを何の迷いもなく殺

してやる。だから、これ以上ミナセに危害を加えないでくれ」

「ハハ、ハハハハハハ！ アハハハハハハ！」三嶋の言葉に、たちまち笑い始めた男子生徒。「何だよ何だよ三嶋君さあ！ 谷山さん以外ならどうなつたつていいってことかい、それつて！ アハハハハハ！ アハハハハハハ！ 正気かい君は！ ある意味僕よりたちが悪いんじゃないかなあ！ 凄い正義感だね！ 日曜日の朝の時間帯にこんなヒーローアニメ放送したら即刻打ち切りコースだよ！」

「いいねえいいねえ三嶋君さあ！ いいよ！ それいいよ、三嶋君！ と叫ぶ男子生徒だったが、その声が突如止まった。

そして、男子生徒の視線がある一人の女子高生を貫いていた。

谷山だった。

谷山の目も男子生徒と同じ視線を向いていたが、その目に刻まれた決意の差が違っていた。血走り、赤く染まった頬など関係ないように、ただ、ただ、男子生徒に何かを伝えるように。

「声、出してもいいよ、谷山さん。その言葉は君の口から聞きたい」冷静に言いながらも笑顔の男子生徒は、依然谷山を見ていた。

「私も誓います！ ユウキが助かるなら。ユウキ以外の奴がどうなるうと私には関係ない！ 私にはユウキがいればそれでいいから！ ユウキ以外は要らないから！ だから、だからっ！」

「ミナセ、ミナセっ！」血が流れる右腕も一緒に、三嶋は谷山に抱き着いた。

「お願い、ウキウキ。ニヤニヤつて、言つて」

「……ニヤニヤっ！」

「ウキウキっ！」

その二人の姿を見て、「これが生徒会で有名な二人の真実つて訳か」と男子生徒は呟いた。その笑顔からは、驚嘆と称賛の意が込められていた。

「アハハハハ。凄いね素晴らしいね凄まじいね。こういうことだよ、我慢をしない生き方つていうのは。いいね。二人共、いいよ……。」

君達二人は、最高だよ！」

男子生徒は、泣きながら抱き合う二人にそれぞれ右手と両の掌を向けた。

「ニヤニヤあ……」

「ウキ、ウキい……」

やがて。

互いのあだ名を言う二人の言葉が途切れ。

いつの間にか右手が出現した三嶋勇氣と いつの間にか車椅子に座っていた谷山皆瀬の視線が

二人の、焦点を定めていない黒色だけの目の先が

男子生徒を 男子生徒だけを、捉えていた。

「いいかい。今から君達は僕の二体目、三体目の操り人形だ。いやいや、僕が操る人形だから、君達はもうただの人間じゃなあない。

君達は、僕の超能力の一部分を得たんだ。今から君達には、大量虐殺をしてもらうよ。いいかな？」

「了解しました、梶田洋二様」

「おっと、また失敗した。他人を自分の完全な操り人形にする」

能力じゃあ、様付けが前提らしいねー。さっきもそうだったからない。ま、いつか。今直せば」

そう言うと、男子生徒 梶田洋二は、二人に掌をかざしながら、ボソボソと何かをつぶやいた。

そして、車椅子の取ってを三嶋が両手で握ると、二人の姿は、車椅子と共に、バシユン、という音を起てて消えてしまった。その何も無い空間に、男子生徒だけが残される。

「うーむ。どうやら校長室にいる間、生徒には僕の存在が認識出来ないようにしておいてよかったのかもしれないな。無駄なことかもか思ってたけど、これはこれでいい演出になったかも」

両手を掲げながら、ブツブツと呟く男子生徒。その顔は、至福に充たされていた。

「僕の名前は梶田洋二じゃない。僕の名前は新聞部ってね」

「さーてそろそろ始めようかな。なーに、一秒もかからない作業さー」。

「言つと男子生徒。新聞部は、掲げたままの両手から、五つの小さな光りの球を出した。やがてそれらは見えない存在と化しながら、割れた窓からどこかに飛んでいく。」

「彼女以外は誰でもいい。とりあえず、彼女にだけはあれが行くようになっていればそれでいいやー」

予鈴のチャイムを聞いて教室の外へと飛び出した霧島を見送り、そのままため息をついた狩谷は八時二十一分になろうとしている今、教室の中央に位置する自分の席に座って、次の一時間目の英語の授業で行われる英単語テストの予習に励んでいた。机の上に学校指定で買わされた暗記帳だけ置き、開いた状態になっている問題集をぼんやりとした目で眺める。

「はあ」

そんな狩谷は最近、自分のこれからの人生について考える時間を設けることを避けていた。前回のテストも総合点が平均点の少し下だった。狩谷が現在通うこの学校が公立で、しかも比較的下のランクに位置するにも関わらずだ。

どうすればいいんだろう。

どうすれば、僕は楽しい生活を送れるんだろう。

狩谷は特に、霧島と高柳を見る度にそれを強く考えていた。

霧島は成績が低いものの、それでも霧島は霧島なりに頑張っている。それはよく喋る狩谷が一番わかっていた。霧島は、見た目や言動こそふざけているものの、やるべきことは最終的にこなしてしまふタイプの人間だ。いずれ、良い成績を取るに違いない。

更に、高柳という一人の女子が、狩谷を苦しめていた。どこからどうみても非の打ち所のない少女。何でも出来て、何でもこなし、何でもやり通す、そんな少女。

僕とは本当に正反対だよなあ、ミカって。

改めてその事実を確認し、改めてため息をつく狩谷。俯くその表情からは、疲れと諦めが浮かび上がっていた。

何をしてもない、自分の人生。

何か。何でもいい。それこそ、昔のドラマみたいに電車の中で酔っ払いに絡まれた女の人を助けるとか 高校にいきなり東大受験

専門の講師がやってくるとか 何でもいい。

「何でもいいからさ」

神様でも仏様でも誰でもいいからさ。

とりあえず、今の僕のなあなあな人生を変えてくれる そんなイベントを、僕にふりかけてくれないかな？

「……ないよね」愕然とした様子で、一人、そう呟く狩谷。

狩谷はわかっていた。この現実にはそんな都合のいい展開はないのだと。それならば、自分自身が努力して変えなければいけないのだということ。

もう一度溜息をつく、「よし」と何かを決心した様子で小さく呟き、そしてもう一度しっかりと暗記する為に、英語の暗記帳を熟読しようとした

その時だった。

「痛っ」

ふいに、頭の後ろの部分に、小さな針のような物質が刺さった痛みが生じた。不審に思いつつ狩谷はその痛みの元を探ろうと、頭の後ろを右手で触ってみようとしたが、その行動はとある衝撃によって遮られる。

「うわっ！」

一介の人間では一瞬で処理出来ないようなとてつもない情報量が、狩谷の頭に流れ始めた。思わず出たうめき声は、狩谷の声が元々小さいおかげもあって教室のざわめきに掻き消されたものの、それでも、狩谷は机の上にある暗記帳に頭を沈めて、無言で堪えていた。

情報という情報という情報という情報という情報という情報 狩谷の頭の中を問答無用で流れる情報という情報という情報という情報という情報が。

狩谷を、苦しめる。

それが少しの時間なのか。あるいは長い時間なのか。目を閉じて

必死に堪える狩谷にはわからない。

「……………」

やがて、その流れる情報の圧迫もおさまり、汗が額を伝う中、狩谷は今さっき自分が得た情報という 生み出され吐き出された自分の『能力』を理解していた。

何だっただらう、今のは。

そう思いつつも、狩谷は自分が得た『能力』について思考し始めた。

もしこれが本当に僕の『能力』なら。

僕はとんでもないことが出来る様になったということじゃないかな？

「……………」無言で自分の能力を使おうとする狩谷。しかし彼の心の中には、戸惑いしか残されていなかった。

そして。

『だつりーよなホント』『うざいなーこいつ』『一時間目の授業何だっけ』『だりーようぜーよめんどくせーよ学校』『へっへっへ、チート使えばいいじゃんかよ』『あ、やべ、あいつスカートはだけてる』『やっぱカツコイなーカキピー』……………。

狩谷の中に流れ始める沢山の言葉が、狩谷の疑惑を確信へと変更させる。

「嘘でしょこれ……………」

そう呟いたものの、狩谷の頭に浮かび上がるこれらの言葉は止まる様子がない。

狩谷は、確信した。

「僕の能力が心を読み取るっていうの。これって、本当なの？」

そう言う狩谷に産み落とされた能力は 他人の心の呟きを聞き取れるというものだった。いきなりの展開に呆気にとられた狩谷だったが、突然使える様になったこの能力がどんなものなのか知る為一度止めた能力をもう一度使う。それが好奇心からくるものなのかそれが恐怖感からくるものなのか 狩谷にはハッキリしな

つたが、それでも狩谷は能力を使った。

「……………」

まず、適用される範囲について。

僕の座る席からゆっくり教室の皆に使おうとしたら、何か円みたいになっただけだ。

丸い円にも楕円にも線にも、狩谷が広げられる範囲は変わった。そして一瞬だけ、学校全体を覆うように勢いよく丸い円を巨大にしてみると、何百人かの生徒や教師達の心の呟きが、それこそ一瞬にして一斉に狩谷を襲い掛かる。瞬時に鼓膜を押さえる動作をしたが、心の呟きは耳を通してではなく頭を通すものだったので、全く意味をなさなかった。能力の発動を即座に止め、荒ぐ息と肩を整えつつ、狩谷は冷静に考える。

どういうことが僕の元に訪れたのかよくわからないけど。それでも、これだけは確信出来る。

「『これ』を僕は、本当に使うことが出来るんだ」

狩谷は理解する。そしてその理解の先に一体何が待ち受けているのかを想像しようとする。真っ先に思い浮かんだのが、自分が超能力者としてテレビ番組に出ている姿。身なりを整えた派手な衣装に身を包み、拍手喝采を受ける自分の姿が思い浮かんだのだが、狩谷は、何馬鹿なこと考えてるんだ僕は、と思い否定した。

こんなよくわからないものを言い触らしたりむやみやたらに使ったら、どうなるかわかったもんじゃ無いじゃん。

狩谷は愕然とした。

狩谷が欲しいイベントは、こういう『非日常』ではなかった。狩谷は、狩谷自身の普通の人生を今よりも良いベクトルへと傾けさせる何か欲しかったのだ。

それなのに、彼に訪れたイベントはこれ程までに危なっかしいものだった。

「はあ。こんな要らないって」

ため息を零す狩谷。

そして狩谷は、能力を使えるようになって一分も経たない内に、その能力を捨て去ることにした。

だけれども。

狩谷は、気付いていなかった。

何故いきなり、こんな『非日常』が自分に訪れたのか

その、一つの思考すべき問題提起に。

そして。

その問題提起を誰も考えようとしないまま 狩谷を含む誰もが誰も、今日一日が、繰り返す毎日の中の些細な一日だと思い込んでいるまま。

新聞部というある一人の男子生徒が操るそれらは、彼らの元へとやって来る。

「キヤアアアアアア！」 「うわああああ！」

二階の廊下を伝って響く、生徒達の断末魔ととれる悲鳴が 突如、狩谷の後ろから聞こえてきた。同時に、窓が盛大に割れる音とありとあらゆるものが壊れ、床にたたき付けられる音が聞こえてくる。

「な、なんだ？」

「一組の奴ら、どうしたんだ？」

沸き起こる悲鳴に恐怖を感じる、狩谷と三組の生徒達。一人の女子が好奇心に駆られ教室を出る。狩谷は、先刻の『非日常』が衝撃的過ぎたのか、立ち上がって後ろを見る行動しか起こさなかった。

「はい？」

狩谷は。

そう言った三組の女子生徒が。

直線に進む線状の光りの、レーザーのようなものにより。

穴が開いてしまっている自分の腹を触ろうとしたが、そのまま意識を失い、廊下にバタリと倒れた姿を、見た。

三組の生徒全員が、その一瞬の出来事に息を呑む。

「うわああああああ！」 「キヤアアアアアアアアアア！」

そして。校舎二階に位置する高校二年生全員が、阿鼻叫喚の渦に巻き込まれた。

その渦を巻き起こしたのは。

平凡な少年だった『物』と、車椅子に座る美少女だった『物』。

三島勇気と、谷山皆瀬だった。

「遅刻遅刻遅刻遅刻遅刻遅刻ゴホツ、ガホツ！」

斎藤はセンター街を駆け抜ける。何物にも縛られない状態のまま、駆け抜ける。

彼女は気付いていなかった。先刻、自分が対向する自転車に激突したことを。先刻、自分が、早朝特訓していた野球クラブの少年によるホームランボールを頭から喰らったことを。それでも彼女は走り続けるのを止めようとはしない。

今は八時二十二分。予鈴はもう鳴った筈だ。だったらもう、なりふり構っちゃいらねーだろ！

彼女は何も気にかけない。いけないとは思いつつも赤信号を無視し、センター街を駆け抜ける。気にかけるのは、時間だけ。

斎藤伊里という、学校に未だ着いてすらいない少女は気付く余地もなかった。

自分が今向かっているその場所が、非日常が織り成す惨劇の場所となっていることに。

「……はあ」

予鈴が鳴ったってことはもう、朝礼十分前かあ。早く行かないと間に合わないなあ。

新島はそう思いながらも、どうしようもない自分の現在の状態のため息をこぼす。何をすることもこの場所に閉じ込められている限り、

どうしようもない。それだったら諦めて、座っているしかないのが新島の現在の状態であった。

「丹羽先生」そうして新島は、何も出来ない状態のまま、一人の先生の名前をもう一度呟く。「もう、やだよお」

こんなことになるなんて、丹羽先生と付き合ってた時は思いもしなかった。

「それなのに何で私が……」

新島は自身の金髪を両手で包み込みながら、愚痴をこぼす。だが、その声に反応する者は誰もいなかった。外から聞こえてくるよくわからない音が、新島を一層不安にさせる。この状況が永遠と続いた場合、自分はどうなるのだろうか。新島は、体育の時間で誰かが倉庫を開けてくれるのを待つしかなかった。

そう。その時まででは。

「あ痛っ」

新島は抱え込んでいた頭に針が刺さるような痛みを感じた。何だろこれ、と思い今一度頭を両手で探してみると、ふいに大きな衝撃を新島を襲う。

「きゃあっ！」悲鳴をあげる新島。「何これ何これ何これ何なのこれっ！」

そう言う新島の頭の中には 先刻の狩谷と同じような大量の情報流れ込んでいた。必死でそれらを拒否しようとする新島の思いを無視し 情報という情報という情報という情報という情報が

新島の頭に流れ込む。

やがて、流れ込む情報量が尽きたのか、新島の体に開放感が訪れた。「はあ、はあ、はあ」と息を整え、そして暫く時間が経った後、冷静になった頭で今さっき自分の物になった『能力』というものについて、新島は思考する。

だが。

「何よこれ」

普通じゃないことを私が出来るなんて凄いけど、こんな『能力』貰っても何も出来ないじゃん。

それこそ、閉じ込められた体育館倉庫から抜け出すことすら出来ない。

それならば、こんな『能力』が自分の手元にあっても、何の意味もない。

そう結論付ける新島。再び崩していた足を体操座りにし、顔を足と胸の間に埋める。新島の頭の中には、役に立たない能力を授けてくれた嫌味な神様に対する呆れと、丹羽のことしかなかった。

しかし、新島は気付いていない。

その丹羽昭博本人が、新島が体操座りの状態のまま動かないでいる間　とてつもない事態に直面しているということに。

予鈴が鳴ったにも関わらず、職員室に居なかった丹羽は気付いていた。

何かがおかしい。

それは二十七年という年月から得た直感からなのか。それともただ単純に、理論的に間違っているからなのかは丹羽本人にもわかっていなかった。

太陽の日差しが窓から差し込む廊下で。

丹羽は、それに気付く。

「校長の奴は今、職員会議に出てる筈だろ」

だから、谷山と三島が校長室を尋ねたところで誰も居ない為、直ぐさまあいつらは校長室から「失礼しました」とか言って出て来る筈だ。谷山が座る車椅子を引きながら、三島は谷山と一緒にになって「残念だったな、ニヤニヤ」とか言って、今頃廊下を歩いている筈だ。

それなのに。

「何であいつら、校長室から出てこないんだ！」

この学校に存在する誰もがその前兆に気付かなかつたが、女子高生好きの体育教師 丹羽だけは、それに気付くことができた。

しかし。

もう、遅かった。

「キヤアアアアア！」「うわああああ！」

職員室ではなく校長室に走り寄ろうとした丹羽の耳に、突如、上の階から悲鳴が訪れた。沢山の悲鳴が丹羽の体をおののかせる。「うおっ！」と自ずと反応した丹羽だったが、その時には既に、ガラスが割れる音が数回に及び、尚且つ生徒の内誰かが倒れる音が一階の廊下を響かせていた。

「な、なんですかこの騒ぎは！」

次第に職員室から、教師が続々と異変に気付き、現れ始める。ハゲ散らかしている教頭先生や、いつも白衣を着用していることで有名な浜松愛先生などが居た。

「あ、丹羽先生！ あなたこんなところで一体何を」という浜松先生の言葉にたじろぎながらも、「そんなこと今はどうでもいいでしょう！」と丹羽はかぶりを振る。

校舎一階に、他の二階 三階 四階とは打って変わり、校長室や職員室 保健室を含む、所謂生徒が常には居ない一室だけが並んでいるせいか、二階の異変に気付いた者達は教師しか居ないようだった。浜松先生は、青ざめた表情をしながら「とにかく二階に行きましょう」と他の教師を誘っていた。新任教師なりにかんばろうとしているのだろう。他の教師も焦っていたが、それとは比較にならない程焦り、必死になっていた。

その様子を見て、「どうせ生徒同士の乱闘じゃないのか？」と言いついていた教師陣も、渋々頷き、二階へ向かおうとする。依然、二階からは悲鳴と怒号が鳴り響いていた。

何かがおかしい。

全ての教師がそう思ったことだろう。

そうならば。

そう、思ったのならば。

丹羽も浜松先生も教頭先生も 全員即座に逃げるべきだった。

「……………」

職員室の近くにある二階へと続く階段の踊り場に、二人の少年少女が、焦点の定まっていない目で教師達を見下ろしながらそこに確かに存在していた。

三嶋勇気と、谷山皆瀬。

「あ、あなたたち一体」そういう浜松先生だったが、言う途中で気付いてしまった。

初めは窓から差し込む逆光によりよく見えなかった二人の状態が、少しの時間をおいて、微かだが見えるようになってしまったから。

三嶋勇気と谷山皆瀬の頭が体が腕が肩が腹が頬が耳が

二人の体全体が、赤みを帯びていた。

「え？」

浜松が気付いた頃には、もう既に、攻撃が始まっていた。

谷山が斜め下に広げる手の平が、太陽の光りと似たような白い光りに包まれ、そしてそこから、一直線に進む光りが射出される。

レーザー。

谷山皆瀬 彼女の能力を一言で表すと、自然、この単語に行き着く。

「ああッ」左胸をレーザーで貫かれた浜松先生が、左胸を両手で押さえながら、階段の一段目に向けて、頭から意識と命を落とした。

その信じられない一連の光景に啞然となる全教師。数十の人物が、階段近くの廊下を集まっていた。

「お前ら」その中に居る丹羽がいきり立つ。「そんなに血い浴びて、何してやがるんだ！」

先刻までは校長室に居た二人の生徒。バリアフリーなどと言い、幸せそうにあだ名を言い合っていた二人の生徒。

そんな二人の生徒が　数分前とは全く違う姿に成り果て、不可解な方法により人殺しをしている。

「……………」　その信じがたい事実には驚きを隠せない丹羽の前に

「……………」

二人の生徒が、感情の籠っていない顔で、突然現れる。

「な……………」

一瞬にして。

二人の生徒は踊り場から、移動した。

車椅子に座る少女が居たにも関わらず。

誰の目にも止まらない速度で。

そして、谷山の前の場所とはつまり。

「ぐわあ」「あぎゃあ」「あ」「ああ」

数十の教師が　踊り場を未だに見上げる状態で、二人を囲む場所だった。三嶋は自身の体を谷山が座る車椅子ごとその場で右回りに回転させ、レーザーで教師の体を二つに切断する。血が、声が、臓物が　彼ら彼女らの体の中央部分から生み出される。

「は、はは、ははは」

バタリと倒れていく全教師の陰で、唯一人。

丹羽だけが、何故か生き残っていた。冷や汗を垂らし、理解の追いつかないまま、壁へとへたれこむ。

「……………」

そして。

生き残った丹羽を残したまま。

血の臭いがする場所を、二人は去って行った。

新聞部によって与えられた、三嶋勇気の瞬間移動する能力によって。

「はは、ははははは」

一人取り残された丹羽は、血の池に沈む動かない肉片と化した教師仲間の姿を見ないように目を隠しながら。

ただ、笑うことしか出来なかった。

この時まででは。

「いやいや始まつてるね終わつてるね終身してるね絶望してるね……」

ニヤニヤと笑いながら、校長室に一人存在する生徒　新聞部は、目を閉じながら、何らかの『能力』によって状況を把握しようとしている。

「三嶋君と谷山さんは僕のプログラム通りに二階　一階　三階　四階と移動してるようだね。いやーよかった。これが成功していなかったら僕のこれからの予定がおじゃんだからねー。僕が配った能力達は……へえ、やっぱりというべきかどうなのかはわからないけど、あの人達に行き着いたらいいね。でもあいつだけは予想外だったなー。一人だけ何の関わりもないじゃん。……って、あ、そっか。狩谷の奴と関わりを持ってたっけ。まあ、いいや。どんな能力が彼の元に渡ったかはわからないけど、彼みたいな馬鹿な奴には何も出来ないでしょ」

それよりも、と新聞部は続ける。「まさか彼女があんな場所に居たなんてなー。このままじゃどうしようもないねー。どうしょ。僕が直接行くつてもありっちゃありかもしれないけど。えー、何かそれ展開として微妙じゃないかなー」

一人ブツブツと呟き、うーん、と唸る新聞部。何も無い校長室の中、額に人差し指を当て、とあることを悩んでいたのだが。

「へえ」
しかし。

その思考は、中断した。

「おい！　ここには三嶋と谷山がいた筈だろ！　誰が今ここにいるんだ！」

力強く入口のドアに拳をたたき付ける音と、先程まで何も出来ず

に笑っていたが状況を少しでもよくする為立ち上がった、丹羽の大声によって。

「ホント、先生は僕をよく邪魔するなー」

壁の向こうだったが、校長室に入る場合には何の障害もなく、本来あるべきドアには鍵がかかっていない為、少しの時間もかけずに部屋に入ることが出来る。新聞部はその事実を噛み締め、このまま鍵をかけてもいいけどそれじゃつまらないかな、と思い立ち、『能力』を発動した。

「……失礼します！」

やがて痺れを切らし、律儀にも挨拶しながら校長室へと入る丹羽だったのだが、そこにはいつもと変わらない光景があった。額縁が飾られ、植木鉢が佇み、校長先生だけが座れる赤い椅子に窓から差し込む光りが照らされる。

「誰も、いないのか」訳もわからず愕然とする丹羽。

そして用もなくなり、直ぐさま次の目的地である、二階へと移動しようと校長室から去って行った。

だが。

「アハハハハ。いやー、丹羽先生ー。全ての元凶である僕はここに居ますよーっと」

誰も居らず何も変わらない校長室だと確認した丹羽だったのだが、その目の前に、変わり果てた校長室と、笑い続ける新聞部の姿は確かに存在したのだった。

それなのに、丹羽は把握することが出来なかった。

新聞部が発動した、他人に幻覚を見せる『能力』によって。

「さーて。ずっとここに居てもしょうがないかなー。とっとととととと素早く迅速にこの場から立ち去って、僕が巻き起こしたこの惨劇を遠くから鑑賞するとしよー」

そう言つと新聞部は無惨に破壊尽くされた校長室から出て、教師達の肉片を消し去ろうとした。

だけでも、しかし。

「おい。テメーが先生達をこんなにしたのか、新聞部」

校長室の左 職員室近くの廊下に。

丹羽とすれ違いになったのだろっ一人の生徒が、血の池の真ん中で俯きながら立ち尽くしていた。よく見ると彼の足元に血とは違う液体状の物が、血の池に混ざっている。

吐いたのだ、彼は。

見慣れないその光景を直接見て。

しかし彼はそれなのに、わざわざ血の池の中央まで行き、新聞部を牽制した。

「へえ。君、いつの間ここに？」

「うるせえ！ とつとと答えやがれよ、ゴラァ！」

「全く、うるさいったらありゃしないよ。馬鹿過ぎる野蛮人かな君は」

「野蛮でも馬鹿でも何だっつて良いっつての！ いいから答えろっつての、新聞部っ！」

彼の怒号に耳を傾けながら、新聞部はため息をつき、心底嫌そうな顔をして、「ああそうだよ。他でもないこの僕が、先生達を殺したんだ」と 事実とは違うが、あながち間違っつてはいない発言をした。

「マジか……」その言葉に驚く男子生徒。

「信じたくねーけど、やっぱりお前だったのかよ」

「やっぱり？」男子生徒の発言に首を傾げる新聞部。「やっぱりっつてどういう意味なのかな」

「お前、いつもなら二組の教室に居て女子やら男子やらに囲まれている筈だろ。それなのに、俺が確認した時、遅刻を断固受け入れない生徒会長のお前が居なかった。で、こんなことになっっちゃってる。それなら、犯人はお前しかいないだろ！」

その言葉を聞き、「なんて杜撰な謎解きをするんだよ君は」と呆れる新聞部だったが、目の前に立つ男子生徒の顔が怒りに染まったのを見て、自分の掌を彼の前にかざす。

「ふざけんなよふざけんなよふざけんなよ。本当だったら家に帰って問題集持ってきて全部解いて今日中に提出する筈だったのによお。意味わかんねー衝撃が来るだけかと思ったら、先生達を、お前は、お前はぁ！」

血の池に怒りの表情のまま立ち尽くす男子生徒　霧島巧は。

新聞部に向けて両の掌をかざし。

その動作を見てニヤニヤと笑い始めた新聞部に、こう叫んだ。

「意味わかんねーけどよ、どうせ俺は馬鹿だからよお！　意味わかんねーまま意味わかんねー俺の『能力』を、お前に見せてやるよ！」

「……………」
 車椅子に乗り、誰が見ても美しいと判断するフランス人形のような少女。谷山皆瀬。

そして、谷山皆様が座る車椅子を動かす、平凡な少年。三嶋勇氣。生徒会書記としても有名なこの二人が、人を殺している。

殺人の方法は不可思議な『能力』を使って行うものだったが、新聞部という少年が彼と彼女に与えたプログラムはこのようなものだった。

二階、一階、三階、四階と移動してね。その際、谷山さんは一つの教室に必ず六発はレーザー打ち込んでよ。バーンって連続で。邪魔する人にもレーザーやっていいからさ

そして。

狩谷の目の先で。

一人のクラスメートの死が、確認された。

「……………」

あまりの展開のスピードに、狩谷は呆けた声を出す。しかしその声は、他のクラスメートの絶叫によって掻き消された。

その間にも、谷山と三嶋は移動を繰り返す。

隣の組に計六発のレーザーを打った谷山が、三嶋の移動能力によって狩谷が膝をつく教室の後方に到着する。その時に狩谷が見た二人の目は、完全に、死んでいる目だった。

こ、こんなの、人間の目じゃない……。焦点が定まってないにも程があるって……………。

何も見ていないその無機質な目が、彼ら彼女らの恐怖を煽る。

「このままやられてたまるかよお！」

始まりは、狩谷もよく知るクラスメートの男子だった。教室の後側の席に座っていた彼は、無謀にも瞬間移動したその時その瞬間

を見計らい、椅子を両手で持ちながら特攻しようとしたのだった。自分が殺されるかもしれないと、焦ったからかもしれない。もしくは、何が何だかわからなくなってしまったからかもしれない。いずれにせよ彼は、彼を容易に殺せる二人の近くに行こうとした。

「……………」

だが。

プログラムによって操られている谷山が、己を邪魔する存在を無視する筈もない。

自分よりも頭二つ分は大きい少年の威圧感に動じないまま谷山は右の掌を彼に向け、光りをまとい発射する。

「ぐが」腹を突き破られた少年。「畜生、が」

目を閉じかけながらも、苦しそうに 悔しそうに 鋭い痛みを伴う腹を片手で抑える。その腹からは、血がとめどなく流れていた。

もう彼はわかっていた。

こんな穴が開いていては、どう頑張っても自分は死ぬ。

ならば、一失報いてやる。

そう思った彼は、消えそうになる意識を必死になってこらえながら、おぼつかない足取りで、谷山と三嶋の前まで辿り着くことに成功した。何を考えているかわからないが、谷山と三嶋の二人は、彼を無機質な目で見ながら一向に動こうとしない。三組の生徒達は、二組と一組の生徒の絶望の声を聞きながらも、勇気あるクラスメートの行く末を見守った。

「へへ、ざまあ、みやが、れ……………」

けれども、彼の行動は、谷山を見下ろすという段階で、止まってしまうた。

意識が完全に途絶えた彼は、車椅子に座る谷山の体に倒れ込んだ。彼の頭が、谷山の頭の横に位置するようになる。彼の血は、谷山のスカートにこれでもかというくらい流れた。

その様子を見た三嶋は、一瞬にしてすぐ横に谷山ごと瞬間移動し、

谷山の体を死体から遠ざける。三組の少年の死体は、血が流れる腹を下にして、バタリと廊下に空中から落ちた。

「イヤ」

それを見た三組の生徒の一人が、つぶやきをもらす。隣の組からは依然、大きな声が響いている。ドタドタと廊下を走る音に、階段を駆ける音も聞こえてきた。

何で、だ。

何で、こんなことになってる。

三組の生徒だけではなく、二階に居る生徒全員がそう思ったに違いない。

さつきまで、彼ら彼女らは普通の日常の中に居た。それなのに突然、非日常の刺客が彼ら彼女らを消しに来た。

そんな展開を、おいそれと受け入れられる訳がない。

だから、彼ら彼女らは待った。クラスメートの少年により、二人が止められるのを。いや、そうでなくてもいい。誰でもいい。自分達を助けてくれるヒーローのような非日常を、待った。しかし。

彼ら彼女らは、悟る。

「……………」

レーザーを放ち始めた非日常の存在によって、悟る。

「きゃああ」「がっ」「ぐぎゃあ」「いあ」「ああ」「あ」
自分達は。

もう、死ぬしかない。

彼ら彼女らは、ハッキリとそう思った。瞬間移動に加え、レーザーだ。訳のわからない存在が、二つも、自分達の前に立ちただかる。こんな障害に、立ち向かえる訳がない。

だから、三組の生徒達は皆一様に、涙を流しながら床にへたれこんだ。死んでいくクラスメートを、自嘲気味に笑って見送りながら。けれど。

「だからさ。こんな非日常、要らないんだって」

そこで、一人の少年が立ち上がった。諦めた表情をするクラスメイト達の視線を浴びながら、一人の少年が立ち上がる。

彼ら彼女らは知っていた。今立ち上がったクラスメイトが、どんな少年なのかを。霧島巧や高柳美香の陰にいつも居た、あまり目立たない少年。

狩谷操。

彼は、呆れた表情をしながら立ち上がる。

「はぁ。早く終わらせようよ、二人共さ」

そう言いながら、狩谷は。

狩谷が持つ『非日常』を使った。

目の前にはばかり『非日常』を、倒す為に。

『能力、施行』 『能力、施行』

『能力、施行』 『能力、施行』

その間にも、谷山と三嶋は殺戮を繰り返す。現実を放棄し狩谷を眺めて諦めた三組の生徒達の体が、レーザーによって、窓ガラスや壁ごと貫かれる。

『能力、施行』 『能力、施行』

『能力、施行』 『能力、施行』

現在、四発のレーザーが三組に発射された。三組の生徒はおおよそ三分の一が命を失っている。腕や肩という致命傷に至らない部位を削られ、呻きながらもなんとか生き残っている生徒もいれば、「は、ははは」と言いながらも一つの傷も負っていない生徒も居た。「……………」その間、自身のすぐ横をレーザーが通過したを感じながらも、狩谷は無言で立ち尽くしていた。

彼は数秒にして悟る。

僕の能力じゃ この二人をなんとかすることは出来ない、と。

そして狩谷は、逃げた。

避けた、と表した方がいいのかもしれないが、しかし狩谷は逃げただのだ。

「無理だってこんなの」狩谷は暗い顔で呟く。「僕の能力じゃ、谷

山さんのレーザーを避けることしか出来ない……」
狩谷は。

「戦うことから、逃げたのだ。」

『能力、施行』 『能力、施行』

狩谷の左横をレーザーが通過する。数秒後、更にその左横にレーザーが射出された。

ようやく谷山と三嶋の攻撃が止まり、二人は四組へと移動する。

四組の生徒は逃げていた。五組と六組の生徒と共に、既に逃げた。それが奇しくも、三組で一番初めに死んだ少年が作り出した空白の時間によるものだというのを、誰も知らないまま。

それでも。

谷山と三嶋は、攻撃を続ける。

プログラム、通りに。

そして、谷山と三嶋は次に一階へと移動する。

その際に 二人は一階へ移動しようとしていた生徒達を殺していった。

それは、一階の踊り場へと移動したかった二人の 邪魔をする者達だったから。

近距離で、谷山はレーザーを撃つ。谷山や三嶋に返り血がとぶのを、気にせずに。

『能力、施行』 『能力、施行』 『能力、施行』 『能力、施行』 『能力、施行』 『能力、施行』 『能力、施行』 『能力、施行』

血を流しながら死に行くクラスメイト達という『非日常』に全く目もくれないまま廊下に出た狩谷は、自身の能力についてこう判断する。

「なんだかよくわかんないけど、あの二人って、心の声が一つしかないんだ……」

能力、施行。

この心情しか、今の二人は無いんだ。

だったら僕が出来ることは、谷山さんがレーザーを撃つタイミング

グと、三嶋君がワープするタイミングを知ることしか出来ない。

「……………」

無言になる狩谷。彼は今、校舎全体を彼の能力で覆い、二人の行方を探していた。

その時。

狩谷は『能力』の使い方を一つ知る。

狩谷の能力は『心の声を聞く』というもの。円の形で範囲をかたどり、その中に居る人物の心の声を聞くというもの。

『痛い』『死にたくない死にたくない』『なんでなんでなんで』

『嫌だ嫌だ嫌嫌嫌嫌』『ああああああ』

しかし、二人の行方を追う為には、二階の生徒の断末魔も聞かなければならなかった。

これまでは。

狩谷は、数学の宿題を思い出していた。霧島が忘れ、大急ぎで取りに行ったあの宿題を。

その中に、円を扱った問題があった。場合分けの、問題が。

「聞き取る範囲と聞き取らない範囲を、明確にすればいいんだ」

誰にも向けずに、一人、呟く。

狩谷操。

霧島や高柳といった目立つ者達の後ろに居た、日陰者。勉強も不得意で、何をしても駄目駄目な、少年。

自分が上手くいく日常を求め、訳のわからない非日常を拒んだ者だが、幸か不幸か。

狩谷操は、『非日常』の扱いに長けた少年だった。

「見つけた」

狩谷は無表情になり、言う。彼の先には、自分の日常を汚す障害物を排除することしか頭にない。

「早く終わらせて、霧島君の宿題を手伝おう」

狩谷は進む。自分の後ろに、苦痛で呻く者や、その者達を介抱しようとする者がいるにも関わらず。

彼ら彼女らもわかっていた。自分達が立ち向かっても、あの二人をなんとかすることは出来ない。悲鳴はいまだに二階を響かせる。一階、三階、四階にも悲鳴は響き始めた。谷山と三嶋はタイムロスをカバーする為か、早めに能力を連続して使い、この数分の間に新聞部のプログラムを終わらせていたのだ。

二人はそして、次のプログラムへと移動する
その二人を止められるのは、無表情のまま向かおうとするただ一人の少年だけ

「た、のむ。あいつ、らを、なん、とかし、てくれえ……」

悠然と廊下に立つ、『異常』な少年に向けて、死に際に立たされている一人の生徒が呟く。

狩谷はその声を聞き一度振り返り、冷徹な表情で一瞥すると、小さく頷きもせず廊下を走り出した。

その姿を見て、三組の生徒は全員こっと思つ。

谷山や三嶋より、あいつの方が怖い。

狩谷は走り、階段にまで辿り着くと、階段を上がり始めた。

「うわああああああ」 「嫌ああああああ」 「きゃあああああああああ」

途中、大勢の生徒達が狩谷を一度も見ずに、階段を下りていた。タイムロスをカバーする為、谷山と三嶋の所業が少し雑になったのだろう。谷山のレーザーから逃れた者が、明らかに二階よりも多い。皆が皆、涙を浮かべ、必死の形相で階段を駆け下りる。

狩谷と、逃げる生徒達。

上がる者と、下がる者。

立ち向かう者と、逃げる者。

両者群は、一瞥もせずに駆け続ける。それぞれの、命を懸けた目的達成の為に。

「すいません。すいま……通してください」

狩谷は言いながら、駆け降りる大群を掻き分け、前へ進む。

谷山さんと三嶋君が何をしようとしているのかも、今何処に居るかも、何をしているのかも、今の僕ならギリギリなんとかわかる。

谷山皆瀬と三嶋勇氣は、今でもまだ殺戮を繰り返している。ただし、以前のような乱暴にレーザーを放つやり方ではない方法で。

今現在の狩谷の頭の中には。

校舎の外に逃げてグラウンドに居る数十の生徒達の、断末魔が聞こえていた。

屋上に居座り、冷酷に上空からグラウンドに向けて何発もレーザーを撃っている谷山皆瀬によるものと。

グラウンドの中央に立ち、谷山が殺しそびれた者達を、空中に自分ごと移動させ地面にぐちゃぐちゃとした死体と化す三嶋勇氣によるもの。

狩谷は最初、どちらに行こうか迷ってはいなかった。「見つけた」と狩谷が言った時、谷山と三嶋はプログラムの途中段階、つまり、四階に居たからだ。

だが、ここで二人が二手に別れた。

二人は屋上に瞬間移動すると、三嶋は谷山だけ屋上に置き去りにし、グラウンドに瞬間移動したのだ。

「ああ　！」「い　あ！」「　！」「　！」

声にならない甲高い断末魔のコーラスが、校舎の外から聞こえ始めてくる。階段を下りる者達は、必死に逃げる為その声に気付いていない。皆、我一番に駆け降りる。

狩谷はゆっくりと階段を上がって行った。声にも、人にも、非日常に決して目をくれないまま。

三階に着いた。階段を駆け降りる者が少なくなってくる。狩谷は「すいませんすいません」と誰彼構わず呟きながら、屋上へと目指す。

四階にはもう、誰も居なかった。

あるのは、死に近い者達の呻き声だけ。

「興味、ないから」

狩谷は屋上へ向かう。自分の近くに生徒が死に行くという非日常を意識的に無視しながら。

無関心。

彼が持つこの感情は、他のどの感情よりも冷たい。

『能力、施行』

そして、狩谷は。

屋上へと繋がる入口を、開けた。

目の前に飛び込んできたのは、レーザーを発射していない状態の谷山の後ろ姿だった。

「……………」

谷山は、車椅子を回転させて後ろを振り向き。

狩谷という邪魔者の存在を確認した。

「行ける」

行けるぞこれおい！ と心の内で斎藤は叫ぶ。

彼女の目の先には、もう既に学校が見えていた。県内で大きさは一番だとうたわれる自分なの学校だ。斎藤は汗をしたらせ走りながら、ガッツポーズをとる。この調子でいけば、ギリギリだけどころか朝礼が始まる数分前には着くことが出来る。途中、変なホームレスとか変なおばさんとか変な子供とか沢山の人に邪魔されたが、この調子ならなんとか間に合うことが出来る。

家に帰ったら二葉と真剣な話し合いをしよう、と心に誓いながら、彼女は遂に学校の前まで辿り着くことに成功した。

普段なら。

ため息をつきながらも、荒ぐ息を整えながらそのまま学校の門をくぐれる筈だった。

普段という、日常の最中なら。

だが、しかし。

斉藤が大急ぎで向かっていたその場所その学校は、既に非日常の権化と化していた。

「ん？」

何だ、これ。

斉藤は違和感を覚える。

学校のグラウンドに繋がる門の向こう側へ行けない。

否。それは違う。

「入れ、ない？」

学校の中に、入れない。

斉藤が肩を上下させながら学校に入ろうとした時、彼女の顔や体に、何かおかしな感触が伝わった。

金属のような感触の隔たりのある壁が、斉藤の行く末を阻んでいたのだ。

見えない壁。

新聞部という少年が発動した中途半端な密室を作りだす壁が、学校の敷地全体を囲っていた。

「は？」

目の前にある見えない壁が信じられず、驚きの表情を隠せないまま、今度はゆっくりと右拳を校舎が佇むグラウンドが見える門の間に入れようとする。けれども、その拳は門の間を通過することはなく、ただ 固い金属に触れる感触が再度伝わるだけだった。

「……………」 啞然とする斉藤。「一体全体どうなってやがる！」

その咆哮は、斉藤の後方を通過する通行人にしか響かなかつた。

折角間に合うと思ったのにこの仕打ちはなんだ。なんでだ。憤りを感じた斉藤は力いっぱい門の間にけりつけたが、金属を蹴ったような痛みしか斉藤には訪れない。「いてえよ！」と叫びながら膝をつ

いて靴の先を両手で包む、涙目の斉藤。

「はあ、はあ、はあ」

まさかの事態に再び荒ぐ息。走りによってではなく不安によって額から流れる冷や汗。

なんだよなんだよなんだよ、これ！ 私は！ いつも通り普通に学校に走って登校しただけだぞ！なのに、何で！

どうなってやがる。

彼女にとって目の前に広がる非日常を信じることは難しいことだった。当然だ。狩谷や霧島のように『能力』という非日常が斉藤を襲ったのならまだしも。校舎の中で行われた『能力』による殺戮という非日常が斉藤を襲ったのならまだしも。彼女は、今の今まで日常の中に居たのだから。

当然、混乱する。

大の大人でも、半狂乱に陥るレベルかもしれない。

狩谷のような精神を持っているならともかくとして、それを斉藤伊里という高校二年生の少女がおいそれと受け入れられる筈がないのだ。

「……………」

そうして暫くの間、斉藤は門の前で呆然としていた。通行人は既にほとんど居ない。居たとしてもバラバラと登校する小学生だけで、つまり、高校生が呆然と門の前で立ち尽くすというおかしな現象を確認する者は少なかった。

しかし。

「チツ」斉藤は、決断する。「だから何度も思ってるだろうが、私」

斉藤は言いながら、左腕に巻く腕時計を見る。時刻は八時二十九分三十三秒。後数十秒で、朝礼開始のチャイムが鳴る。

私は副会長として、遅刻する訳にはいかないんだよ。

例え訳のわからない現象が立ちはだかるとしても。

例え学校が今現在どんな巣窟になっっているとしても。

斉藤は、止まらない。

「うおりゃあつ！」

決意した斉藤はまず大きく右拳を振り上げ、思い切り門の間の何もない空間に向けて殴った。

「いてえ！」自然、痛みが斉藤の体を走る。

だが、斉藤は諦めない。「痛くねえ！」と叫びながら、見えない壁を殴り続ける。その都度、鋭い痛みが走るが、斉藤は止まらない。見えない壁は、新聞部が発生させた『能力』の一つ。しかもそれは以前校長室の出入り口に使ったものとは似通っていた。

だが、少し違う。

斉藤の前にあるのは、去る者去る物を徹底的に拒み、入る物入る者を少し拒むという壁。

この壁により、斉藤の目の前にはいつもと変わらない学校の風景が広がっている。朝礼前で誰も居ないグラウンドと、その先にある大きな校舎。

しかしこれは、本来斉藤の目に映る筈の風景とは全く違うものだった。

本来ならば。

斉藤の目の前には、悲鳴すらあげない死体が転がっている中に佇む、血だらけの三嶋勇気が見えていたのだ。

だが、それは新聞部が作り出した壁によって見る事が不可能な光景だった。同じく例によって、悲鳴も学校の外には漏らさない。携帯が発する電波も、また然りだ。

部外者は学校に起こっている非日常に気付かない。

それが、新聞部が作りあげた見えない壁の真意だった。

部外者とは、遅刻した者もその範疇に入る。

ならば、斉藤の他に遅刻している者はどうなるのか。

そんな者はいない。

何故なら今日は、支持率百パーセントの会長の集会がかかった日だから。

この学校において新聞部という生徒会長が持つ立ち位置は、それ

程のものだったのだ。

「うおりゃっ！ えいあっ！ ていあっ！ おおおっ！」

斉藤は、依然大声を出しながら拳で見えない壁を殴っていた。痛みは感じるが、血は流れない。そういう作りにこの見えない壁はなってるんだろつよ、と斉藤は判断する。

その判断は、あながち間違いでなかった。

新聞部は、油断していたのだ。

内部から出ようとする者はいても、外部から、それこそ極限まで殴つてなどという暴力的な方法で無理矢理学校に入ろうとする者など、いる筈がないと。

けれども。

新聞部は、過信していた。

「何千回も殴つて壊れない壁なんて、この世の中に存在する訳がねえ！」

現在殴っているその見えない壁自体がこの世の中に存在する筈のないものだったという事実はともかくとして置いておいて。

斉藤は、どんな障害が目の前にあっても、決して屈することはないのだった。

元々外部からの衝撃には耐えられる壁ではなかったことも幸いし、斉藤は殴り始めてから二十秒程度で、パリン、というような音を聞くことが出来た。

「うおっしゃあ！」肩にかけてあるバッグを出来た隙間に投げ入れる。「今何時分だこのヤロー！」

バッグが壁の向こうに消える。その光景にたじろぎながらも、斉藤はその割れた空間に手を入れた。出来上がった『入口』は、拳四つ分くらいの大きさだ。斉藤は「おいっしょ」と言いながらその空中に出来た空間に頭から無理矢理入ろうとする。開いた隙間は円の形を帯びていた。体格が女子として大きかった斉藤にはキツイ隙間だったが、みっともない格好のままなんとか入ることに成功する。

落ちる頭を両腕で庇いながら、グラウンドの地面に落ちる斉藤。隙

間に挟まっっている間、後方からは完全にスカートの中身が見えていたに違いないが、斉藤は気にしていなかった。それよりも、自分が宙に浮かぶおかしな人と思われていないかが心配だった。第三者から見たら斉藤の状態は頭から先が徐々に消えてなくなっていく人という、それこそ非日常な光景になっていたのだが、幸いその時の斉藤を見ていた第三者は居なかった。

「ふうっ」斉藤は、そして。「……ハア？」

非日常に、遭遇する。

斉藤が見た光景は。

数十もの死体だった。

頭が半分なくなっている死体。片足が本来あるべき場所になく、そこから流れる血の損失で出来た死体。口を開けている死体。左胸が貫かれている死体。頭がひしゃげてぐちゃぐちゃになっている死体。「助けて……」と言い、そして逝く死体。頭が綺麗になくなっている中年の死体。これは校長先生だろうか。気付けば他にも死体の種類はある。生徒、教師、職員、給食員。学校に所属するありとあらゆる人の、死体、が。斉藤の、目の前に、あった。

「ああ、あああああああ！」

声にならない悲鳴をあげ、その場に頭を抱えて倒れ込む斉藤。その目尻には涙が溜まり、先刻までとは比較にならない程の冷や汗が体全体から出る。

朝礼開始のチャイムが、鳴った。八時三十分を示す、チャイムが。「ああああああ」斉藤は、先ほどまで固持していたそのチャイムを、自らの悲鳴によって聞き取ることが出来なかった。

「……………」
ならば、至極当然。

残党処理のプログラムを課された三嶋勇気が、悲鳴をあげる斎藤の存在に気付かない筈もない。

チャイムが鳴り終わり、三嶋は外界から侵入してきた邪魔者を消すべく、グラウンドの中央から瞬間移動しようと試みた。その三嶋

の行動に、泣き崩れる斉藤は気付くことが出来ない。

この時、谷山と三嶋という二人の殺戮者の警備は手薄になっていた。

谷山は、屋上に現れた狩谷という邪魔者を消すことに専念する為。
三嶋は、学校の外から入ってきた斉藤という邪魔者を消すことに専念する為。

この、一瞬の警備の手薄になった時間が

「あはははは！ チャンスじゃね、これ！」

無傷の状態で友人二人の死体の中に隠れていた少女の行動を許した。

短い髪を血で染め、短いスカートを血で染め、制服を血で染めながら口の端を歪めて笑う少女。

生徒会会計。校長室に野球ボールを笑いながら投げ入れ、金髪の少女 新島春香を体育館倉庫に閉じ込めた少女。

川崎直美。

血の臭いが散開し、死体が敷き詰められたグラウンドの中央。三嶋が斉藤の方を振り向いたその一瞬を狙い、川崎は学校に隠し持つて来ていたスタンガンで三嶋の気を失わせた。

「アハハ！ あはは！ 亜把羽！ あはははひひっ！ あーこういうのよ、こういうの。こういうのを待っていたのよ、私はさ」

川崎は、気絶して倒れた三嶋の頭に革靴で踏ん付けながら。血で染まった自分の体を見ながら。アハハ、と笑う。

「こういうのよ、こういうの！ やっぱムカつく奴倉庫に閉じ込めたりとか校長んここにボール投げ付けたりとかしても意味ないわ。うん。流れに乗じてヨシコとカヤ試しに殺してみただけど、誰もこんな私が殺ったと思わないじゃん！ 全部、全部、全部！ 三嶋と谷山のせいに来るじゃん！」

川崎はスタンガンを捨て、友人二人を殺した 血の着いたコン

クリート片を片手に、三嶋の頭を殴り付ける。

何度も。

ゴシヤツという音が。

何度も。

頭がひしゃげていく音が。

何度も。

「アハハアハハアハハアハハ！」

何度も。

やがて、三嶋の頭が鮮血に染まる。例えもう一度意識を取り戻したとしても、能力を使って殺戮することなど不可能な程に。

斉藤はその時、泣くのを止めていた。この異常な空間の中、笑い声が響いているのを聞き取ったからだ。

「なん、だよ、おい」

斉藤の目の前には。

「アハハ！ アハハ！ あ、おいしい」

自身の口に飛び散った返り血を舐めながら、コンクリート片で誰かの頭を馬乗りの状態で殴っている、川崎の姿があった。

笑って、いた。

「お前」ふらふらと立ち上がる斉藤。「何、やってんだ？」

そいつ、もう死んでねーか？

その疑問は、川崎の「あら、斉藤さん久しぶりー。遅刻はいけな
いよ、遅刻は」という声によって遮られた。

「遅刻どころの騒ぎじゃねーよな、これ」

「あ。うんうん、そだねー。ゼーんぶ、谷山と三嶋がやったのよー」

「谷山と三嶋が？」

「そうそう。なんかよくわかんない方法で、皆殺されちゃったのよ
ねー。ま、そのよくわかんない方法を私も持つてるんだけど、生憎
私の奴さ、使えねーったらありやしないの。だから……」

「だから？」

「だから、自分の手で二人を止めよっかなーなんて」

テヘツ、と舌を出す川崎。口の端には、三嶋の血があった。ついでに舐め、「アああっ」と快楽の言葉を漏らす。恍惚の表情をしながら、ゾクゾクと体を奮え上がらせた。

「……………」
この時点で、斉藤は非日常が現実になってしまった事実を受け入れていた。

だが。
恐怖に染まり無言になった彼女の頭の中には、ある記憶が思い返されていた。

斉藤伊里は果報者だ。両親が居ない中、兄弟姉妹達を世話する為、家事選択に加えバイトを幾つも掛け持ちしている。

ならば、両親は。

両親は、何故居ないのか。

「ああ。あああ」

斉藤はもう一度、崩れ落ちる。

斉藤は重ねていた。

笑いながら人を殺した川崎の姿と。

父親を「疲れたのよ疲れたのよ疲れたのよあなたあ！」と言いなから首にナイフを突き付ける。

実の母親の、姿と。

「うわあああああ！ あああああっ！ あああああ！」

頭を抱え、涙の流し、怯える獣のように叫び出す斉藤。頭を地面に何度も叩き付ける斉藤。彼女の頭の中には、トラウマと現実の恐怖の二つの圧迫感があった。

「何ラリってんのよあなたさ」その姿を遠くから一瞥し、ため息をつく川崎。「シケルわ、ホント。いつものあなたと遊んだら楽しかったかもしれないけど、今のあなたなんかと遊んでもどうしようもないっての」

帰れよ、と言いなから川崎は斉藤には目もくれずにその場所を立ち去る。「あー、あいつと遊んだら楽しーかな」と言いなから。

「あああああああ？」

それから暫くして、斉藤は川崎が既にその場に去ったことに気付く。

「待て、川崎……」

そう言う斉藤だったが、もう川崎の姿は完全になくなっていった。精神的苦痛で怠い体に鞭を打ち、必死になって斉藤は川崎を捜すべく、立ち上がった。

あんな奴と母ちゃんを重ねちゃ駄目だろうがよ。

心の中で思った感情は、決して口に出さなかった。斉藤は未だに覚えている。母親の温もりを。斉藤は未だに思っている。あれは、私の見間違いじゃねーのか、と。

しかし、斉藤は既にわかっている。

自分の母親は殺人者だと。

そして、斉藤は既に気付いていた。

自分にはその殺人者の血が流れているのだと。

「母ちゃん」

晴天に顔を向けながら呟く一言は、空に吸い込まれる。斉藤は一息つくと頬を両手で叩き、「よし！」と意を決する。

「川崎を止める！」

斉藤は走り出した。死体に目が向かないように、一生懸命斜め上を向きながら。

とりあえずの目的地は、校舎一階。

「嫌！ 嫌あ！」

涙を流しながら、新島は倉庫の中のマットの上で両耳を塞いでいた。

彼女の耳には今、おびただしい量の断末魔が聞こえている。時折、何か攻撃的なものが地面に着弾する音や、何か大きな物が上から真

っ逆さまに落ちる音も聞こえ、グラウンドの端に建てられてある体育館倉庫の中に閉じ込められた新島の精神は、とうの昔に限界を越えていた。

人が。

ありとあらゆる人が。

何らかの方法で、死んでいく。

「嫌……」

涙だけでなく鼻水まで流し、恐怖で歪めた顔を体操座りの膝にうずくめる。長い金髪は既にボサボサになっていた。

嫌。こんなの、もう嫌あ。

助けて。

新島は心の中で、助けを呼ぶ。しかし、そんな声を聞こうとする者など、非日常によって殺戮現場となった学校という異質な空間の中、居る筈がない。

「助けて！」しびれを切らし、口に出す新島。「助けてよ、誰かあ！」

泣きながら吐き出されたその願いは、阿鼻叫喚の渦に掻き消される。新島の声を聞く者など、もうこの学校では一人も居なかった。

「グス。ヒグッ。助けて」

こんな筈じゃなかったのに。体育館倉庫に閉じ込められて不安になったけど、まさかこんなことになるなんて思いもしなかった。「助けて。誰でもいいから……」

言いながら、しかし新島はある一人の人物を思い浮かべる。自分の髪を好きだと言ってくれたあの人。自分の全てが好きだと言ってくれたあの人。後腐れのないように綺麗に別れてくれたあの人。別れた後も。

新島が思い続けているあの人。

彼女はその人物の名前を叫ぼうとする。だが、その感情は途中で止められた。

生徒と教師の恋愛。

それは、所謂禁断の恋というものらしい。

「春香。間違っても学校で俺の名前は呼ばないでくれよ」

新島は、職失っちゃうからさ　と八二カミながら言っていた人物の忠告を思い出す。新島はその人物と付き合っていた時、そのことを守ってくれと頼まれた。

もし私が今ここで先生の名前を言ったらどうなるの？

新島は泣きながら、目を閉じて自問する。自答する瞬間は一向に訪れない。当たり前だ。自分自身が出し切れない答えが、都合良く勝手に自分の内から出る筈もない。

だから。

新島は、決断しなければならなかった。

この場で自分は、誰に助けを求めるべきなのか。

「わかってる」新島は呟く。「助けを求めるだけじゃ駄目だって、わかってる」

勿論、ここで誰にも助けを求めずに自分からこの状況を打破すべきだという選択肢があることも、新島は悟っていた。けれども新島には、その力がない。体育館倉庫から出られる力もなければ、気まぐれな神様から貰った『能力』の有効な使い方も思い浮かばない。自分から立ち上がらなければならないのは、わかっている。

でも、立ち上がったところで自分にはこの酷い状況を終わらせられるとは到底思えない。

「……………」

無言になり、ただただ目を閉じて現実から逃げようとする新島。そう。

彼女は既に、わかりきっていた。

こんなの、誰に頼っても解決出来る訳がない、と。

その判断は間違いではない。現に、朝礼開始のチャイムが鳴る前の今も、殺傷を繰り返す音は新島の鼓膜を揺らし続ける。手足を繋ぐ部位がなくなる音。頭がなくなる音。人体がちぎれる音。命がなくなる音。全てが全て、止まることを知らない。やがて、朝礼開始

のチャイムが鳴った。学校が始動するその絶対的な音も、人間が発する声にならない絶叫によって掻き消される。何も聞こえない。人が消えて行く音しか聞こえない。異常な音が包む異常な空間の中、新島は息を荒げ、耳を力の限界まで両手で塞ぐ。何も聞こえないように。だがそれでも新島の耳には悲鳴が絶叫が阿鼻叫喚が死に逝く人間の最後の言葉が新島の心を揺さぶる。

そんな中。

新島は聞いた。

「……え？」

一瞬の静寂。

自分を苦しめていた音が消える感覚。

「え？」

今の今まで悲鳴を聞いていた新島は、その事態を信じることが出来なかつた。興味本意。好奇心。そんな感情で、新島はふと、両耳を塞いでいた両手を外した。

それでも、新島の耳には悲鳴など聞こえてこなかつた。ただ、新島は、聞いたことのあるような女性の笑い声が聞こえてきたような気がした。しかし新島はその声を発する人間が、あんな風に品の無い笑い方をしないことを確信していた。

「だってあいつ、表向きは生徒会の一員だもん」

ならば、あの品の無い笑い声を出す女性は誰なのだろうか。

その疑問の答えを考え始める新島。彼女の表情には疲れが表れていた。無理もない。およそ十分の間、ホラー映画でしか聞いたことのないような叫び声を聞きながらうずくまっていたのだ。常人が、一介の女子高生が、そんな中で耐え切れる訳がない。

だから新島は、本来考えるべき『この場から殺されずに逃げ切る方法』を考えずに、まるで現実逃避のごとく考えなくてもいい疑問の答えを考え始める。

額に右手の人差し指を当てて、「うーん、誰だろ」と言いながら考える。

そんな、新島の耳に。

「あああああ」という。

女性が発する絶望の低い声が、聞こえてきた。

その声に体をビクつかせる新島。今まで聞いていた、命を強制的に失わされた人間が発する声とは全く違う種類の声を聞き、新島は驚愕する。

こ、この声、色々苦労してるって有名な、斉藤さんの声だ……。でも。

新島は、今聞いた声が副会長　　斉藤伊里のものだとは思えなかった。

新島が知っている斉藤という人間は、いつも堂々としていてはきはきしててカッコイイ、新島の憧れのような高校二年生なのだ。

その斉藤が。

絶望している。

「……………」

無言になった新島はもう一度、マットの上で体操座りになる。それでももう一度、両耳を塞ぐ。新島は何があるうとこの両手を放さないことを、心に決めた。

チャイムが鳴り、それからほんの少しの時間が経った今。

「助けて」

新島は、再度助けを求め始めた。斉藤でもあんな声を出すグラウンドに、自分なんか飛び込める訳がない。こう判断した新島は、助けを呼ぶことだけに専念した。

「助けて、て」

うずくまりながら目を服の袖で拭き、鼻をすする新島。

彼女の頭の中には。

自分を金髪の呪縛から一時でも解放してくれた、丹羽昭博のことがなかった。

「助けてよ、昭博！」

新島は叫んだ。彼の名を。丹羽昭博の、名前を。その声は体育館

倉庫内に響き、消えていく。完全に反響する声が消えた時　ふと、両耳を開けていた新島は体育館倉庫の入口の鍵が開かれる音を聞いた。

やった！　昭博が、助けに来てくれたんだ！

そう思いマットから飛び降り、急いで体育館倉庫の入口まで近づいて手をかけた新島の動きが　。

「私さ。白馬の王子様を呼びつけるお嬢様の気持ちか糞程わっかんないのよ」

ある人物の声によって、ピタリと止まる。

「だってそうじゃない？　白馬の王子様つつたって家ではずつとグータラしてるプータローなんだよ？　外ではいい顔しときながら家ではポテチばくばく食ってネットゲやりまくる二ト寸前男かもしれないじゃん？」

「ああ」その声の主が誰だかわかり、青ざめていく新島。「へ？」

「なのにさー、なんで金持ちの何も考えてないお嬢様方や自分がお姫様だつて勘違いしてる夢見るメルヘン少女は、そんなどーっしょーもないボンボンに助けを求めるか、あんだ、わかる？」

新島を助けてくれる筈の、体育館倉庫の入口の前に立つ人間は。

「何で、あなたが」

「それはさー。……要は自分がそのボンボンの二ト寸前男以下だつて認めちゃってる証拠なんだよー？　メルヘンチックな髪してるハルカちゃんにそれが理解出来るかなー？」

丹羽昭博では、なく。

新島を体育館倉庫に閉じ込めた時とは違う雰囲気を感じた。

血だらけの、川崎直美だった。

「なんで、川崎さんがここに……」

「……はあ。出来ねーか？　出来ねーよなあ、そりゃあさ！　正直今いらついでんよ、私。イライラして苛々してああもついたら

が止まらないのお！　あああ！　あひあやあ！」

校長室を後にした丹羽は、朝礼のチャイムが鳴る数分前の今。自分出来る限りのことをしようとしていた。

グラウンドに入ることが出来る開けつばなしのドアを横目で見ると、丹羽はそのまま二階へと繋がる階段を駆け上がる。

とにかく、一人でもいいから生徒を助けないといけないよな。意味不明な状況に陥り、逃げ出そうとする自分を抑え、踊り場に到着し、そのまま二階へと直行する。

「……おいおい」
そこにあつたのは。

溜まり切った、血の臭い。鼻を通過するその気持ち悪い臭いが、丹羽の表情を暗くさせる。丹羽はこの時、気付いていた。自身の耳に聞こえてくる、生徒達の呻き声によって。

「助けて」「痛いよ」「痛い」「嫌」「なんでこんな」「ああ」「痛い痛い痛い」「ぐあ」「ああああ」「誰か」「助けて」「痛いよ」「あ」「くああ」「助けて」

聞こえてきたその言葉に一瞬たじろぎながらも、なんとか気を取り直した丹羽。元々、こういう断末魔や血の臭いは、丹羽にとって二度目の体験だ。ギリギリ現実に立ち向かえる耐性もついたのでらう。

「……………」
階段をのぼりきり気を取り直した丹羽が右を向くと、そこには遠くまで見渡せる廊下と窓が広がっていた。

血が点々として存る、廊下が。

まず丹羽の目に入ったのは、腹を抱えながら倒れている少女だった。三組の前で倒れている、丹羽にも見覚えがある少女。それもその筈。少女は今朝、丹羽に元気良く挨拶した少女と同じ少女だった。

その少女が。

血の池の中に、倒れている。

制服が血に沈み、手が血に沈み、髪が血に沈み、明るかった顔が血に沈み、沈んで、いる。

少女が、自身の出した血の上で、死んでいた。

「クソツ！」一心不乱に走り、三組の前まで行き少女の体を起き上がらせようとする丹羽。服が少女の血で濡れるが、丹羽は我慢して少女の顔を見た。

血の池に沈んでいた少女の顔は、赤く、口を開けながら、黒目を白目の上方向に留めさせ、みつともないその表情のまま、生気のないまま、死んでいた。

「坂口」少女の顔から目を背けながら片手で少女の目を閉じ、少女の名前を呟く丹羽。「お前、さっきまで元気だったよなあ？　なあ？　なのに坂口、お前、何でこんな……」

少女の顔は冷たく、体も冷たい。少女の顔に、涙が零れ落ちる。

丹羽は逃げ出したかった。こんな馬鹿みたいな現実は嘘だ、と断言してやりたかった。今見ているこの地獄絵図は全て夢だと思いたかった。けれども、丹羽が感じる体温のない少女の体は、間違いようもない現実を丹羽に突き付けていた。

「丹羽先生、ですか？」

丹羽が少女の体を、膝を血の池に付けながら見下ろしていたところを、三組の男子生徒が声をかける。その声に丹羽は気付くと、目を拭いながら「ああ、そうだ」と言い、少女の体を抱えながら右の方向を向いた。

割られた窓の先に見える男子生徒は、自身の左肩を右手でしっかりと握っていた。血が出ないようにする為か。はたまた痛みを防ぐ為か。いずれにせよ、男子生徒の右手はその二つのどちらも達成出来てはいないようだった。

「は、はは……」

丹羽は、自身が見た二年三組の光景に、笑うしかなかった。

「にわ、せんせ、い?」「あー、丹羽ちゃんだ……」「丹羽先生」
「丹羽先生だよ、みんな」

口々に聞こえてくる、意気消沈した声。
もう、終わりだ。

丹羽は三組の現状を見て、そう判断した。

血を流す死体と化している生徒が何人もいる。出血部分を服の端でおさえられながらなんとか息をしている者もいるが、時間の問題だろう。反面、生きている生徒の方が少なかった。怪我をした者の手当や死体となったクラスメートの顔をハンカチで隠したりしている者達の数が、五人程度しかない。窓は全て割られ、ドアも木片となりさがっていた。椅子や机も一直線に貫く何かによって不自然な円形の穴を作り、壊れている物が多い。不思議だったのは教室の向こう側　グラウンドが見える窓ガラスが一枚も割られていなかったのも丹羽の目には飛び込んできたが、そんな些細なこと、どうでもよかった。

もう遅いと思いながらも、丹羽は血まみれの生徒達に向けて聞く。

「何か、先生に出来ることはあるか?」

生徒達は。

苦笑しながら。疲れ切った表情のまま。首を横に振った。

それを見た丹羽は悔しさを心の内に秘めながら、「……そうか」とつぶやき、他のクラスへ走る。四組と五組はあまり死んだ生徒がいなかった。生きている生徒は、誰ひとりいなかった。教室から逃げ出した彼ら彼女らは今頃、グラウンドの土の上で死体となっていることだろう。

現状を把握した丹羽は次に、一組と二組に走る。

そこにあつたのは、三組よりも酷い、殺戮後の現場だった。

数少ない生きている者は皆、天井を眺めていた。もう既に、全てを諦めたような表情をして。

丹羽は何も言わなかった。何も言えなかった。どんな言葉を生き残った生徒達にかけてやればいいのかわからなかった。

自身の非力さを痛感しながら、逃げるように走り、三階へと向かう。二階よりは酷くないが、同じような光景が広がる。逃げるように走り、四階へと向かう。三階よりは酷くないが、同じような光景が広がっていた。

「か、ゲホツ！ ゲホツ！」

四階の廊下で吐きながら、丹羽は涙を流す。
遅かったのだ。何もかも。

もう自分に、出来ることは何もない。膝をつき、坂口の血と自分の嘔吐物が微かに混ざった両手を見ながら、丹羽は悟る。逃げようにも、外に行くのは危険だろう。さつきまで、外では悲鳴が相成っていた。チャイムも既に鳴り終わったのだろう。血のついた腕時計で確認出来る時刻は、八時三十分を越えていた。

丹羽は立ち上がり、そして次に自分に何が出来るか、考える。

このまま屋上に行ったところで誰もいないだろう。だったら危険を承知でグラウンドに行くつてのはどうだ、俺。

外には谷山と三嶋により、死体となっている生徒も大勢いたが、息を絶え絶えにしつつもなんとか生き残っている生徒も居た。だが、校舎の中と違い、谷山や三嶋が『殺さなくても直に死ぬ』と判断した者達の止血をしようとする者が居なかったのだ。

もしかしたら、辛うじて生き延びる奴が出て来るかもしれない。

淡い希望。手ですくって掴みきれかわからない、そんな薄さの、儂い希望。

希望的観測。

「僕らの所にやってきたー、やーつらっのなーまえっはサイキックー」

丹羽は無意識の内に、自分が好きな歌を歌った。電波曲と呼ばれる曲を歌うのが上手いグループの、三分にも満たない曲。丹羽は、年甲斐もなく学校の廊下で歌う自分を少し恥じながらも、気分を紛らわせる為大声で歌う。歌いながら、三階、二階と下り、一階へと繋がる踊り場に到着する。

ここで一度、歌う教師は立ち止まった。

校長室には何があるかわかったもんじやない。

自身の命の危険という危機に自然と口が閉じる。耳を必死になつて両手で塞ぎ、目を閉じながら急いで階段を駆け降り、右に走つた丹羽は、その勢いのままグラウンドへと飛び出した。校舎に入れる開けっ放しのドアから離れた丹羽は、右にカーブし、グラウンドを見るべく目を開け耳を開ける。

「……………」
丹羽は、啞然となった。

耐性がついていると自分でも思っていたが、それにしても今現在丹羽の目が捉えている状況は酷いものだった。

酷いなんてものじゃないのかもしれない。

野球とサッカーが同時に出来る広いグラウンドというのがこの学校の売り文句だった。

その広いグラウンドには、死体の床が、出来上がっていた。

二十、三十なんて数字では事足りない生徒や教師が、横になって死んでいる。体の一部分が貫かれている者もいれば、頭からグラウンドに突っ込み、尻を空に極端に向けるというみっともない姿で死んだ者もいた。

「……………」
力が失われ、勢い良く膝をグラウンドの地面に付ける丹羽。

もし。

もし、だ。

この場所に誰か生きてる奴が居たとしても、こんな数の死体が周りにあって生きようなんて思える訳がない。

「……………」
それでも丹羽は、諦めなかった。無理矢理力を込めて立ち上がり、無言のままフラフラとグラウンドを敷き詰める死体の間にある赤い地面を踏み締めて行く。死体の間の隙間を捜すことが、まず重労働だった見渡せば見渡す程、死体しかない事実を強引に突き付けられる。こんな足場を突き進める者など、耐性がついていた

り、他に何か気にかかることがあって無我夢中になれたり、本当に狂っている連中しかない。

「俺はその中のどれなんだろうな」

頭が無くなっている中年の死体を確認しながら、死体に向けて丹羽は呟く。その言葉に反応する者は、当然居なかった。

だが。

ここで丹羽は、ある人物が死体の床に混ざって倒れているのを見かけた。

「な……」グラウンドの中央で、丹羽は驚愕する。「お前、三嶋か！」

丹羽が見つけたのは、頭が何かによって殴られ、原型を留めていないぐちゃぐちゃな顔だった。

それを見て、丹羽はまず 他の奴らと違う死に方をしてるぞ、こいつ と思った。

しかしそこで、完全に死んでいると思われる者の口が、微かに動いたのだ。

丹羽は虫の知らせのおかげかそれとも勘のおかげか、気付くことが出来た。

小さい声で。

その生存者 三嶋勇気はこう言ったのだ。「ニヤニヤ」と。

「三嶋か！ 三嶋なのか！」

丹羽は他の教師達を殺した三嶋に対する恐怖心などかなくなり捨てて、死に際に立たされたれているひしゃげた顔の三嶋に声をかける。三嶋は、おぼろげながらも「ああ、丹羽、先生、かあ」となんとか反応した。感極まった丹羽は、先刻の坂口と同じように左手で三嶋の頭を支えながら、三嶋の顔を見下ろし声をかける。

「三嶋！ 三嶋！」

「わかつてる、よ。丹、羽先生、ガハッ、ガハッ」

「む、無理すんなよ！ そうだ、ハンカチで血を……」

血を吐きながら咳をした三嶋を見て恐ろしくなった丹羽が自分の

ズボンからハンカチを取り出そうとしたが、三嶋は「い、いよ、先生」と呟きそれを止める。

三嶋は、わかっていたのだ。

あれだけ硬い物で何回も殴られたんだ。

もう自分は死ぬしかないのだ、と。

「もう、いい、んだ、丹羽先生……」

「何がいいんだよ」丹羽は苦い表情で三嶋に向けて言う。「もう俺は嫌なんだよ！ 男子女子関係なく！ 俺の目の届かないところでいつのまにか死んでるのを見るのが！ 何も出来ずに立ち去るしかない、俺自身が！ なのに今度は俺の目の前でちゃんと生きてる奴を見つけたのに、また……また、死ぬのを見なきゃいけないのか、俺は！」

生きる！ 生きてくれ！

続け様に、丹羽は叫ぶ。取り出したハンカチで止まらない三嶋の出血を、なんとかして止めようとする。

「ほんの少し前まで笑ってたじゃねーか、お前ら！ なのに何で死んでんだよ！ お前ら、まだ俺より十年も生きてねーじゃねーか！ 生きてたらいいことはある！ だから何がなんでも生きる、お前らあ！」

「……へへ。丹羽先生、意外、と、熱血、だったんだな」

丹羽先生の珍しい姿だけでも見れりゃ、いっぱい人を殺した俺への手向けならもう充分だ。

途切れ途切れになりながらも、なんとか三嶋は丹羽に言う。

新聞部が組み立てたプログラムの下、三嶋は意識をしっかりと保っていた。

三嶋は知っている。

自分が新聞部によって少し体が強化されている為に、未だ自分が生き延びているのだということ。

自分が、一体全体何十人の生徒を殺したのかということ。

「ああ。すまねえ、みんな」

瞬間移動能力を新聞部から渡され、谷山と共に殺戮の限りを尽くした三嶋は、誰彼ともなく謝罪の言葉を紡ぐ。「でも、俺は、さ…」

「やめろ、やめろ！ 三嶋！ 三嶋あ！」

ひしゃげた顔の中につつすらと判断出来る臃げな三嶋の目が、ゆっくりと閉ざされていく。それを見て泣きながら叫ぶ丹羽だったが、三嶋は。

「ニヤニヤの車椅子を、ずっと押していたかったんだ」

最後にそう、呟き。

午前八時三十七分。

丹羽の体と叫び声ともつかね泣き声に抱かれながら。目を、閉じた。

「あのさ。正直なところ、君がどんな能力を持っているかが君がその能力で僕に立ち向かおうとしようが、そんなことはどうでもいいんだよ」

心底そう思ってるんだけどね、と言い、両の掌を自分に向ける霧島に笑いかける新聞部。ニヤニヤとは笑わず、嫌悪感の塊を、全身全霊で「うるせえ！」と叫ぶ霧島に向けながら、新聞部は続ける。

「ただね。僕は僕の片割れである君に渡った僕の能力がどんなものか知りたいというのもいささか冗談ではないんだよね、これがさ。ま、彼女もまだ見つからないし。時間潰しの暇つぶし程度のどうでもいい時間帯に、君の能力を見せてくれよ」

言いながら新聞部は、片手の掌を霧島に向けた。その掌全体が光りだし、校長先生を亡き者にした『波動』を霧島に発射しようとする。

だが、その『波動』の形は以前のそれと少し変わっていた。校長先生に攻撃した時、人間の頭大の大きさはあつた筈のその『波動』が、今回は野球ボールのような大きさに小さくなっていたのだ。

そのおかげかどうなのか。

新聞部が射出するその攻撃手段は校長先生の時とは違い、連続で何発も製造された。新聞部は無言のまま片手を小まめに動かし、攻撃の範囲を広げる。

「あ？」

惚けた声を出す霧島の前に、『弾丸』の壁が現れた。

速度はそれ程でもない。避けようと思えば簡単に避けられる攻撃かもしれない。

ただし、それが一発だったらの話だ。

「いやはや、やっぱり野球ボールの大きさに抑えるのもいいかもしれないね」。速度は遅くなるし一発が攻撃出来る範囲は狭くなるけど、連射出来るってのは本当に気分がいいや」

言いながらも、新聞部は右の掌から『弾丸』を発射し続ける。

タイムラグの連射が生み出す、逃げ場のない殺人方法。

霧島の逃げ場は、隙間はあるものの人一人分の大きさ、ましてや霧島のように体格の大きい者が抜けられる『弾丸』と『弾丸』の隙間など、もう既にないと言い切ってもよかった。

そんな状況で。

「逃げらんねえじゃねえかよ、こんなの」

自身に向けられた殺意から発せられる威圧感に冷や汗を流しながら、覚悟を決めたかのように霧島は掲げた両の掌を、光らせる。

瞬間。

逃げ場が埋め尽くされる程の、新聞部の『能力』が。

霧島へと向かう途中に、何か別の物によって、遮られる。

大砲の弾が着弾するかのような大きな音が新聞部と霧島の間で発生し、全ての『弾丸』が、霧島能力によっていなされた。煙りがあがり、しばらく両者共目の前に居る敵の姿を確認出来なくなる。

「ふーん」新聞部は感心したように呟く。「暴力的で短絡的な君にその能力が行き着くとは流石の僕も思い着かなかったよ」

煙りが晴れ、新聞部は霧島の姿が見えるようになる。自分が起こした現象の全てが理解出来ないというような、そんな困った表情で、新聞部の方を見る。

「俺の能力は、この使い方ですらに合ってるんだよね？」

誰に呟いたかどうかわからない霧島の言葉に、「ま、あながち間違いないよ」と勝手に返答する新聞部。

「ある程度の攻撃を防ぐ盾を発生させる能力が、霧島君に渡るとはな。ランダムとはいえアンバランスにも程があると思うんだけど、まあ、ご愛嬌といったところなのかな」

ニヤリニヤリと笑いながら、「ほら霧島君なにぼーっとしてるんだよ。ふっかけてきたのは君の方なんだから、せいぜい自分の能力を汗水流して必死になりながら僕の攻撃を防いでみせてよ」と言い、今度はただの一発だけ『弾丸』を霧島に発射した。

「うおらっ！」

生み出された『弾丸』。

威圧感を出しながら近づいてくる狂喜の白い物体。

掛け声を無駄に大きな声で出しながら、霧島は自身の能力を発動する。右の掌が光りだし、そして目の前に『非日常』を作り出した。霧島を守る壁。

霧島の半分くらいのおおきさ。薄い青色。厚さは全くといっていい程ない。そこらの それこそ谷山のレーザーによって割られた窓ガラスの厚さと代わり映えしない。

そんな壁が。

空中に、固定されたように浮かんで動かない。

『弾丸』が進む直線上に作られたその壁は、霧島に着弾する筈だった『弾丸』を防ぐ。音をたて煙りを上げ、しかしそれでもその壁には少しのヒビも入っていなかった。

「能力名『盾』」その一連の様子を見た新聞部が呟く。「ただ守る

ことにしか使えないけど、それ故に防御力は凄まじい。大きさや発
生させる場所は全て能力を使う者の自由自在。……いやー、まさか
僕が二番目に考えた能力が君の物になつてるとはね。些かやぶさか
ではあるけど、まあまあ仕方無いって思い切るしかないかなー」

「ハア、ハア。どういう意味だ、そりゃあよ」

自分の物になつた能力とは言え未だ目の前に広がっている、漫画
やハリウッド映画のようなアクションシーンに頭がついていけない
霧島は、思わず荒く息を整えながら、真っ直ぐに新聞部を見る。
「能力名って何だ。新聞部。お前が考えた能力ってのはどういう意
味だっ！」

霧島は咆哮しながら、走り出した。血の池につかっていた靴がび
ちやびちやと音をたてるのに気がつきながらも、「答える、新聞部
！」と殴りかかろうとする。

「答えるって言いながら殴りかかれる展開を作り出すのは間違っ
てるんじゃないかな、霧島君」

そう言いながらため息をつく、新聞部は霧島に向けて『弾丸』
を連射した。再び作り出される、一発一発が致命傷の『弾丸』で構
成された逃げ場のない攻撃。すかさず霧島は「くっ」と言いながら
急ブレーキを自身の体に向け、大急ぎで校舎一階の縦幅と横幅それ
ぞれの大きさに等しい大きさの『盾』をつくる。

霧島と新聞部の間に。

薄い青色をした薄い大きな壁が、視界全体に入り。

新聞部によつて作られた『弾丸』の壁が、霧島によつて作られた
『盾』によつて、防がれた。

「ハア、ハア」

煙りがあがる中、依然息を荒げながら、霧島は新聞部に背中を向
けて走り出す。浜松先生や教頭先生が沈んでいる血の池の前に、再
び戻る霧島。中央から裂かれ、内蔵を血流ごと流している死体を見
て吐き気を催しながらも、霧島は後ろを振り向き、先刻より少し遠
い位置にいる新聞部の姿を確認した。薄い壁の向こうに、青色が少

しかかつて見える新聞部の姿。『盾』は霧島が作成した時間から十秒が経つと、霧島の新聞部との間にとりあえず境目が欲しいという意思に従順せず、自動的に消える。自身に迫る死の恐怖。

ニタニタと笑う新聞部が持つ確かな殺意。

霧島に向けられた、静かな殺意。

「ハア、ハア。くそつ！ テメー卑怯だぞ！」

あまりの緊張感にしびれを切らしたのか、いきなりこう叫び出す霧島。それを聞き、「いきなり何なんだい」と返す新聞部。

「僕のどこが卑怯なのかな？ 寧ろ君達には僕に感謝して欲しいくらいなんだけど。ていうかあれだね、そもそも本当だったら霧島君を含めた皆は僕がその気になれば一気に殺してあげることだってできるんだ。だから君達は僕に感謝をするべきなんだよ。ちんたらちんたら僕がやりたいこととは別に遊んであげてるんだからさ」

「意味わかんねーよ！」新聞部が高らかに語った内容を一蹴する霧島。「殺すとか！ 遊ぶとか！ お前の言ってることは逐一意味不明なんだよ！ 黙って俺の質問に答えてろ！ ミサオだったら「はいはいわかったよ霧島君」とか言いながら俺にゆっくり説明してくれる状態だぞ、この展開！」

「はあ。君はいつもいつもそうなのかい？ 自分で考えずに他人から与えられる答えを聞いて満足しているのかい？ もしそうだったら……流石の僕も君を最低な人間だと断定するよ」

新聞部はそう言うと言いを止め、静かに『弾丸』一発製造し、発射させる。

「違いよー！」

対して霧島は。

言いながら、走り出した。

両手を出さずに、『盾』を作らずに。

殺意の塊を避けて、一気に新聞部へと近づこうとする。その表情には、新聞部の自分への言葉に対する、怒りが表れていた。

先程まで『盾』を出すことでしか対処してこなかった霧島の突然の行動に、初めて焦りを覚える新聞部。「いきなりどうしたんだい、霧島君」

「俺は、馬鹿なんだよ！ だから俺は限界まで自分の力で頑張ってる！ それでも駄目なら、他の奴の力をかりてでも、ゼツテー諦めねえ！」

新聞部が連続して作り出す『弾丸』をかわし、時折『盾』を作りだして防御し

「よう、新聞部」

「くっ」

ついに霧島は。

新聞部の鼻先にまで、辿り着いた。

意気揚々と右拳を振り上げ、新聞部が気絶する程度の打撃を与えようとする。

しかし。

霧島は気付いていなかった。

新聞部がわざと焦った演技をし、霧島を近くにおびき寄せたその事実を。

「何がかな、霧島君」と言いながら、新聞部が霧島の腹めがけて『弾丸』を発射させようとしていることを。

その事実寸手のところまで気がつき、霧島は必死で避けようとする。だが、時は既に遅かった。振り上げた全力の拳を止めることに数秒かかり、そのタイムロスで霧島は絶体絶命に危機にひんしていた。

それを見て。

「だったらっ！」

霧島はあえてその拳を止めずに、更に力を加えて自身の攻撃を加速させた。その様子を見て、ニタリと笑う新聞部。彼の手には光りが灯っており、いつでも『弾丸』を発射出来る段階にいた。

「うおおおお！」

「どちらが先か。楽しみだねえ、ホント」

霧島巧。

新聞部。

彼ら二人は、それぞれの攻撃に全力を込めて、覚悟する。

片方が速ければ、片方が負ける。

その単純なイコールに、新聞部は歓喜を覚えた。

これだよ。これだよこれだよこれだよ僕がやりたかったのは

！ こういう展開を僕は待っていたんだ！

新聞部は、霧島に一つの言葉を言おうと決意した。自分が勝って

も。自分が負けても。霧島に、笑顔でこう言おう。

僕を楽しませてくれてありがとう、と。

「馬鹿かお前らその二人っ！」

けれども。

二人のその緊迫した状況は。

「うわっ！」「ごはっ！」

とある女生徒が、新聞部が霧島を向く方向と同じ方向に投げ付けた肩掛けバッグにより止められる。まず新聞部の後頭部に直撃し、次にそのままの流れで宙を進むバッグの直撃を霧島が鼻に受けた。

開けっぱなしのドアから入り、倒れ込む二人に大股で近づく少女。

「バカかお前ら！ 目をつぶりながら死んでる奴らばっかりのグラウンド駆け抜けて校舎の中に来て、やっとこさ生きてる奴ら見つけたと思つたのに喧嘩中ってどういう意味だこの野郎共！ 利息込みで私のドキドキ返せよおい！」

ハア、ハア、と荒いだ息を整え、額に流れる汗を豪快に服の袖で拭きながら、彼女はとてつもないスピードの肩掛けバッグによつて倒れた二人の男子生徒に向けて、再び大きな声を投げかける。

霧島は「何だお前いきなり！」と憤慨しながら。

新聞部は「……君か」と肩掛けバッグを投げ付けてきた邪魔者が

誰なのか確認しながら。

事情を全く知らない彼女の声を。

あまりにも場違いな彼女の声を。

斉藤伊里の、声を聞いた。

「早くここから逃げるぞ！ 川崎がここに来たら私たちも危ねえ！」

「ああん？ 何言ってるんだ、お前」その声にまず初めに対応したのは霧島だった。

「川崎って奴が誰だかわかんねーが、危ねーのは新聞部……って危ねえ！」

手と手が触れ合う位置で自分共々倒れているを見て、霧島は急いで立ち上がり、距離を少しだけとる。斉藤に向けて「早く逃げろ！ こいつ、よくわかんねー弾出してくるぞ！」と逃げるよう催促する。

「な、何言ってるのあんた？」しかし、斉藤は知らなかった。「新聞部が弾出すって、どういう意味だったの」

その言葉を聞き言葉を失う霧島と、先程まで無表情だった顔を二タリと笑わせる新聞部。

惚けた顔をした斉藤は。

霧島と新聞部の方をちらちらと見ながら、不安を募らせる。

「ちよつと待て。川崎が三嶋をあんな風にしたのを私は確かに見たけど、その前、川崎は、何で死んだ奴らの中、一人だけ立ってたんだ？」

ブツブツと小さな声で呟いても答えの出ないその疑惑は、斉藤の中でどんどん膨れ上がっていく。

「三嶋が、あいつらをあんな風にしたってことなのか？」

川崎だけが、悪いのだと思っていた。

母親に少しだけかぶった、川崎だけが。

だけ。

「川崎だけじゃない。三嶋もなのかもしれない。だったら、他にも居るかもしれないってことなのか？」

やがて、斉藤は。

この異常な空間の中、『まだ』生き延びている二人の異常な男子生徒に、疑惑を覚える。

新聞部と、名前すら知らない大柄な男子。

「そ、そういうことなんだよ！ 悪いのは全部こいつだ！ だから逃げろ！」

「そつだ、斉藤さん。君の言うことは合っている。悪いのは全部、この霧島巧という同級生だ。だから一緒に逃げよう」
そんな斉藤に。

二人の生徒は、ほぼ同時にこう言いかけた。

「はあ！ 何言ってるんだ新聞部！」思わず啞然とする霧島。

「何を言っているんだい、霧島君」思わず啞然とする、というフリをする新聞部。

「……………」

無言になり、二人をゆっくりと見比べる斉藤。

新聞部は心の底でこう思っていた。

あーあ。つたく、邪魔をし過ぎにも程があるよね、斉藤さん。死にに来たんだろ？ 僕のストレスを積もらせた君が悪いんだ。完全に僕を信頼したところで、後ろから君を殺してあげるよ。

そんな新聞部の前には。

「……………」

支持率百パーセントの生徒会長である、新聞部が悪者なのか。

誰だか知らない不良が、悪者なのか。

どちらか迷っている、斉藤の姿があった。

『能力、施行』

「うわっ！」

狩谷は自身の能力を使いその心情を読み取ると同時に、直ぐさま扉の左に転がり込んだ。そうして逃げた狩谷が起き上がった時には既に、谷山による攻撃が開始されていた。

レーザー。

谷山の能力による攻撃で、屋上と校舎の四階とを繋ぐ扉が、音を立てて中央だけ円形に削り取られる。熱を出し、その部分だけ煙りを出しているのを狩谷は見た。

そして、そのまま狩谷は、能力を発動させたまま谷山の方を向く為に立ち上がる。

無表情な目で狩谷を見る谷山の右手が、光り出した。

『能力、施行』

狩谷に向けられたその右手から、レーザーが射出される。

「……………」

今度は無言で冷静に谷山の能力を分析し、右に少し動いた程度の動作で 狩谷はレーザーから回避した。ジジッ、という独特な音と共にレーザーが自分の体のすぐ左横を通過するのが感じられる。

『能力、施行』

その間、わずか三秒。

谷山が、能力を発動し、そしてもう一度発動するまでの時間。

「三秒だ」狩谷は確信して言う。「三秒、谷山さんの攻撃にはロスがある」

言いながら自身に向けられる凶器を、難無くかわす狩谷。彼の目には既に恐怖心のかけらも残されていなかった。いや、最初から狩谷の目には恐怖などなかったのかもしれない。

今、彼の目には。

自分の『日常』を脅かす『非日常』に対する軽蔑しかなかった。
『能力、施行』谷山の能力には弱点がある。

まず、射出から着弾に至るまでの時間が決して早いとは言いつれない点。運動神経がまるでないといえる狩谷の足でも簡単にかかわせる程、谷山のレーザーは遅かった。

しかし、本来ならば狩谷は谷山のレーザーをかわせない。かわせるわけがない。新聞部という男子が谷山に与えた能力が、一介の高校生男子にかわせるくらいのものである訳がない。だが 狩谷はかわしている。現に、今さっき放たれたレーザーを、冷徹な表情を全く崩さずにかわしてみせた。

何故、狩谷は谷山の能力をかわすことが出来るのか。

谷山さんの能力はやっかいだ。当然、普通の状況だったら僕は谷山さんの攻撃をかかわせる訳がない。

けれども、狩谷は。

『能力、施行』という 能力発動の感情しか持ち合わせていない現在の谷山による攻撃ならば、避けられるのだ。

狩谷の心を読み取る能力により。

自分の体しか狙わない谷山の能力発動のタイミングが常にわかる、今の狩谷ならば。

容易に、避けられる。

「谷山さん」

谷山さんはさ、もしかして誰かに操られてるんじゃないかな。だから僕の体だけしか狙えないし、能力施行とかいう感情しか持ち合わすことができないんだ。

もし、谷山が新聞部により操られることもなく、ただ単純に殺意を持って狩谷と対峙していたのなら、狩谷はものの数分で死ぬことになっていただろう。それこそ、わざと屋上の床を狙って狩谷の足場を崩すなり、狩谷の心を読み取る能力が無効になるよう様々なことを思えばいい。

だが、しかし。

現在の谷山には、それが出来ない。

『能力、施行』 『能力、施行』 『能力、施行』 『能力、施行』 『能力、施行』 『能力、施行』

三秒の間をとって、休むことなく機械的に谷山は能力を使い続ける。それでも、狩谷には一発もレーザーがあたることはない。その上、狩谷は徐々に谷山に近づいて行っている。避けるついでに。攻撃をかわすついでに。何の苦もないとでもいたげなように、ゆっくりとゆっくりと。しかし確実に、狩谷は谷山が佇む屋上の端へと近づいていっていた。

『能力、施行』

「……………」ギリギリ避ける狩谷。「い、今は危なかった」

狩谷が息をつくのも無理はない。狩谷の後方にある屋上の扉は、現在穴だらけになっていた。扉の横のコンクリートで出来た壁も同様だ。何発も何発も避けるかわりに、何発も何発も狩谷は死線を探り抜けている。

そして、その死線は谷山に近づくとつれて狩谷に襲いかかってくるのだ。

そうだよ。そんなに簡単にいく訳ないよね。

自分の『日常』を脅かす『非日常』に対する恐怖を少しだけ、ほんの少しだけ味わいながら、狩谷はそう判断する。

『能力、施行』

谷山がそう思う度に発射されるレーザー。三秒のタイムラグを生させながら連射される、狩谷に向けられた死の恐れ。

たかが三秒。されど、三秒。

そのタイムラグは間違いなく訪れるものであるが、それ故に狩谷は谷山の近距離に行く度に、死の危険性が高まることを確認した。

「そりゃそうだ」谷山を見ながらつぶやく。「近くに行けば、それだけ谷山さんの攻撃が僕に当たるまでの時間が短くなるってことじゃない」

自分が上手くいく日常を切望し、非日常をとことん拒絶する少年は冷静に判断する。

なんてことはない、自然現象。

発射台である谷山を攻撃する為に近づくということはずなわち、谷山が精製するレーザーに自ら飛び込むことと同意なのだから。

『能力、施行』

狩谷が思考していることなどお構いなしに、谷山は能力を施行する。

人体を削る、レーザーを。

容赦なく、発射する。

「……………」

再び無言になり、レーザーを避ける狩谷。少しだけ谷山に近づいた分の距離分後ろに下がり、狩谷はもう一度屋上の扉の前に立った。目の前には、レーザーを自分に向ける谷山の無機質な目。

「……………どうしようかなあ、これ」
近づけない。

谷山をどうにか止めようにも、近づいたら自分の危険性が高まる。『能力、施行』右に数歩動いて避ける。『能力、施行』左に数歩動いて避ける。再度屋上の扉の前に立つ狩谷。

「能力、施行……………」

狩谷は一人、誰に向けるでもなく小さく言う。

どうすればいいのか。

谷山に近づくには、どうすればいいのか。

三秒ごとに向けられる死の歓迎を冷静にかわしながら、狩谷は考えた。

そんな狩谷の耳に、チャイムの音が鳴り響いた。朝礼開始をつげる、チャイムの音。

八時三十分になった。自分がいつ屋上に来たのかわからない狩谷にとって、谷山と対峙した時間が全くわからない。多分十分は経ったと思うんだけど、と思う狩谷の額からは、冷や汗が流れ始めてい

た。

「あれ？」

その汗に気付き、服の袖で拭い取る狩谷。「あれ？」

二度目の疑問の言葉。狩谷は、何故自分の口から 非日常に何の興味も抱かない自分の口から 非日常に対峙する、ただそれだけで冷や汗が流れるのかわからなかった。依然攻撃を繰り返す谷山を目の前に生まれた、この場では場違いといつてもいい疑問。その疑問を頭の中で繰り返し、やがて「あつ」と疑問に対する答えに辿り着く。

「ミカと霧島君だ！」谷山のレーザーを左に避けながら、狩谷は叫んだ。

そう。

狩谷が冷や汗を出した原因は、谷山でも、谷山を操る『非日常』の根源的な何かでもない。

高柳と霧島。

狩谷の、日常だった。

「まずいよ、これ」

霧島君はなんとか頑張つて生きてるかもしれないけど、ミカはミカは、生きていくのかどうかわかったもんじゃないっ！

実際、狩谷の目の先の下には沢山の死体が存在している。運動神経が豊富で、かつ『数学の宿題を取りに行く』と行って校舎から出た筈の霧島ならば、生きていく可能性は高い。けれども、高柳は。高柳美香は、保健室に行くと言い、校舎一階から離れていない。

「こうしちゃいられないんだ、僕は」

『能力、施行』という感情と共に使われる谷山の能力を避け続けながら、狩谷は一言呟く。

そして、決心した。

谷山を止めるにはどうすればいいのか。谷山の近くへ向かうことは恐らく可能だ。焦らずに対処すれば、なんとかレーザーを避けられる筈。

狩谷は、決心した。

それならば、本来の問題。狩谷が考えようとして、しかし拒否していたその問題。

谷山皆瀬を止めるにはどうすればいいのか、という問題。

谷山は操られている。操られ、反抗することが不可能になっている。機械的な行動をするよう義務付けられ、その呪縛から解き放たれることは困難を伴う。

ならば、どうすれば谷山を止められるのか。

狩谷は、決心した。

谷山は殴るだけでは止まらない。谷山は車椅子から引きずり落とすとしても止まらない。

だから、狩谷は決心した。決心せざるを得なかった。汗が体全体から流れ、息が自然と荒くなる。

谷山さんを止める為とはいっても、これは……多分、僕とミカと霧島君の日常をめちゃめちゃにする行動かもしれない。

そう思いながらもため息をつき、谷山の方をしっかりと見定めながら狩谷は穴だらけのコンクリートの壁に背中をつける。そうした後、狩谷は瞬時に座り込み、穴と穴の真ん中になってつくられたコンクリートの壁の塊を落ちていた壁の向こう側から取り出す。手の平大のコンクリートをしっかりと握りしめ、谷山の攻撃を左に転がってよける。狩谷が座っていた場所には、穴がつくられた。

決意までの時間は約七分。狩谷が思っているよりも長く、狩谷が思っているよりも多い回数 of レーザーをよけつつも。

コンクリートの塊を、握ったまま見て。

狩谷は決心し、谷山に向けて言った。

「谷山さん。今から君を止める為に、君を殺すよ」

しっかりと冷静な目で谷山を見つめながら狩谷は言い切った。自身の日常を壊すかもしれない言葉を。高柳や霧島に降り懸かる非日

常をどうにかして振り払おうとするその言葉を。

「僕は、谷山、さんを、倒す……殺す」

殺す。殺す。殺す。

依然狩谷に向けて射出されるレーザーを軽くかわしながら紡ぐその言葉は、やがて狩谷の心を一点に集中させる。

殺す。

谷山皆瀬を、殺す。

「僕の手で、殺す」

額から流れる汗はいつの間にかおさまっていた。何故なのか。今から殺人という罪を犯そうとする狩谷の心には引つ掛かることのない。かけた問いだったのだが、これだけは言えるのかもしれない。

例え、僕が谷山さんを殺したところで、もうこんな状況なんだ。

僕が罪に問われることは、多分ない。

谷山さんと三嶋君の　せいに出来る。

何故なのかはわからない。

だが、狩谷の判断したその一部始終の結論は、奇しくも川崎直美が判断した結論と同じものだった。

川崎は、自身の破壊衝動のまま動く為。

ならば、狩谷は。狩谷は何の為にその結論に至ったのか。

狩谷は。

「早く、谷山さんを殺して、ミカを探して、霧島君を探して、霧島君の宿題を手伝って、それでもって、僕が上手く生活出来る未来を作りだそう」

狩谷は、自身の欲求を満たす為だけに谷山を殺そうとする。殺人なんて自分にとっては所詮非日常だ。テレビドラマとか漫画とか小説の中の、どうでもいい非日常だ。そうなら。非日常なら。

僕にとっては、何の関係もない。

「……………」無言で走り出す狩谷。

『能力、施行』

目の前には光り出した手の平を自分の方に向ける谷山の姿があったが、しかし、狩谷はそんなことなどお構いなしにコンクリートを握りしめる。

三秒。

谷山の掌の光りが収束し、円形を象る。極限まで光るその円が伸び、狩谷の方へと向かった。熱を帯び、風を巻き上げ、何人たりともその延長上に居ることを許さない直線が、無表情の谷山の掌から撃たれる。先ほどまでよりも近い距離に居た狩谷は少し焦ったが、直ぐに冷静さを取り戻し、目を見開き谷山の能力を見極め 左にステップを一度踏んで、レーザーを避けた。

「ふう」先ずは、第一関門。「次」

狩谷は自分と谷山の距離を目算ではかり、谷山に近づく道を三分割した。

第一関門。第二関門。第三関門。

当たり前だが、狩谷が谷山へと近づく度に狩谷の危険は高まる。その為狩谷は、谷山へと着実に近づくことが出来るように、それぞれの関門の間の距離をばらけさせた。

第一関門が一番長く。第二関門がその次に短く。第三関門がその次に短い。

谷山に近づく度に、それぞれの関門と関門との距離を短くした。

「……………」

無言のまま冷静に、早歩きで谷山の元へと近づく。屋上の半分を越え、谷山との距離は大きく狭まった。

『能力、発動』そして、三秒。再度谷山の掌からレーザーが作られ、狩谷に向けて撃ち出される。しかし今度も狩谷はしっかりとその攻撃を見定め、右にかわした。

「よし」誰に向けるでもないその眩きを小さく放ち、狩谷は進む。

第二関門突破。

屋上の三分の一。

車椅子に座る谷山の姿。

第三関門。

「ふうっ」

そうして狩谷は自分の能力を最大限まで注意し、谷山の一挙一動を固唾を吞んで待つ。三秒。たかが、三秒。だがしかし、狩谷が感じる三秒はどの三秒よりも長く、どの三秒よりも濃く、どの三秒よりも真剣味があつた。

命がかかっているから。

自分の命だけではなく、谷山の命もかかっているから。

あんだだけ意気込んでおきながら、やっぱり僕は怖いんじゃないか。

当然と言えば当然なのかもしれない。単なる高校生が人を殺すなんてことは出来ないという、その簡単な事実。それに狩谷は、今更ながらに気付いた。けれども、もう遅い。自身の手の平の中にあるコンクリートをしっかりとにぎりしめて、狩谷は聞いた。

『能力、施行』

三秒が経った合図。谷山のたった一つの感情。

これを避け切れば僕はミカを助けに行ける。これを避け切れば僕は霧島君を助けに行ける。これを避け切れば、日常に戻る。

これを避け切れば。

時間がゆっくりになっていく感覚を、狩谷は感じていた。その緩慢な時間変動を頭の隅に置きながら、狩谷は左へとステップを踏もうとする。大丈夫。さっきも同じことをやったんだから、近づいて出来る筈。そう思いながら、狩谷は左に行こうとした。

その時だった。

「痛っ」

狩谷は、突如訪れた痛みを頭を抱えながら膝をつき、その場に谷山のすぐ近くという最悪な場所に座り込んだ。

え？

何、これ？

「痛い痛い痛い痛いつ！」

狩谷は悲鳴をあげる。何が起きたかわからない。しかし狩谷は自身に降り懸かるその鋭い痛みで倒れ込むしかなかった。意味のわからない突然とした痛み。

だが、狩谷は。非日常の扱いに長けた日常を好む少年は、痛みに堪えながら瞬時に悟った。

これ、痛みの程度はこれの方が凄いけど、これ、これっ！
僕が、必要のない能力を手に入れた時と同じ痛みだっ！

「嘘でしょ」

狩谷は。

自分の元にどんな能力がやって来たのか、僅かだが知りながら。

「……………」谷山の能力が。「……………」レーザーが。「……………」
自分に襲い掛かるそれが。「……………」人を殺す攻撃が。

自分に向かってくることを、感じとる。……あー、これ、死ぬ前によく感じるあれだ　　と思いながら。

走馬灯。

駄目だ、これ。

「ゴメン」

ミカ。霧島君。ゴメン。

僕はもう、駄目だ。

ここで、死ぬ。

狩谷は未だに自分を苦しめる頭を両手で抱えながらも、しっかりと頭を上げて、谷山の掌から発動された能力が自分に迫って来るのを見る。

あーあ、もうすぐ僕の物になるこの能力さえあれば、簡単に谷山さんをごとうにか出来たのに。

そう後悔しながらも、自分の人生を終わらす非日常を、しっかりと眺める。

頭の痛みに苦しみながら、狩谷操は。

こつして目の前を、真っ白に染めた。

「ガハツ、ガハツ」

校舎の裏。雑草が満遍なく存在し、校舎によって出来る日陰で暗くなっているその誰も居ない空間で、一人、口の中から吐く少女。

斉藤伊里。

彼女は依然、校舎の中に入っていなかった。

畜生っ！ 情けねえよ、私！

心の底からそう思いながらも、頭に浮かんでくるのは、沢山の死体と、血に染まりながら笑う川崎の姿だった。

恐怖の戦慄。逃げたいと思う感情の旋律。戦慄という旋律を奏で、斉藤は校舎の壁に両手を授けながら、頭を下にさげて吐く。口の中に酸味が広がることを気にしながら。雑草の上に自分の中の汚い物が撒き散らされることに全く気付かないまま。新聞部が発動した見えない壁により 階の音が聞こえないことに気付かないまま。

それでも、斉藤は吐き続けた。自分の中のどろどろとした感情を制御する為。自分の過去のトラウマと現在のトラウマに立ち向かう為。高校二年生の無垢な少女は、大柄な体を精一杯震わせながら嗚咽を漏らす。

「あんなに大声上げて意気込んだのに、情けねえったらありやしねえよ……」

吐いて、吐いて、吐き続けながら斉藤は涙を流し始める。

彼女の心には、深い闇があった。今まで必死に押さえ込んでいたその闇が、今現在の斉藤の心情を大きくざわつかせる。

母親が、笑いながら父親を殺している光景。

兄弟姉妹は寝ていた。自分が幼い頃に見た。自分しか見ていなかったその光景。

母親が。

動かなくなつた父親を踏ん付け、そして。

襦を開けて呆然と眺めていた自分の姿に気付いた母親が言った言葉。

斉藤は、忘れられない。忘れられる訳がない。

「伊里ちゃん、見てたの。お母さんの晴れ舞台、見てたの。見てたの？ 見てたの。見てたんだ。じゃあ今度は、伊里ちゃんが舞台裏に消える番ね……」

涙を服の袖で拭いながら。口の周りに付いた白い液状の物を服な袖で拭いながら。斉藤は、ゆつくりと、噛み締めるように呟く。

その後どうなったかは全て覚えている。その後自分が何をしたのか、全て覚えている。

斉藤が今しがた唱えたその一連の言葉が、実の母親の最後の言葉になつたことを、斉藤はしつかりと覚えている。

正当防衛と言われて片付けられた、その事実。「私は、殺人者だろうが」言いながら斉藤は校舎の壁に拳をたたき付ける。痛みが全身に走つたことを感じる

斉藤は。襦の陰に隠れていた斉藤は。

その手に、テレビのチャンネルを持つていた。恐怖に怯える少女。信じていた母親が壊れていることを知つた少女。

人は、無意識の内に自分の力を制御しているといわれる。自分の体を壊さないよう、無意識の内に自分に枷をかけているのだ。

斉藤は、それを解き放つた。

「なのに、こんなにグダグダやってる場合じゃねえ」

パアン、と両の手の平で自分の両頬を叩き、「ふうっ！」と意気込むと、斉藤は校舎の陰から走り去つた。一瞬だけ見える絶望の光景。「くっ」と言いながらすぐに目を背け、校舎一階の廊下に繋がる開けっ放しの入口に入る。

そこで見たのは。

「何、だ。生きてる、じゃねーかよ」

生きている。

確実に生きている、二人の少年の姿だった。

一人は後ろ姿だったのだが、それだけで斉藤には誰だかわかった。生徒会長であり、新聞部というあだ名の生徒。高校二年生にも関わらず三年生を差し置いて生徒会長になり、自身のカリスマ性を証明してみせた凄腕の男子。

こちらを向いている男子は誰だかわからなかったが、大柄な体格やはだけた制服、ウエーブのかかった髪型から不良かもしれないと斉藤は判断した。

新聞部と、見知らぬ男子。

その二人が、生きていた。

取っ組み合いをしているのではないかと思われる程の剣幕で知らず知らずの内に、斉藤は叫んでいた。「馬鹿かお前らその二人っ！」

肩掛けバッグを思い切り投げ、新聞部の後頭部に当てる。そのままはねたバッグが次に見知らぬ男子の鼻に当たるのを見て少し謝罪の気持ちを抱きながらも、斉藤は大腿で近づいて座り込む二人の男子を見る。斉藤の目には、二人の男子の姿しかうつっていないかった。「バカかお前ら！ 目をつぶりながら死んでる奴らばっかりのグラウンド駆け抜けて校舎の中に来て、やっとこさ生きてる奴ら見つけたと思ったのに喧嘩中ってどういう意味だこの野郎共！ 利息込みで私のドキドキ返せよおい！」

大声でまくし立てる斉藤。その姿を啞然とした顔で眺めながら、霧島は「何だお前いきなり！」と憤慨する。新聞部は「……君か」と邪魔者が誰なのかを確認しながら、ゆっくりと立ち上がった。そして、斉藤は大声で叫ぶ。「早くここから逃げるぞ！ 川崎がここに来たら私たちも危ねえ！」

「ああん？ 何言ってるんだ、お前」

先にそう反応したのは霧島だった。疑問を隠すことなくおおっぴらに表情に出しながら、それでも霧島は斉藤に視線を投げかける。

「川崎って奴が誰だかわかんねーが、危ねーのは新聞部……って危ねえ！」

しかし霧島は突如叫び、大急ぎでその場所から距離をとった。理解不能な狂乱者、新聞部の近くというその場所から。それを見た斉藤はいきなり立ち上がった目の前の男子に「うおっ」と驚きながら、新聞部から離れた斉藤と同様に斉藤から距離をとる。斉藤が見ず知らずの不良な男子を不審に思っているとは露知らず、霧島は堅い表情で乱れた髪を整えている新聞部に人差し指を向け、今しがた現れた女子生徒　斉藤に忠告を放った。

「早く逃げる！　こいつ、よくわかんねー弾出してくるぞ！」

霧島の最大限の警告。今すぐにでも『弾』を放つかもしれない新聞部の前という極限なまでの危険地帯にいる中での、危険な時間。

けれども、斉藤は。

目の前の男子が発した意味不明な発言に、戸惑いを覚える。

はあ？

「な、何言ってるのあんた？　新聞部が弾出すって、どういう意味だつての」

それは至極当然な流れと言っていていかもしれなかった。いや、寧ろ必然なのだろう。第一印象が不良な見ず知らずの男子が言う訳のわからない助言より、自分も信頼している新聞部の方を信用するに決まっている。

だが。

ここで斉藤は、惚けた顔をしながらも見てしまった。

霧島の発言によりニタリと顔を歪ませた、今までにみたことのない新聞部の表情を。

お、おいおい！　これ、どういうことだ！

新聞部という男子生徒。成績優秀スポーツ万能顔よし性格よしの生徒会長という漫画か何かの売り文句を平然と肩書に持つ男子生徒。その絶大な存在感を放つ男子生徒が、笑ったのだ。大半の生徒や教師が死に至っているこの状況下で。

ヤバイんじゃないかねのか、これ。

素直にそう思う斉藤。霧島と新聞部の方をちらちらと見ながら、徐々に不安を募らせ、次第に誰にも聞こえないような声の大きさで小さくブツブツと呟き始める。

「ちよつと待て。川崎が三嶋をあんな風にしたのを私は確かに見たけど、その前、川崎は、何で死んだ奴らの中、一人だけ立ってたんだ？」

呟いても答えの出ないその疑惑は、斉藤の中で着実にどんどん膨れ上がっていく。

「三嶋が、あいつらをあんな風にしたってことなのか？」

川崎だけが悪いと思っていた。あの異常な空間に立ちながら平気で笑っていた、自分の母親に似た川崎だけが。

「川崎だけじゃない。三嶋もなのかもしれない。だったら、他にも居るかもしれないってことなのか？」

けれども、しかし。

斉藤は、二人の男子生徒それぞれに疑惑を覚える。

自分の知らない表情でニタリと笑った新聞部と、名前すら知らない大柄な男子。

「そ、そういうことなんだよ！ 悪いのは全部こいつだ！ だから逃げる！」

「そうだ、斉藤さん。君の言うことは合っている。悪いのは全部、この霧島巧という同級生だ。だから一緒に逃げよう」

そんな斉藤に、二人の生徒は、ほぼ同時にこう言いかけた。それを聞き、斉藤はまた疑惑の混乱におちた。どっちが悪い奴なんだ。いや、もしかしたらどっちもか？ いやいや、どっちもじゃないなんて可能性も……それはないのか？ どうなんだ？

どうということなんだよ。

小さくつぶやいたその言葉は二人には聞こえていない。片方は必死に、片方は冷静に、弁解している。どちらが正しいのか。どちらが正しくないのか。頭を抱えながら悩む斉藤にはわからない。

やがて、三人の間に沈黙が訪れた。「……………」一人が苦悶の表情で押し黙り。「ハア、ハア」一人が肩で息をしながら落ち着こうとし。「…………ふう」一人がわざとらしくため息をつく。

「よしわかった」数分にも満たない沈黙を突き破ったのは新聞部だった。「このまま押し問答してもしょうがないし、今のままだと間違いなく答えはでないだろうから、斉藤さんに今までの僕の行動を聞いてもらって確信をもってもらおう」

「「はあ？」」

突然の提案に戸惑いを隠せない二人の少年少女。自分の斜め横から聞こえてきた言葉によつて互いに顔を見合わせる二人だったが、「あ、いちいち相槌とかうたなくても全然いいから。めんどくさい霧島君の反応なんてどうでもいいし。というか箇条書の要領でいってもいいかな。まあいいよね。うん、いいに決まってるよ絶対」と前置きにしては長すぎる前置きをいつて話し出した新聞部によつてその視線は語り出した新聞部に向けられる。

「今日の朝七時に登校。七時から八時まで生徒会。八時から八時半まで教室で読書」

そこまで言った段階で「嘘つけお前！ちげーだろーが！」と講義を申し立てる霧島を無視しつつ、疑惑の表情のまま立つ斉藤に真っすぐな視線を向けて、こう言う。

「僕は犯人じゃない。どちらかが生徒を殺した……………って言うのなら、それは間違いなく霧島君だ」

「そ、そうなのか…………？」

本当に、そうなのか？

斉藤は確信も持てずにいたが、それでも新聞部の言葉に頷きかけるしかない。それは何故なら 斉藤が今の今まで学校の外に居たからに相違ない。

学校の外。

非日時を全く悟ることのできない、所謂権の外に居た時に起こった非常に異常な事態。冷静な判断力など、今の斉藤には全くといっ

ていい程残されていなかった。どう転んでも。どっちに転んでも、今の斉藤ならばおかしくない。

「……っ！　じゃあこれ見ろよ！」二人のやり取りを聞いた霧島は、対して、『能力』を発動させた。後ろに下がり、目の先に斉藤と新聞部がいるのを確認しながら、両の手の平を前方に掲げる。

盾。

薄く頼りないその壁が、大人の一人分の大きさで斉藤と新聞部の間に発動される。

「な、何だよこれ！」幾度にわたる疑問文を再度叫びながら、斉藤は突如現れた非日常に驚嘆する。

「……俺の名前は霧島巧だ。八時に登校、八時二十分そこらまでミサオと会話して、その後宿題取りに行こうと校舎を出たんだが、無茶苦茶な衝撃が来た。で、不安になって校舎に戻ったら　こうなつてた」

言いながら、霧島は両腕をそのままの状態で維持しながら廊下の右端に移動する。

仕方がなかった。

遅刻寸前で見えたグラウンドに死体を大量に見つけ、川崎に戦慄を覚え、自身のトラウマに頭を悩ませた　そんな体験を数分間に経験してしまった斉藤には、周りを見る余裕などなかった。

仕方がなかったのだ。

誰も生きていない可能性もある。それでも斉藤は、暴走する川崎を止めようと粉骨碎身の勢いで立ち上がったのだ。

だから、仕方がなかった。

「な……え？」

職員室横の階段の近く。自分が二人の男子生徒と押し問答しているその空間の中にある、有り得ない状態に気付くことが出来なかったのは、仕方がないことだった。「嘘、だろ」

力を無くし、膝を廊下につける斉藤。その廊下の先　自分目の先には、教師の死体が折り重なっていた。血という血を流し、赤い

地面を作り上げているその人だった物体を、斉藤はようやく確認した。

そして、斉藤は確信する。

新聞部。

霧島巧。

片方は自分の疑惑を晴らそうと、自分の状況証拠だけを喋った。かたや片方は、斉藤に理解してもらおうと、周辺の状況証拠を付け加えて喋った。斉藤が幾人もの死体に気付いていないと悟った上で、ここまでのお膳立てがあるにも関わらず、わからない筈がない。

てかこいつ、隠す気ないよな？

涙目になりながらも、その両目を服の袖で豪快に拭いながら立ち上がり、青色に染まっている男子生徒の方を向く。

ニヤニヤと笑っている、男子生徒の方を。

その視線を見て、男子生徒は白けた表情に一変しながら、両手を挙げて降伏の意思を示した。

「ごめんねー、斉藤さん。なんだか僕さ、途中まではこの中途半端なミステリーっぽい展開に乗り気だったんだけど……目の前の死体に気付いてないとか馬鹿なことする斉藤さんに嫌気がさしちゃったよ」

ま、時間稼ぎにはなったかな。

誰彼ともなくそう言う新聞部。新聞部には、再び不敵な笑みが戻っていた。

「うるせえよー！」

斉藤と霧島が叫ぶ。霧島が新聞部を殴ろうと駆け出し、斉藤が新聞部を殴ろうと一度『盾』を離れる。

しかし。

新聞部は、自身に降り懸かるその小さな小さな驚異を見ずに、天井をじっと眺めていた。

「ハハハッ」

満面の笑みを浮かべながら、斉藤は天井を仰いだまま、呟いた。

「やっと見つけたよ、君を」

「ああああああああアヒヤハハハッ！」

体育館倉庫の入口が開いたことを確認した川崎は、「キヤアツ」と悲鳴をあげる新島の金髪を掴み、恍惚の表情を浮かべる。久方ぶりに入口から日光が射したグラウンドに繋がるその体育館倉庫の中、川崎は新島の金髪を掴んだまま新島を押し倒した。

嫌、嫌、嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌あ！

丹羽が来ると思っていた。

なのに、自分の前に現れたのは、笑いながら自分に恐怖を与える川崎という女子生徒だった。

しかも、だ。

「キヤアああああ！」

「アハハ！ アハハ！ アハハ！ いい声でなくねーハルカチャー！んとか色っぽいよ艶やかっぽいよハルカチャーんとか全く全然これっぽっちもからつきし思わない！ けどさ、けどね！ …… ああああああやっぱウザったいわーこれ！ これっ！ これえっ！」

体育館倉庫を占めていたカラーコーンを押しのけ、無理矢理自分を地面に背中から倒し 狂喜にも似た雰囲気醸しだしながら自分に危害を加えるという、極限なまでの異常性を加えた川崎直美という『いじめっ子』が、体育館倉庫の鍵を開けたのだ。

「何、なのよ」

何なのよ、この状況は！

新島は、そう叫びたい気持ちを堪えた訳ではない。自分の腹の上に馬乗りの状態で存在しながら高らかに笑う斉藤に向けて叫びたかったのに、しかし叫ぶことが出来なかった。

「アハハ！ うるっせえよこのド金髪の馬鹿があ！」アハハ、と叫んでいたのにも関わらず、一変。「これでも食べてるっての！」

何の感情も抱いていないのではないのかと見た者全てを思わせるその冷徹な表情で　血がべつとりとついたコンクリート片を口に入れられたから。

「あ、あへ、あが」

不快感。拒絶という拒絶をしたいその気持ちの悪い異物を口から吐き出そうにも、舌の上に嵌め込まれている為には口からは単調な言葉しか吐き出すことが出来なかった。

「喃語かっつての喘ぎ声かっつての誘ってんですかいつちよ前にっ！

アハハっ！　あー……気持ちいい……気持ちいいよお……」

体育館倉庫の天井を眺めながら、恍惚の表情に戻った川崎はぐりぐりと右手を動かす。新島の口の中に入れられたコンクリートを握っているその右手を。

「あ」

ぐりぐりと。

「あああああ、あああああ、気持ちいいいぐりぐりと。」

「ああ？　アハハ。あー、アハハッ」

悲鳴をあげる新島の声を聞き、全身で歓喜しながら、右手から流れる快感に溺れる。

「ほら、ほら、ほら、食べたいんでしょー？　血がいつぱいついてるよー、このコンクリート。嘗めたいんだよね舐めたいんだよねハルカちゃんは不思議っ娘アピールしたいんだもんねハルカちゃんはハルカちゃんはあ」

「ぐえっ」

自身の体に馬乗りになっている川崎からコンクリートを口の中に入れられている新島は、涙を流しながら必死に抵抗しようとした。口には依然として異物の味が感じられる。自分の口の中がぐちゃぐちゃになっていくのが手にとるようにわかった。鋭い鈍器で殴られるような痛みが口の中を循環し、その度に胃の中に鉄分と細かなコンクリートが流れていく。抵抗しようと噛んだらコンクリートが歯

をえぐった。「んううう」悲痛な叫びも掻き消され、自身をもえぐるその痛みは歯茎に蓄積される。

「あれ？ 今、コンクリート食べようとしたのかな、ハルカちゃん？ じゃあさじゃあさ、オモイッキリカンデミヨツカツ！」

新島の抵抗に気付くと、川崎はこう言いながらコンクリートを新島の口の中に残しながら 全力で下顎を殴った。

「あぎゃあ！」

奥歯を含めた全ての歯が悲鳴をあげる。あ、あ、と呻きながら新島は震える下顎を動かし、なんとかコンクリートを口の中から出そうとする。

「あ、お代わり欲しいの？」

その一部始終を見ると、川崎は新島に馬乗りだった大勢から立ち上がり、あまりの痛みで身動きのとれない新島の下顎を

蹴った。

「ア
」

頭を貫き体を貫き、自分の神経全てを貫くその痛み、新島は声を出すことも出来なかった。その衝撃の余韻で新島の下にあった足を、ゆっくりと噛み締めるように川崎は離れさせる。

「はアツ、ハアツ、ヒヤあつ」

あ、あ、あ、と新島とは違う種類の呻き声を出す川崎のとろんとした表情には既に歯止めが効かなくなっており、次第に口から流れて出すとろりとした一筋のよだれが自分の顎を伝って新島の制服に落ちるのも全く気にしていなかった。

「……………」

口にコンクリートを入れられたまま蹴られ、完全に口の中が壊れた新島の腹に落ちるよだれ。幸か不幸か、体全体が熱くなっていた新島の体は、ゆっくりと垂れたその冷たい液体によって少しだけ覚醒した。「ひゃ、ひゃあ」と両手を頬にあてながら喘ぐ川崎の姿を

確認しつつ、川崎は痛み堪えて口の中からコンクリート片を取り出す。ゆっくりと。だが、確実に。自分の血か、はたまた他人の血かわからないその灰色のコンクリート片を朦朧とする意識の中確認し、右の手の中しっかりと握りしめた。

この状況から脱出する為には。

自分が助かる為。丹羽に会い、一緒に助かる為。

川崎さんを……川崎直美を何とかしないと、いけないんだ。

しっかりと。けれども確実に決段されていくその思いを、しっかりと紡いでいく。右手にコンクリート。川崎は現在も足を広げ、自分の上に立っている。

ならば。

やることは、一つしかない。

この状況から抜け出す為に行う行動は、一つしか新島には与えられていなかった。

「……………」無言のまま、右手の中の物を握りしめ。「うつつ！」自分の持つ全ての力を総動員させ 右手からはみだすコンクリート片の端をおもいきり川崎の左足に突き刺した。

「ひゃぎゃあ」

一瞬にして痛みが体を通過し、機能を衰えさせられた左足を始めに川崎は墜ちて逝く。横たわっている新島の目には、その光景がまるで映画のワンシーンのように切り取られた静止画が連なる動画として見えた。ゆったりと、ゆったりと。川崎という女子生徒は墜ちて逝く。

だが新島は、安心感を得ることが不可能だった。

右足を軸にした川崎は。

新島の腹を着地点として、墜ちて逝く。そうしてたどり着いたその状況は、新島の望んだ状況とは掛け離れた状況だった。

「や、つて、くれるね……………ハルカち……………いやぁん」

もう一度、川崎は自分の体に全体重をかけて馬乗りになった。逃げるのか。この場をなんとかかするか。それ以前の状態を、新島は

つくりだしてしまったのだ。

「いやあん、ハルカちゃんいやあん。痛いんだけど、左足。どうしてくれんの、これ。ねえ、ねえ！」

言いながら勢いよく顔を新島に近づける川崎。「キャア！」思わず新島は悲鳴を出した。当たり前と言っているのかもしれない。新島を見る川崎の目は、とてつもない怒りに支配されていたのだから。「痛いんだよーコンクリートって。昔ね、私ね、鉄コン筋クリートって映画みたんだけどね、あれ面白かったなーって全然関係無い話してんじゃねーよ私ってな感じだよねー、ほんとさー……」

「嫌、嫌……」

恐怖で怯え始めた新島を冷たい表情で 尚且つ憎しみに満ちた表情で一瞥すると、川崎は新島が右手に持っていたコンクリート片を奪い取った。

「あつ」

川崎から出ていたプレッシャーにより恐怖を感じていた自分の手からコンクリート片を軽々と奪われたことを悟った新島は、一瞬だけ呆気にとられた表情をする。

「アツ」

再度体勢を立て直し、そして新島その表情を見た川崎は、怒りや憎しみを通り越して快感を得、喘ぎ声を漏らしながらコンクリート片を馬乗りの状態で大きく振りかぶり 新島の左胸に大きく振り下ろした。グシャア、と小さな先端が潰れる音が二人の間を伝う。新島は悲鳴をあげ、川崎は歓喜の雄叫びをあげた。

「赤ちゃんにかじりとられても大丈夫なようになってるらしいよ、ハルカちゃん。だから、大丈夫なんだなっ」

もう一度振り上げ、右胸に振り下ろす。もう一度潰れ、もう一度叫び、もう一度叫ぶ。息を吐き出しビクンと波打つ体。ビクンと震える体。その恍惚。感極まる激情。

「アハハハハハハハ！ アハハ！ アハハ！ アハハ！ アハハ！ アハハハハ！」

アハハ、と笑いながら、激痛によって動かないことを確認した川崎は、馬乗りの状態をやめて立ち上がる。その姿を見て危険を感じた新島は、体育館倉庫の床から這い出ようと思ったが、体が動かなかった。

片足で跳躍し、その勢いを保ったまま左足に振り下ろされたコンクリート片による痛みによって。

新島は。

悲鳴すら、こぼせなかった。

「アハハ！ 痛いよね、痛いでしょ！ 痛いからさーハルカちゃんさー痛いからさー、痛いからさー、痛いからさー、痛い！ から！ さあつ！ …… やつてあげるね？」

新島に尻を向ける体勢で馬乗りになった川崎は、今度は動く余地もない新島の肢体をウツトリとした表情で撫でる。晴れ上がった部分を人差し指で軽くつつき、その都度ビクビク反応するそれに満足しながら、右手に握られたコンクリート片の存在を確認した。確認し、「よしっ」と決意表明をし、「やるぞー」と意気込みを語りながら、囁いた。

「グチャグチャになるまでコンクリートで足殴る、私」

「やめ」「新島の抗議の言葉は、斉藤に届かなかった。

「アハハッ」

振り上げられ、振り下ろされた。足の脛を全力で笑いながら川崎は殴った。痛みが。足に穴が開いたとも思えるような痛みが。新島を襲う。体を衝撃で波打たせ、悲鳴と共に口から血とよだれを吐き出す。全身からは汗が流れていた。口の中の痛みも両胸の痛みも継続している。その上での鈍器による攻撃が、血塗られた新島の感覚を更に荒立てる。

「アハハッ」

二撃目は右足だった。足の付け根の部分を容赦なく殴られ、間接

が強打される感覚が新島を襲う。「うううっ！」口からもれる悲鳴はしかし、川崎の興奮を押し立てるだけのものだった。

「アハハッアハハッアハハッアハハッアハハッアハハッアハハッアハハッアハハッアハハッ」

何度も。何度も振り下ろされる、激情の一打。蓄積される痛みは新島の限界を越え、鼻水さえ頬を伝っている。目は瞳孔が開き、意識を失う可能性も充分にあった。新島の口から漏れる悲鳴を聞く度に川崎の表情は恍惚を表し、口の中からこぼこぼと大量のよだれを垂れ流しにする。その状態のまま、一切瞬きをしないで。その一時一時を逃さないように、川崎は新島に痛みを与える。

し、ぬ……。

思考の端に浮かんだ諦めの一言。その一言さえも、新島は呟くことが出来なかった。「アハハッアハハッ金髪とかッアハハッ昭博とかッアハハッアハハッ」川崎の掛け声は止まらず、そして同様にコンクリート片の動きも止まらない。二十回は右足と左足それぞれに振り下ろされた。至る所が赤く腫れ、新島細い足が醜い窪みを模っている。それでも、それでも、川崎は決して止まることはなかった。もう、死ぬ。

死ぬのは、嫌。

だけど、私は。

薄くなる意識の中。既に感じなくなった痛みを懐かしみながら、溶けていく自分の体を確認する。解けて、熔ける自分の体。鞭をうつても動く可能性がない自分の体。

ああ、私の『能力』が……もつといいものだったらよかったのに……。

天井を眺めながら、遠くなる自分を第三者視点で映し出しつつ、新島は目を閉じようとする。

閉じようとした。

川崎の声が響く中、目を閉じようとした。

だが。

その時だった。

「あ」「ハア？」

頭を針で刺したような痛みが 新島と川崎の体を通過し始めた。

「あああああああ！」

痛い痛い痛い痛い！

先刻まで川崎に浴びせられていた痛みとは違う種類の痛みが全身を駆け巡る。新島は横たわりながら。川崎は馬乗りになりながら。頭をおさえ、痛みに必死に堪えようとする。 自分に訪れる新たな『能力』の存在を徐々に理解しながら。

やがて、頭の痛みが完全になくなった時。

新島春香と川崎直美。

凌辱を受けていた者と凌辱を与えていた者は、直ぐさまその能力を操おうとした。

しかし、そこに。

「お前ら何してるんだっ！」

一人の男の声が、体育館倉庫の中を響かせた。

目を閉じたからといって、直ぐさま死ぬ訳じゃない。

「起きろよ、起きろよ三嶋あ！」

幾十もの死体が敷き詰めるグラウンドの中央で、丹羽は顔をぐしゃぐしゃにした三嶋を、膝をつきながら頭を抱えて叫んでいた。起きろ。起きろ。もう嫌だ。自分の目の前で生徒や先生が死ぬ光景を、これ以上見たくない。

「起きろ、起きろよ！」

全く反応が返ってこなくとも。自分の膝にかかる三嶋の血が止まらなくとも。丹羽昭博は、叫ぶことを止めようとしなない。

八時四十分になった。周りを気にせず、例えどんな大きな音が聞こえようと三嶋の元から離れないと決意した丹羽の目からは涙が垂れ流しになる。

大丈夫だ。だってまだ、三嶋の体は冷たくなってない。

丹羽はそう判断して三嶋に叫び続けていた。いたのだが、丹羽は知らなかった。平熱で三十六度前後ある人間の体温が、人体の機能を失ったからといってその後直ぐに下がるなど有り得ないということ。知らないから、丹羽は叫び続ける。知らないから、丹羽は叫び続けることが出来る。自身が大声を出していた丹羽はこの時、グラウンドの端の体育館倉庫で起こっていた一部始終を知ることが出来なかったことはともかくとして、丹羽はそれ以外に知ることが出来なかったことがあった。

無言で目を閉じている三嶋の体が。

今まさに死に直面している三嶋の体が。

足の先から徐々に消えていくことを。

光りになっていく。三嶋の体が。三嶋の衣服が。太陽に焼かれた吸血鬼のように、匂いがない白い煙りになりながら、徐々に徐々に消えていく。

消えていく。

三嶋が存在したという事実が　消えていく。

「三嶋！　三嶋！　みし、ま？」

緑色のスリッパごと消えていた三嶋の体がとうとう腰から上半身しかなくなつた時に、軽くなった三嶋を不審に思った丹羽はようやくその事象に気付くことが出来た。「な……お、おい！　やめる！　何だこれ！」

吠えたところでその一連の事象が止まる筈もなく、「くそっ！」と憤慨しながら煙りを片手でせき止めようにも、三嶋の煙りは自分の指と指の間を簡単に通過してしまう。何の感覚もないまま過ぎ去っていく煙りを確認した丹羽は、遂に無言になった。

丹羽はわかっていた。

「……………」だらりと両腕をおろし、呆然と煙りの先を眺める。「駄目、なのか」

また、俺の前で生徒が一人死んだのか。

無力。自分は無力なのだ。力が無く、誰も助けることが出来ない。その悲痛な現実を受け入れることがなかなか出来なかった丹羽だったのだが、消えていく三嶋の顔を見下ろす丹羽の顔には、諦めが滲み出ていた。

「もう、無理だ」

自分には何も無い。それに、もうこの学校に生きてる奴なんて居ないだろう。生きてる奴が居るのなら、自分の大声に対して何かしらのリアクションをするに決まっている。

だから、もう居ない。

生きてる人間は、自分しか居ない。

「……………」三嶋

そして、三嶋の体が全て煙りと化した。髪の毛の先まで残らず、そこに三嶋が居たという感覚をねこそぎ奪われる感覚に丹羽は襲われる。先刻まで自分の膝の上にあった重みと体温は、消え去ってしまった。ゆっくりと丹羽は服の袖で涙と鼻水を拭き取り、青空を見上げる。何が起きているのか未だに理解することは出来ないが、せめて三嶋の逝く先を見送ってやろう、と。そういう気持ちで、重い頭を上あげた。

それだけの気持ちだった。

しかし、丹羽はそこで気付いた。

「は？」先程まで三嶋だったその白い煙りが、青空の下 自分の斜め上の空中で、集束している光景に。

「え、な、は？」

戸惑うのも無理はない。だが丹羽は気付くべきだったのだ。他の者と違い、三嶋は『能力』を持つ者だった。そして、丹羽はその『能力』を持つ者の死を初めて確認した者なのだから。

新聞部。

壊れているその男子生徒が。

『能力』を持つ者の死体を次の展開に利用しない訳がない。

事実、その煙りは嵐が起きたかのように空中で乱回転し、また、空気を吸い取ったかのように体積を倍増させていく。目で見える白い風の竜巻は、丹羽の心を更に理解不能にさせていく。

「うおっ」風が吹き荒れ、丹羽は頭を両手で覆ってガードしなければならぬ程目の前を刺激された。鼓膜が大きな音で震わされる。

「……何が起こってるんだ！」

丹羽がそう言うとはほぼ同時に、風が止み、音が止み、視界が晴れた。ゆっくりと両腕を頭から離し、立ち上がって空中を見上げる。

そこには、五つの小さな光りが浮かんでいた。

「何だこれ」

惚けた声を丹羽は思わず出しながらも、元は三嶋だったその白い小さな光り達を呆然と眺める。

すると、丹羽に見られることが合図だったかのように、突如光りの群が空中で動き始めた。光りは一個 二個 二個の三つに別れ、それぞれ別の方向に向かって行く。

「は、はあ！ 待てよ、待ってくれよ、三嶋！」

三嶋が動かなくなった。

動かなくなつた三嶋が死んだ。

この連鎖だけが丹羽に訪れていたら、丹羽はここまでうるたえることはなかった。けれども、その連鎖の後に不可思議な現象が連なつて起こつたのだ。

死んだ三嶋が煙りになり。

煙りが集まって光りになり。

その光りがグラウンドを離れようとしている。

焦りながらも、丹羽はなんとか光りの行く先を確認することが出来た。

一つは自分の後ろの校舎の屋上に向かい、二つは校舎一階に向かい、二つは体育館倉庫へと向かう。

どこだ。どこに行けばいい。

丹羽はこの時確信していた。

大量の死体が学校に存在するという異常な空間の中、しかしながら、誰かが必ず生きているということ。

「三嶋、の光りが向かった先に行けば、誰かが必ず居るんだろ！」
断定に近い確信を自身に与え、今まで力が入らなかった丹羽の体が動き出す。

そうだよ。今思えば、明らかに人為的な状況だろ、これってならば。そうならば。この状況が人為的に行われたものならば。

犯人が、この空間にいる筈だ。

犯人でもいい。犯人でもいいから、生きてる奴に会いたい。丹羽は本気でそう思っていた。常人ならば精神が崩壊してもおかしくないこの状況で、丹羽は自分にそう言い聞かせていたのだ。

「校舎は駄目だ。絶望したあいつらの顔なんて、もう見たくない。だったら体育館倉庫か……ていうか体育館倉庫、全く気にしてなかったな……」

そう言う丹羽の表情は、何の感情も示していなかった。その無表情のまま、丹羽はグラウンドの端にある体育館倉庫に向けて走り出す。敷き詰められた死体を上手く避けながら、自分の好きな歌を歌いながら、体育館倉庫へと向かう。

その途中に、丹羽は聞いた。

少女の興奮している喘ぎ声と　少女の絶望している悲鳴の声を。

「直美と春香なのか、おい！」

一瞬にして声を聞き分けて悟り、丹羽は全速力で駆ける。何が起こっているかわからない体育館倉庫に向けて、丹羽は大急ぎで向かった。グラウンドにある死体と死体の間を縫いながら、二つの声の元へと急ぐ。

体育館倉庫の前に着くと、声が直に丹羽の体を突き刺した。川崎が快感を覚えながら新島を凌辱している光景が、容易に想像出来る筈だった。

だが、しかし。

先刻まで聞こえていた二つの声が、聞こえない。静寂が体育館倉庫を包んでいる。

まさか、この中には誰も居ないんじゃない……。

信じたくないその想像を振り払いながら、入口が少し開いていた体育館倉庫の扉を、思いつ切り開けた。

「お前ら何してるんだっ！」

そこには。

突然の来訪者に驚いている、二人の少女の姿があった。

川崎直美と、新島春香。

元々体育館倉庫の入口の方を向いていた川崎の顔を確認することは出来た。「あ、昭博じゃん」と血のついた顔で笑いながら川崎の姿に若干のおののきを感じながらも、丹羽はもう一人の少女

新島の姿を確認しようとする。

新島は。

川崎の下に、居た。

「春香っ！」

無意識だった。無意識のまま、無惨な姿になっている新島の意識を自分に向けようと、彼女の名前を叫ぶ。新島の両足はほぼ紫色に腫れあがり、川崎の向こうに見える新島の口の中が荒れに荒れて、血の掃きだめと化している。その中は、もう見れたものじゃなかった。

「あき、ひろ？」川崎の背中越しに自分が助けを求めた人物の存在を確認する新島。「昭博だ。昭博が、助けに来てくれた」

淡々と、淡泊に事実だけをつらつらと言つことしかできない新島の声に哀しみを感じながら、丹羽は川崎へと視線を向ける。当の本人は、「ちよつとちよつと昭博ー、怖い顔で私を見ないでよー」と笑いながら丹羽の顔を見つめている。

「直美。お前、何してるんだよ」

「何？ 何ってどつちのこと？」

「どっちって何がだ」

「冷静だね、昭博は。だからさ、昭博はどっちを怒りたいのー？ハルカちゃんと遊んでることか、今からハルカちゃんを殺そうとしていることかっ」

アハハ、と高らかに笑いながら、川崎はゆっくりと立ち上がる。右手に握る血だらけのコンクリート片をうつとりとした表情で舐めながら。「あーゾクゾクするー」と全身を歓喜で震わせながら。

「お前……」

丹羽はその後の言葉を紡ぐことが出来なかった。やっと生きている人間に会うことが出来たのに、蓋を開けてみれば二人共壊れていて。そんな事実を突き付けられながら、冷静に務めることが出来る訳がない。

しかも。

「ねえ、昭博。昭博はさ、どっちを助けたいの？私かハルカちゃん、どっちを助けたいの？」

アハハハと笑いながら、川崎は丹羽に向けて選択肢を与えようとする。その選択肢はとてつもなく非情であり、その選択肢を体育館倉庫の中で言うということは則ち、丹羽だけでなく新島にも聞こえるということになるのだった。

その状況を理解しながら。川崎は、一教師である丹羽に、抱き着いた。

教師と生徒。いけない関係。危ない関係。露見したらその時点で終わる、そんな関係。

そんな関係に、丹羽は何人もの教え子となっていた。丹羽はその関係をつくることで幸福を感じ、その為に教師になったと言い切っても過言ではなかったのだ。

川崎による新島へのイジメは、最近始まった。

最初は上履きを隠される程度のもだったが、徐々にイジメはエスカレートしていき、体育館倉庫に閉じ込められるまでに至った。何故、イジメが始まったのか。

本当に、新島の金髪が原因なのか。
それは、違う。

川崎は。

「私とハルカちゃん。昭博は、どっちをより愛してるの？」

丹羽と付き合っていた女子生徒の中の一人だった。

「何言ってるんだお前！」

霧島が盾を発動してから数秒が経ち、自動的に消滅した事実を横目で確認しつつ、霧島と斉藤は新聞部への攻撃を開始する。最初に新聞部に殴り掛かることに成功したのは斉藤だった。元々そこまで距離が離れていなかったことが幸をせいしたといっているもいいのかもれない。

「やめろって近づくなって逃げろって！」だが、ここで霧島が斉藤に向けて大声を出して忠告した。

対して、斉藤は大声でこう言った。「何してんだよ、新聞部！」

その光景を見て新聞部は、斉藤さんは僕の『能力』のことをよくわかってないみたいだねまあそりゃそうか当然か、と軽く思いつつ、怒りをあらわにして自分に殴り掛かる斉藤に向けて　光りが灯る右の掌を静かに差し出した。

しかし、斉藤は止まらない。新聞部の手の平が光っていようとなんだろうとそんなのお構いなしだともいいたげな勢いで、躊躇なく殴ろうとする。それは奇しくも、先刻の霧島と同様に返り討ちをされるかもしれない状況に陥っていることと同じだった。

「くっ！」

忠告しても止まらない斉藤を見た霧島は、瞬時に盾をもう一度斉藤と新聞部の間に発動する。勢いを止めない斉藤の拳は盾に激突し、激しい痛みが斉藤の体を蹂躪する。

「痛いって！　何してんだあんだ！　てか何だこれ！」

「それは俺の台詞だつての！」

とにかく新聞部から離れる、と叫びながら霧島はその新聞部の元へと走った。それを見ながら、結局はさっきまでと同じ行動に移した霧島に対してため息をつきつつ、右だけでなく両の手の平を光らせ、何十発もの弾を乱射させる。音を、煙りを、衝撃をあげさせるその弾丸の群はしかし、新聞部の予想通り霧島が発動した校舎一階いっばいの大きさの盾によって遮られる。

その光景を見て「ななななな！ 何だよこれ！」と驚きを隠さない斉藤を無視しながら、「おいおい霧島君」と新聞部は語り始める。

「君さ。本当にそれが全力なのかい。さっきまでは楽しかったのに、こんな単調な展開が続いたところで何にも楽しくないんだよ、僕はさー。ほら、なんかやってみなよ。早くしないと、僕はもう次のやりたいことをさせてもらうけどいいかな？」

「駄目だな」

「え？」

新聞部はその声を聞いて、初めて本気で驚愕した。霧島が使う『盾』の能力はいかなる攻撃からも防御出来る力を持っている。しかしそれは防御しか出来ないと言っても同様で、つまり新聞部が発動したような『見えない壁』が持つ防音機能は『盾』にはなかった。ということとは、霧島がどこにしようともどこから発言しようとも、霧島の声は自分の耳に届くということになる。だがしかし、霧島と自分の間には盾が発動されていた。これによって盾の向こうにいる霧島の声はそれ相応に遠くから聞こえる筈であり、従って 今のように自分の真横から霧島が自分に向かって喋りかける状況など全く想像していなかった。

「単調な展開なんかじゃ物足りないんだろ」霧島は笑いながら拳をかかげ、新聞部に向けて大きく振りかぶった。「だったら即効で終了させてやるよ」

「くっ」

ここにきて本気で焦りを感じた新聞部は、霧島の攻撃を避けよう

と一歩後ろに下がる。大振りで繰り出された霧島の暴力は空をかき、新聞部には当たらない。しかしここで終わらずに、霧島は小刻みなステップを前方に踏み、新聞部を追い詰めようとする。

新聞部の額からは、冷や汗が少しだけ流れていた。

あー、駄目だ。ちよつと時間がかかるね、これは。

新聞部の弾丸の能力にしても谷山のレーザーの能力にしても、準備期間が必要だった。現に狩谷はその少しのタイムラグを利用し谷山を追い詰めようとして、そしてそれは途中までは確かに成功していたのだ。

対して霧島と狩谷の能力にはタイムラグが存在しない。霧島の盾は発動しようと思えば両の手の平をかかげるだけでいいだけで、狩谷の能力に至っては使いたいと思うだけで能力を発動出来る。

これらの二種類の能力の違いが起こる理由は恐らく新聞部しかこの場にいる者の中ではわからない。けれども当然の本人は、その二種類の能力の違いをわかっている上で、霧島の迎撃をなんとかして避けながら準備していた。

霧島に向けて大量乱射する機会を。

前方には霧島が居る。自分の能力はもう少しで発動可能になる。例え霧島に全力で殴られて廊下の壁に激突したとしても、すかさず能力を発動し、それを霧島に向ければいい。

どうやって自分が発動した盾を通り抜けたかはわからないけど、でもね霧島君、所詮それは付け焼き刃なんだよ、付け焼き刃。

表面上では「くっ」と焦りつつも、内心では霧島の攻撃を待ち構える。拳が直撃したら直撃したでそれまでで、拳をよけることが出来てもそれまでだ。いずれにせよ霧島は、新聞部の近距離という最悪な位置に来てしまった時点で、既に詰まっていたのだった。

手持ちに『盾』と『攻撃』しかない状態だったなら。

「っつおらあー！」

「ぐあっ」

だが、もしこの手持ちに『予測不可能なジョーカー』が存在するのなら、霧島本人すら気付いていないこの窮地から逸脱することが可能になる。

斉藤伊里。

能力も何も持っていない少女。霧島と新聞部の『能力』の応酬に驚愕していた少女。その少女、斉藤伊里は訳のわからない状況を頭で整理せず、何がなんでも新聞部に一発打ち噛ますというその一心のみで行動することを選び、結果 盾が自動的に解除されるがすぐに、目の前にいた新聞部の後頭部に左足で回し蹴りを繰り出した。
「な、な、な、な」

突然の強烈な痛みを頭を抱えてその場所にうずくまる新聞部。あまりの予想外な展開に霧島は思わず左を向き、「よし！」と意気込んでいる斉藤を唾然とした表情で見つめた。

「お前、マジかよ……」

「マジかよって何がだよ」

「全部だって。まさかあんなどぎつい回し蹴りを新聞部に繰り出すなんて、お前ホントに女か？」

「失礼過ぎるつての。私は女だし、じゃああなたはホントに男か？ つて話しに繋がるつて。いたいけな女子より出遅れるとか……有り得ねー」

「俺の知ってるいたいけな女子は回し蹴りを使わねーつての」

まあいいや、んじゃちょっと気を失つてもらっせ、新聞部

と霧島は言い、痛みによつてうずくまる新聞部にもう一撃くわえようとする。

しかし、ここで霧島は気付いた。

新聞部の両手に、光りが燈っていることを。

「……っけんなよ」低い声。地べたに膝を折って座りながら、手の平を右左それぞれ霧島と斉藤に向ける。表情を一変させて、「お前から今僕に何したおいこらあっ！」

手の平を象っていた光りが増幅し、二人の目の前で弾ける。とめどない射撃が何発も何発も繰り出され、その度に何かに着弾する音が廊下を響かせる。二つの大砲がそれぞれ連射されると言い表しても過言ではないその『能力』は、大きな音を起して前方にいる二人を行動不可能にしようと試みる。

やがて手の平の光りが完全に吐き出され、攻撃の音が止んだ。新聞部の目の前には煙りがあがり、それが新聞部に不快感を積もらせる。「チツ。チツチツチツチツ！」

煙りが晴れ、新聞部の視界が良好になる。本来ならば、穴だらけの二人の死体かもしくはカケラしか残されていない二人の痕跡が新聞部の眼前には広がる筈だった。

「畜生が」しかし、煙りが晴れた先には。「逃げられたってことか、これは」

二つの青い壁が、新聞部の前方と斜め右の方向に発動されていた。青色の先には、何者も存在していなかった。

「あー、あーあーあー……」

天井を仰ぎながら、口を開けて呻き声を漏らす新聞部。怒りが自分を支配していた感覚が、そうすることによってゆっくりと消えていくように思われた。先刻までの眉間に皺がよった状態から一変し、新聞部はニヤニヤと笑い出す。ニヤニヤと、ニヤニヤと。その笑顔の先には、自分を妨害した一人の少女の存在を消すことが待ち受けていた。

「斉藤伊里。斉藤さんか。霧島君はこの際だしもうどうでもいいや。あー、そういえば斉藤さんって確か今日の朝生徒会に参加してなかったよね？ うんうん、そうだったそうだった。斉藤さんは遅刻しただってことだよな、つまりはさ」

じゃあさ、いいよね、もう。

僕が制裁の為に君を殺したとしても君は文句を言える立場じゃないってことだもんね。

依然、笑いながら後頭部を片手で軽くさする新聞部。それにより

再び痛みが生まれ、新聞部の怒りを少量だけ復活させる。
「じゃあ、リアルかくれんぼを始めようか」

目を閉じたからといってすぐに死ぬ訳ではないことと同様に。目の前が真っ白に染まったからといって、すぐに死ぬ訳ではない。

「……あれ」

狩谷は白く染まった自分の視界の状態を確認しつつも、疑惑を覚えなかった。

何で、僕はまだ死んでないの？

狩谷がいくら走馬灯の中にいたといっても、谷山の能力が発動されてから既に数秒は経過していた。それならば、もう既に谷山の能力による攻撃が狩谷に当たり、即死はないとしても致命傷に至る一撃を現段階で浴びている筈なのだ。

それなのに、狩谷はまだ、何の攻撃も受けていない。

「え？」それだけならまだしも、狩谷は それを見た。「どういうこと？」

狩谷の目の前の白色が完全に無くなり、右の掌を自分に向ける眼光がないに等しい谷山のその姿を、狩谷は見たのだ。

どういうことなの？

口には出さずに、狩谷は疑問の渦を頭の中で展開させる。本来ならば自分に当たっていた谷山の攻撃が、何らかの原因により自分には当たらずに消え去ったのだ。いや、消え去ったという言い方はおかしいのかもしれない。狩谷は頭の中で自分に訪れた僥倖ともいえる異常事態を冷静に整理する。

そして、狩谷は悟った。

谷山さんの攻撃は途中で消えた訳じゃない。ちゃんと発動してちゃんと僕を狙って、ちゃんと僕に当たる予定だったんだ。

『能力、施行』

そうこうしている間に三秒が経った合図が狩谷の元に訪れた。先

刻の冷静な表情とは一変、少し不安な表情のまま素早く立ち上がり、谷山を見ながらレーザーを避けようとする。

「……何なの、これ」

だが、しかし。

狩谷を襲うレーザーは、またもや狩谷の近くに到達する前に止まっていた。進行が止まり、レーザーが円形に広がる。

狩谷は思い出していた。今さっきも自分を攻撃し、結果自分に当たらなかった谷山の攻撃を。

それは。

あのレーザーは。

自分を守るようにして、途中から進行が止められていた。

例えば、霧島の『盾』の能力だ。あの能力をもし使い、そして谷山の攻撃から自身を防御した場合、レーザーは途中でせき止められるだろう。レーザーの進行が途中で止まり、直進する予定だったレーザーが拡散し、結果自身には当たらない。

自身の視界を、レーザーの色だけで染めながら。

「……………」

けれども狩谷はわからなかった。自分の想像上にはない『何か』により谷山の攻撃は回避出来たのだが、その『何か』の存在がわからない。自分を守ってくれたその『何か』。狩谷は可能性をいくつか挙げ、それら一つ一つを検証しようとしたが、まずその可能性自体を上げることが出来なかった。

可能性。

自分を守ってくれる、可能性。

「なにやってんのよ、あんたはさ」

そうして。

その可能性は。狩谷が想像も出来なかったその可能性は、突如自分と谷山の間に見れた。いつもの様に不敵な笑みで、いつもの様に自分を罵りながら。

「……………何で」彼女の姿を見て、狩谷は口から疑問を漏らす。「何で、

ここに……いや、そもそもどうやって谷山さんのレーザーを……」
「はあー」

目の前に広がる光景が信じられないとでもいいかげんな狩谷の表情を見て、大袈裟にため息をつく彼女。「全く。今はそんなことどうでもいいでしょうが。これだからミサオはって感じよホント。いいから黙って あんたは私に守られてなさいな」

言いながら彼女は後ろを振り向き、右の掌に光りを集束させ切った谷山の姿を確認する。狩谷が「あ、危ないって！」と言い、谷山がレーザーを射出させた時とほぼ同時に 彼女の姿が消え去った。「へ？」

惚けた声を出した狩谷だったが、啞然とし、その声が沈黙に変わるのはこのすぐ後だった。自身と谷山の中央に居た彼女。そのままの位置だと谷山のレーザーが直撃する彼女。自分を守るといい、何らかの方法により姿を消した彼女。

そんな彼女が居た位置を境目に、レーザーがまたもせき止められた。

「……そういうことか」

非日常をとことん嫌いなながらも非日常の扱いに長ける少年は、自分の目の前に起こった出来事の一部始終を思考し、納得する。

狩谷は理解した。彼女が自分と同じ『非日常』を持っており、その『非日常』は自分のものとは違い、少し複雑なものであるということ。狩谷は理解し、「どんなもんよ……って痛い痛い痛い痛いなにこれなにこれ痛っ！」と呻き出した彼女に呆れながらも、彼女に感謝する。

狩谷は見ていた。

彼女の頭の中に、小さな光りがふわふわと浮遊しながら入っていたのを。そして、今彼女に訪れている痛みは先程の自分のそれと同様で、彼女にも二つ目の能力が発現することを狩谷は同時に悟った。

そろそろ三秒が経つ。谷山の攻撃開始の合図が聞こえる前になん

とかしてこの場を一旦離れたい狩谷は、彼女の名前を大声で叫びながら走り寄り、うずくまって頭にまわされていた両手を右手で触りながら、能力を発動した。

瞬間移動の能力を。

高柳美香と、自分に使った。

「はあ、はあ、痛っ、何よこれ。ねえミサオ、あんたもこんな痛い
の来たの？ ヤバくない？ 最初の方も痛かったけど、これは流石
に痛すぎるっつい」

「何でここに居るんだよミカ！」

二回目になるその痛みを経験した狩谷は、それと同時に自分が使える能力が増えたことを理解していた。瞬間移動の能力。対象は自分と、自分が着ている衣服、そして手で触れている他人と他人が着ている衣服一人分。自分が実際にかもしくは写真か何かで見たことがある場所にしか瞬間移動出来ないが、しかしその制約を守っているならば瞬間移動出来る距離に制限がない。

そんな能力が、先刻、狩谷と 恐らくだが高柳のものになった。その能力を使い、狩谷はうずくまる高柳を自分達が座るこの場所に音もたてずに移動してみせたのだ。

この場所。

狩谷と高柳が座る場所。

屋上へと繋がる扉がすぐ近くにある、四階と屋上の間の階段の一段に。

狩谷の大声に「あー、うっさいってミサオ。てかここどこよ」と呆れたように右手を振ってあしらおうとする高柳。その対応を見た狩谷は一層隣で座る高柳に対して大声を張り上げた。

「大体何でミカが屋上に居るのさ！」

「私の質問は完全無視かい。良い身分になったわねーミサオー」

「……いいから答えてっつて」

「何よもう。うーんと……。あ。そっか、保健室行くなって言ってたんだっけ私。いやーこれがさー、保健室に誰も居なくてさー。浜松

先生くらい居るかなとか思ってたんだけど、まさかの先生会議よ先生会議。誰も居ない保健室で寝てたらまた後で浜松先生に怒られちゃうからさー。で、じゃあ私はどこで寝ようと思ってるからさー…」

「保健室で寝れなかったんだつたらとつとと教室戻って来ようよ！」「な、なによミサオのくせに。教室う？はんつ、あんな場所じゃ寝れないし」

「霧島君を少しでもいいから見習ってよ頼むから！」

「霧島あ？ あんな奴、ポイよポイ。ほうれん草食べて筋肉ムキムキになつてればいいんだつてあんな筋肉質男は」

「何でそこで超細身のお姉さん好きを霧島君に見立てたのさ！」

「ちよつと……うるさいつてミサオ。どうしたの？ 発情期？」

「発情期つてどんな時期！」

依然食い下がる狩谷に対し、ああもういいつてうるさいつてもう黙つてよミサオと再度あしらいながら、「…ふう。でね」と屋上で寝ていた理由を喋ろうとする。

「考え始めて、コンマ一秒で気付いたわ。『そうだ、屋上へ行こうつてね』」

「その不愉快なフレーズは一体全体何なの！」

「だからうるさいつて。はい、もううるさい。今から五分あげるわ。その間に一言でも喋つたら私の言うこと何でも聞きなさいよ」

「何でもつてどういふ」

「はいブブー。残念でしたー罰ゲームでーすミサオ君ー」

そう言いながら楽しそうに笑顔になる高柳を見ながら、狩谷はふと一つの疑念に駆られる。一瞬ピタリと動きを止めたが、すぐに狩谷はその疑念を推考し始めた。

何でミカは、こんなに楽しそうに笑っていられるんだ？

ここは四階と屋上を繋ぐ階段。少し階段をあがると谷山の能力により出来た穴だらけの扉と隣接するコンクリートの壁が見える。グラウンドには死体が並び、校舎の中も似たような状況がこうして高

柳と会話をしている今もなお、存在している。

それなのに。

高柳美香は、笑っているのだ。

狩谷は思う。ミカは自分のような心は持っていない。そしてそれならば、ミカが笑っている理由は一つしかない。

「何がいいかなー罰ゲーム。あ、大丈夫よミサオ。そんなに非人道的な展開はないからね。うーん、そうだなー何でもかー。何でも……何でも……だ、駄目よミサオ！ 何でもは駄目！」

「……一人芝居してる最中に悪いんだけどさ、ミカ」

「ひ、一人芝居って何よ一人芝居って！ 私の貞操の危機がこの罰ゲームにはかかってるの！ だから真剣に考えなきゃ駄目なのよ！」
「僕の罰ゲームなのに何でミカの貞操が危機に？ ……まあいいからさ」

「何がいいのよ！」

「ちょ、うるさいってミカ」

「立場がいつの間にか逆転してるんだけど！ これなに！ 私何か悪いことした！」

「とりあえずさ、これだけは聞かせて」

言いながら、何なのよもうとギャーギャー騒ぐ高柳の両肩に自分の両手をそれぞれ置く狩谷。いきなりの狩谷の動作に、「な、何よ……」と顔を赤くしていく高柳を見ながら、狩谷は聞いた。

「ミカが持つてる能力って何？」

狩谷の両手の体温を感じながら聞いたその質問に、「……何よ、そんなことが聞きたいのねあんた」と少し憤慨に思いつつも、高柳は答える。

「屋上に着いた時にね、何だかわかんないけど頭が痛くなったのよ。で、痛くないと思ったら、私の頭の中には 能力とその能力の使い方があったの」

笑顔で。

高柳は、いやーこれがさーと嬉しそうにしながら、自分のものに

なつた能力名と、重大な事実を狩谷に言う。

「『ミエナイチカラ』なんだってさ、私の能力。夢みたいじゃない、こんなの使えるなんて。ミナセちゃんもあんたも、能力使えるんでしょ？」
イヒヒ、面白いねー私の夢の中」

その言葉を聞いて、狩谷は心の底から啞然とした。

高柳は。自分の目の前で屈託なく笑う可愛い少女は、今日の前で起こっている事象を夢として片付けている。

当然といえば、当然なのだ。訳のわからない能力が自分のものになるなどとうそんな不可思議な現実を、おいそれと受け入れられる筈がない。しかも、更にいえば、高柳は重要なことを知らない可能性もあるのだ。

もし、狩谷の予想通りに、高柳が『それ』を知らなかった場合、とてつもないことになるのは容易に想像がついた。

「ミカ」より一層真剣な表情になる狩谷。

「なに、ミサオ」目の前の狩谷を少しだけ不審に思いながら、答える高柳。

そして。

狩谷は、高柳が『それ』を知っているのか、それとも知らないのかを判断する為の言葉を発した。

「授業がそろそろ始まるんだけど、教室に戻るつもりはないの？」

その言葉に、高柳は「はあ？」と不快感をあらわにして応えた。

「だから言ったでしょ、私は寝るの。授業なんか受けないっての」

「……そっか」高柳の反応を見た狩谷は、悟った。「ミカは、知らないんだ」

ミカは、知らないんだ。

今この学校で、何が起こっているかを知らないんだ。

ミエナイチカラ。

高柳から聞いた、高柳の能力。谷山との一戦により見ることが出来た高柳の能力を、狩谷はほぼ全て理解することが出来た。

ミエナイチカラとはつまり、使う能力者の存在をその場から消す

能力なのだ。

だからミカは谷山さんのレーザーの音にも気付かず寝ていたんだし、レーザーから僕を守ることも出来たんだ。

言い換えてしまえば、ミエナイチカラという高柳の能力はこの一言に落ち着く。

無敵。

誰も触れられず、誰も干渉出来ないのに、自分からは一方的に干渉出来る。そんな能力。

そんな能力を、高柳は持っていた。狩谷はそして、確信する。ミカは能力が発現してからずっとミエナイチカラを使っていたということ。ミカはこの学校の現状を、全く知らないのだということ。高柳美香が。

阿鼻叫喚がない現実に対してすら、逃避しているということ。

駄目だ。

狩谷は確信する。

高柳に、今現在学校で起こっている事実を、知らせてはいけないということ。

「なによミサオ。夢の中でくらい私の好きなようにさせろっての」
自分の目線と同じ位置で自分を見ながらそう怒る高柳に対し、狩谷は自分の能力を使おうと、一瞬だけ思った。そうすれば高柳が今どんな思っているのか理解出来るし、その思いを出来るだけ理解した上で高柳を助けたいと考えたから。

だが。

狩谷は、寸手のところで踏み留まった。

誰だって。勿論、ミカだって。

勝手に心を覗かれたくない筈だから。

「……駄目だよ、ミカ」

「ん？ そうよ、授業に参加するなんて駄目なの。今すぐ私は寝たいのよ、ミサオ。あ、じゃあさ、夢の中なんだし、ミサオも一緒に寝ようよ。寝ようよ……寝る……一緒に……屋上で……だ、ダメえ

！ ミサオ、それはダメよ夢の中でも！」

未だによくわからない発現を繰り返す高柳を少々鬱陶しく思いつつ、狩谷は「ふう」と気持ちを落ち着かせる為一度ため息をつくとき、高柳の両肩に置いていた両手に力を込めた。

今度は、僕が守る。

その意志を、両手に込めて。

「あ……あなた、ホントのホントにどうしちゃったのよ」

「大丈夫」

高柳の言葉を半ば無視しながら、狩谷は言う。「大丈夫だから、

ミカ」

「……何がよ」

「いいから。大丈夫だから」

「だから、何がって言って……」

「さつきはありがとう。今度は、僕がミカを守るから」

真剣な表情のまま言った狩谷のその言葉に、「な、な、な、生意気、言ってるんじゃないわよ、ミサオのくせに」と顔をより一層赤くしながら俯く高柳。それを見て「迷惑だったらゴメン。でも、僕は頑張るよ」と言葉を紡ぐ狩谷。

突如、高柳はガバツと勢いよく顔をあげる。

「生意気よ、いっつもなよなよしてる草食系男子大統領のミサオのくせに！」

大統領ってどんなだよ僕は、とぼやきつつ、高柳の次の言葉を狩谷は待った。

涙を流していたから。

高柳が、涙を流していたから。

夢？

狩谷の命を狙う谷山の目が、生気を宿していなかったのに？

今現在の学校の状況を、わかっていない？

谷山の攻撃から狩谷を守った時、グラウンドを間違はなく見た筈なのに？

狩谷は心の声を聞く能力を使わなかった。けれども、狩谷は高柳の真意を少しだけ知ることが出来た。

能力なんて使わなくとも、人は、人を理解出来るのだ。

「私は、泣いてない！」

「うん。ミカは泣いてない」

「私は、負けてない！」

「うん。ミカは負けてない」

「私は……大丈夫なの！」

「うん。ミカは大丈夫。だって僕が守るから」

「んぐ。……私一人でも、大丈夫なの！」

「うん。ミカは僕なんかより凄いや。だから大丈夫。でも、もしミカが大丈夫じゃなくなった時、その時には僕が守るから」

「……生意気」

「へ？」

「生意気よ、ミサオのくせに！」

その言葉を皮切りに、高柳は嗚咽を漏らし始めた。嗚咽を漏らし、狩谷の頼りない体に顔を沈める。制服に涙がつくが、狩谷は気にせず高柳の存在を感じていた。

どうなるかわからない。

この先、どうなるかわからない。

だけど、ミカだけは。ミカだけは、絶対に守り通す。

非日常を排斥することしか考えていなかった少年は、日常を守ることも考え始めた。果たしてそれは正しいのか。果たしてそれは間違っているのか。高柳が泣き、狩谷がそれを受け止める今の段階ではわからない。

だが。

高柳が泣くのを止め、「じゃあ、屋上行こ。ミナセちゃんを止めようよ」と言い。

狩谷が「うん。わかった。でもちよつと待って。僕の能力をとりあえず使って確認してみる」と言い、能力を発動させ。

『能力、施行、能力、施行、思考、思考が思考が出来ない何なの何なの何なんてなななな何で何で何で何で、何、でっ!』

谷山の心情が揺れていることに気が付いた狩谷は、不安を感じずにはいられなかった。

『何でウキウキの能力を、狩谷操が使ってるの!』「話しが違っじやないのよ、新聞部!」

その心情と言葉は、確かに屋上から発せられたものだった。

「ふう。間一髪だったな、斉藤さんよお」

「全くだよ、本当に。いきなり痛い痛い叫び出したかと思ったら、なんかわかんないままワープするんだもんさ。ねえ。気にはなってたんだけど、なんなの能力って」

「新聞部が言うには、あいつが考えたんだってよ」

「考えたって何が」

「能力」

「マジ?」

「マジだってマジ。どうしたんだろなあいつ。はー、それにしても頭イテー」

霧島巧と高柳美香。そぶりや背恰好までもが似た二人は今、男子トイレの中に居た。

新聞部が『弾』を乱射している最中に霧島の元へ訪れた二度目の痛み。盾を発動していたからよかったもの、ほんの数秒痛みが来るタイミングが早かった場合、霧島と斉藤は新聞部の攻撃によって死んでいた可能性が高いのだ。

そうでなくとも、取り乱した新聞部を目の前にすることは危ないことこの上ない。それを瞬時に理解した霧島は、痛みが続く頭を酷使し、無理矢理瞬間移動の能力を使ってみせたのだ。

オーバーワーク。

狩谷でも無理だったのにも関わらず、霧島は驚異的な精神力にものをいわせ、使ったのだった。それによりランダムに移動した先に二人がたどり着いたのは校舎のどこかの階の男子トイレの中。

二人は今、新聞部に見つからないように洋式便器が佇む個室の中、鍵をかけている。

そして現在、霧島の意識は朦朧としていた。

「あー、頭イテー。一週間連続で徹夜した時よりも頭イテーよ」

「一週間連続ってあんたねえ」呆れながらも、ふと霧島を見た斉藤は気付く。「……ちよつとあんた！ 鼻とか口から血が、み、みみ、耳血はヤバイって耳血は！」

新聞部が自分達を捜しているかもしれない中、大声を出してあたふたとろたえる斉藤だったのだが、仕方がなかった。

鼻。口。そして、耳。

霧島の顔の至る所から、血がトロトロと流れ出ていたのだから。

こ、こいつ、もしかしたら無茶苦茶無理したんじゃないの！ 右ポケットの中にあつたティッシュを全て取り出し、「ほら！ 全部使つていいから！」と言いながら霧島の顔にティッシュを当てる。しかしすぐにそのティッシュは赤く染まり、左ポケットにあつたもう一つのティッシュを使うしかならなくなった。

無理があつたのだ。

自分を襲う痛み到我慢しながら、まだ中途半端にしか自分のものになっていない能力を使うなど、無理だったのだ。

しかし、霧島は使った。使ってしまった。霧島自身を守る為。

そして。

私を守る為ってか！

畜生！

心の中で、何も出来ない無力な自分に対して憤慨する。今まで自分がしたことはなんだ。

川崎から三嶋を守れなかった。

狂った新聞部を元に戻せずに、ただ蹴り飛ばすことしか出来なか

った。

自分の目の前で虚ろな表情のままの霧島に、何の気休めも出来ずにただ迷惑をかけるしかない。

そんな自分に。

「腹が立つ！」

斉藤の大声に「い、一回落ち着くことを覚えようぜ。ほら、あれだ、新聞部がいつ来てもおかしくないしょ」と朦朧とする意識の中、反応する。その言葉に斉藤は「ご、ごめん」と言いながらも、「腹が立つ腹が立つ腹が立つ……」とぶつぶつ呟き、近くにあったトイレトペーパーで霧島の顔を、目に見える状態に、まるで包帯で巻くかのような勢いでぐるぐると何回も巻いていった。

頭に浮かぶのは、自分の家族の笑顔。姉ちゃんと自分を慕う弟達や妹達。伊里ちゃんと自分を呼んでくれていたのに、今はいない両親。

家族の姿が、何も出来ない無力な自分の怒りに拍車をかける。

そうだよな。

私は、こんなところで終わっちゃ駄目だよな。

「よし」

小さく、一言。せめて霧島をこれ以上不安にさせてはいけないと、無理矢理笑顔をつくる斉藤。「さあて、霧島。意識がヤバイ中ごめんだけど、もうすぐだ。新聞部を元に戻して、あんたを病院に連れて行って、学校の奴らも皆病院に連れて行って。んでもって、今度はお互い余裕がある時にまた喋ろうとしようよ」

大丈夫だ。大丈夫。

自分には何もないが、霧島には『盾』の能力と『瞬間移動』の能力がある。

気を失いかねない霧島の手綱を取って、サポートするくらい私にだって出来るっての。

現段階において希少価値すらあるかもしれないその能力を持たない少女は、能力を持つ少年の前で笑顔を保つ。泣き叫んでやりたい。

皆が皆、訳のわからない攻撃で死んでいった。信じたくない。泣いて、叫んで、喚いてしまいたい。

けれども、それをやってしまったら、霧島に迷惑がかかる。自分を守ってくれた霧島に対して迷惑がかかってしまう。

だから、斉藤は。

瞼にたまる涙を服の袖で盛大に拭いながら、笑ってみせた。「頑張ろうぜ、霧島」

それを見て、霧島も笑う。「おうよ、斉藤さん」

繕った形だけの笑顔。意味も何もない、ただ単純に気丈なふるまいをする為だけの笑顔。

「「だけだよ、これだけは言わせてくれ」」

その笑顔を互に見合わせながら、二人が二人、互いに同じ言葉を言った。

「俺のことは」「私のことは」

「名前前で呼んでくれ」

斉藤と霧島が一瞬止まり、そして大声で笑いだす。その笑い声は間違いなく日常の中のもので、彼と彼女はその笑い声を必ずもう一度あげようと決断し合った。

その為に。

二人は、新聞部の隙をつく為の作戦会議をした。

それから、数分後。

「ここは校舎一階の男子トイレだよ、二人共。まああれだね、どうせここだろうと思ってただけだね、それでもやっぱり僕も高校二年生の男子な訳なんだよ。だから誰もいない女子トイレっていうのになんか興味を持ってさ、ほんの少しの間立ち往生しちゃったんだよね……って理由で君達の笑い声を聞きながらも僕は君達二人に手出しはしなかったのさ」

リアルかくれんぼはさ、もっと恐怖を感じながらやるものだと思うんだよ、僕はさ。

新聞部はニヘラニヘラと笑っている。笑ったまま、右の手の平を

洋式便器がある個室に向けている。

その手の平には、既に光りが灯っていた。

「前言撤回前言撤回前言撤回前言撤回。さあ何回撤回したかなとか今問題で出したらわかんないよね二人共。うん、僕もわかんないから全然大丈夫」

という訳で、という言葉を含図にして。

新聞部は、自分の能力を乱用した。弾が右手から射出され、その一つ一つが音をたて煙りをたて、問答無用に個室の扉に穴を空ける。もしこの中に人が居たのならば、その人物は頭やら体やらから血液やら臓物やらを撒き散らし、個室を赤色と血の臭いで染めながら死んで逝ったことだろう。

それなのに新聞部は、笑顔のまま能力を使う。それにより人体がどうなるのかを想像し、たんたんああそうだねと無味乾燥な感想を抱きながら。

やがて、勢いに乗った個室の扉が、ギギイと音をたてながらゆっくりと開く。新聞部は能力を発動するのを止め、笑顔のまま「あれ。居ないな、二人共」と呟いた。

個室の中には、穴が何箇所にも出来た白い壁と大破した洋式便器の残骸しか存在しなかった。

「じゃあ霧島君と斉藤さんはどこにいるのかなー。霧島君は飽きたからもういいけど斉藤さんは別だよ。あー、でもあの時どうやって盾を摺り抜けて僕に近づいたんだろーうなー霧島君は。……うん。気になることは気になるけどそれでもやっぱり最優先は斉藤さんだね。斉藤さんに、後悔させないと。僕に蹴りをいれたことを、後悔させないと」

男子トイレから出て、再び教室近くの廊下　数人の教師が沈む血の池の中にピチャリピチャリとスリッパのまま平然と踏み入れ、二ヘラ二ヘラと依然笑う新聞部。

だが。

それを遠くから見る斉藤は、霧島の隣で気付いていた。新聞部の

口が、全く笑っていないことを。

「ああ、そうか。霧島君には今『瞬間移動』の能力があるのか。いやはや、盲点だったね盲点。こればかりは僕のミスだね。『能力者の位置を調べる能力』で間違いなく男子トイレに居るってわかったのに、それでも殺せなかったのは僕が攻撃する瞬間に瞬間移動したからなのかー」

「よく喋るなあ、新聞部よお」少しだけ休んだのが幸いしたのか、気丈な振る舞いをする霧島。その横で斉藤は、口を閉じながらじつと新聞部を睨んでいた。

新聞部が言ったことが本当なら、霧島だけ逃がせば霧島は助かるんじゃないかよ。

斉藤はそう思ったが、しかしそれは作戦会議の中で話された議題の一つだった。

もし片方が生き残れるような事態が訪れたとしても、新聞部を生かしたまま片方だけ逃げのびるなんて有り得ない。

無言で横を見て、霧島の横顔を見る。気力が少ししかない筈なのに、自身たっぷりな横顔。荒っぽいくりだったが、それなのに端正な顔立ちをしているという矛盾に矛盾を重ねたような横顔。

矛盾に矛盾を重ねたら、どうなるんだろうな。

自分の言葉に疑問を覚える斉藤。今の状況、新聞部、そして自分。矛盾に矛盾を重ねたらどうなるのか。その答えは、すぐに出るのかもしれない。

校長室の前にいる二人に右の手の平を向けながら、新聞部は切り出した。

「じゃ、始めようか」

瞬間、新聞部の手の平から光りの弾が発動される。その弾は霧島と斉藤に容赦なく向けられ、霧島と斉藤の存在を亡き者にしようとする。

「作戦開始ってことでいいよな、伊里！」

「あつたり前だろうよ、巧！」

弾丸の壁を目の前にしながら、不適にも叫び合う二人。だがそれこそが、作戦開始の合図だった。

まず、霧島が目の前に校舎の縦幅横幅いっぱい盾を発動させる。新聞部の攻撃を無効果させる、強固な防御壁を。大きな音が連続して起こり、煙りをあげ、目の前が煙り以外何も見えなくなる。

「何だい何だい結局はいつもどおりかい。つまんないなーつまんないよ僕はー」

そう、ここまでは新聞部が言うように、いつも通りだった。

けれども、今の霧島には 瞬間移動の能力がある。

直ぐさま霧島は煙りが晴れない内に斉藤の手と自分の手を繋ぎ、瞬間移動の能力を発動させる。本来なら斉藤だけ瞬間移動した方が手っ取り早かったのだが、霧島か、もしくは霧島と斉藤の二人同時でしか瞬間移動出来ないことを事前に理解していたが故の行動だった。

そうして霧島と斉藤は、新聞部の後方である職員室前へと移動する。新聞部に気付かれないように。いや、気付かれてもいい。気付かれたら最悪だが、とにかく気付かれてもいいから何が何でも職員室前へと瞬間移動しなければならなかった。

作戦完遂の必須条件。

二人はそれを、実行し切った。

瞬間移動しても、二人が向く方向はそのままだ。つまり、今現在斉藤と霧島の二人は新聞部に背を向けている状態にいる。斉藤は焦りながらも、音を極力忍ばせて冷静に百八十度回転し、新聞部の背を見た。

近くには既に、霧島がいなかった。

よし。大丈夫だ。ここで私が新聞部の注意を引き付ければ、作戦はほぼ成功に近い。

煙りが徐々に晴れていくのを遠目で見ながら、斉藤は大声で叫んだ。

「恐竜王女ラズベリーっていうドロドロな三角関係を描く深夜アニ

メを知ってるか、新聞部！」

突然の大声に、訳もわからずただただ笑顔のまま振り向く新聞部の姿を斉藤は直視する。自分を殺そうとしている生徒会長に恐怖を感じつつも、額に流れる汗を無視しながら大声をはりつづける。

「小学生皆が見てる深夜アニメなんだってよ！ あんたは知ってるのか！」

「……なんだいそれは。知らないなーそんな残念なタイトルのアニメなんて。斉藤さんさ。もういいじゃん。もうすぐ死ぬんだからさ、もういいじゃん。素直に静かに黙って死んじやいなよ」

言いながら、新聞部は光りが灯った両の手の平を斉藤に向ける。

笑顔のまま。斉藤の存在を消す前なのに、笑顔のまま斉藤にしゃべりかける。

新聞部は。

さよなら、斉藤さんと言いながら。

弾丸の壁を、作り出した。

けれども、しかし。

「させるかよ！」

五秒。煙りが晴れ、盾が自動的に消えるその時間が経った中、瞬間移動を再度発動してもう一度校長室の前に移った霧島は、弾丸の壁に重なりながらも遠くに少しだけ見える斉藤を救う為、盾を発動させる。

その盾は、音と煙りをあげながらも弾丸の壁を防ぎきった。

「わかってるんだよ、霧島君」

一部始終を確認しながら、新聞部は霧島の方角を無表情で見る。

その視線の先には。

ふらつきながらも全速力で新聞部の元へと駆ける霧島の姿があった。

「つまりは斉藤さんは困な訳だね。僕の注意を斉藤さんに向けつつ、霧島君がダッシュで僕に近づいて殴って僕の意識を落とす。うんうん、まあいいんじゃないのかなその作戦も。でもさ、それは霧

島君が万全な体調の時に初めて少しだけ効力が出る作戦なんだよ」

そんなふらふらな体じゃ、僕に狙われるだけが関の山さ。

そう言つと新聞部は、もう一度予め光りを灯していた射出台を、無表情で霧島に向ける。心底つまんないよとでもいいだけに。

やがて発射される弾丸の壁。それを見ると霧島は一度止まり、盾を発動して防ぐ。その間、わずか三秒。

斉藤の目の前に発動された盾が消えるまで、残り二秒。この段階で手の平に光りを集束させ、盾が消えるそのコンマ数秒前に弾を乱射させれば斉藤に逃げ道はない。

その筈だった。

新聞部の算段は、間違つてはいなかったのだ。

しかし 要は意識の問題。

新聞部は能力がない斉藤が自分に積極的に攻撃する訳がないとふんでいた。

だが、もし無能力者である斉藤が罠ではなかった場合。能力者である霧島が罠で、本命が斉藤の場合。

「よう、新聞部」

女性にしては少し低い声が、目と鼻の距離から聞こえてきた。全てを終わらすかのような明確な意志を込めているその鋭い言葉は、新聞部の目の前から発せられる。

霧島は、斉藤の目の前に発動する盾に、四角い空間を少しだけ作っていた。

人一人がギリギリ通れるくらいのその空間を、壁と床が隣接する場所に作り出す。

盾はどんな大きさにも作ることが出来る。大きいものから小さいものまで、その幅に制限はない。そしてそれは、円形にも凹凸形にも出来たり、四角い盾の中に一部分だけ抜け道を作れることと同意だったのだ。

斉藤は。霧島は。弾が少しでも当たらないように極力小さくしたその抜け道を、歩腹前進で通り抜け、煙りの中を通り、新聞部へと

たどり着いた。

そうして、今。

「噛み締めてくれよ、新聞部」

新聞部の目の前に居る斉藤の拳は、力強く握られていた。

一瞬で意識おとしてやるけど、痛みを噛み締めてくれ、新聞部。

避けようにも避けようがない、斉藤の単純な攻撃。新聞部は呆気に取られた表情をしながら、斉藤の攻撃を喰らった。

アップー。

顎を狙った、直接的な攻撃。新聞部は悲鳴をあげる暇さえないまま空中に浮かされ、背中から血の池に沈められた。制服が教師達の血で赤くなる様子を、斉藤は「はあ、はあ」と息をあげながら見下ろす。

ふいに、力が失われて勢いよく血の池の前に膝を落とした。今更になって膝が震えていることに気がつき、少しだけ笑う斉藤。前を見ると、同じように霧島も膝をついていた。お互いの視線が合わり、声に少しだけ出ししながら笑う二人。それは、安堵からくる笑いだった。

「もう、終わったんだよな」天井に視線を移し、誰彼問わず呟く斉藤。

「終わったんだ」斉藤に向けて発言されるその言葉。

「あれ？」聞いて、疑問に思う。「巧。あんたさ、そんなに声高かったっけ？」

天井へと向けていた視線を霧島の元へ斉藤は戻そうとするが。

それは、不可能だった。

自分と霧島の間。

いつの間にか立ち上がっていた赤色の新聞部の姿があったから。

「な、新聞部、お前、なんで」

お前、今の今まで気絶してたよな？

その疑問は、「……仏の顔は三度までって言葉があるじゃん、斉

藤さん」という新聞部の言葉によって押し潰される。

「てことは今怒ったら僕は仏になれるんだよ。仏様仏様。ハハッ、ハハハハ、ハハハハハ……アハハハハハ！ あー、もうなんなんだよこれさあ！ 鬱陶しいウザイ消える存在を消せ本当に何考えてんの斉藤さんゴラァ！」

何で。

その一言を、斉藤は最後に呟いた。目の前の光景が信じられない中、ボソリとつぶやいたその言葉が。 。
斉藤伊里の、最後の言葉になった。

「……へ？」

丹羽に抱き着く川崎を横になりながら見た新島は啞然とした。

知らなかった。川崎が丹羽と付き合ってた事実だけではなく、自分以外の女子と付き合っていた事実さえ知らなかった。丹羽だって男なのだ。どんなに言い繕っても、自分以外の女性と付き合っていたことはあつたかもしれない。

「学校では俺を名前で呼ばないでくれよ」

笑いながら自分に向けられたその言葉を、新島は十以上も歳の差がある自分を一人の女として見てくれたと思い、嬉しい気持ちになったことを今でも忘れることが出来ない。

それなのに。信じていたのに。特別扱いは他の女の子と違って自分だけだと思っていたのに。あるうことが新島は、川崎にまで手を出していたのだ。

「嘘、だよな？」 掠れた声ながらもはっきりと意志を紡ぐ新島。 「川崎さんが言ってるのって、嘘なんだよね？」

鬱陶しいから昭博から離れてよ。そこに居ていいのは、昭博が特別扱いしてくれるのは私だけなんだから。

その言葉を言おうとする前に、川崎の「じゃあさー、本当のこと

言ってあげなよ昭博」という、丹羽の本名を含んだ甘ったるい声を聞いて、新島は黙った。黙って、丹羽が次に言う言葉を真剣に聞き取ろうとした。目線は天井にある。丹羽がどんな顔をしているか気になったが、見ようにも首を傾けることすらままならない自分の体。両足はどうなっているか、確認したくもなかった。

そんな新島の状況を確認した丹羽は、これもケジメかと思い、そして言う。

「ああ、そつだ」新島に聞こえるように。「俺は春香以外に、直美とも付き合っていた」

未だに両腕を体に回して抱き着いている川崎を離しながら、新島が「どうして……」と言ったその直後に言葉を繋げる。

その丹羽の言葉は。

酷く残酷で、新島の心を傷付けることしか効力になかった。

「俺は、今までに十六人の女子高生と付き合ってたんだ」

十六人。

川崎と新島を引いても、まだ十四人。

特別扱いは、十六人もいた。

「な、何いってんの昭博。嘘だよな？ 嘘って言うてよ」

痛みはあつた。激しいそれが全身を伝いながらも、新島は無理矢理立ち上がる。本来なら両足はもう動かない。それなのに、新島は丹羽の本心を目の前で聞く為、ただそれだけの為に肉体の限界を凌駕する。

対して、丹羽は。

「……そつだ」と一言だけ、苦しそうな顔をしながら言った。それが新島の姿を見ているからなのか、新島に残酷な真実を告げるのが嫌だったからなのかは、本人にしかわからない。

ぐちゃぐちゃになっている口から笑いが込み上げてくる。ふらふらになった体を立たせるのも厳しいかもしれない。そんな新島を見ながら、「あれー？ 知らなかったの、ハルカちゃん？」と川崎は新島の方を向いて喋り出した。

「私は知ってたよ、昭博が女つタラシ……ってというか女子高生タラシってこと。でも私は、それでも昭博を好きになったの。過去にどんなことがあったって、結局は私を選んでくれたってことだし。ま、別れ話しを切り出された時は悲しかったかな。そこらにいる蟻んこの巢に火薬詰め込んだり中学の時の卒業アルバムに写ってた女の子全員全裸にしてやつたりしたけど、私にしちゃー穏便な方だったよ」

本当だったら昭博の携帯のアドレス帳に残ってたメールアドレスをぜーんぶエーブイのアルバイト急募に登録したかったんだけどねー。

川崎は、新島に凌辱を加えていた時と同じように、興奮で体を震わせながら淡々と語る。それを聞いて、見て、静かに引く丹羽。知らなかったのだ。丹羽は、川崎がこういう性格だとは知らなかった。だから、暗い顔で無言のまま新島を見る丹羽と、無言で睨む新島を無視して、川崎が　突然新島に飛び掛かるなど、丹羽は予想出来なかった。

「……だけどね、ハルカちゃん。あんただけは違ったのよ。私は昭博と一ヶ月で別れたの。深い関係とかにはならなかったけど、それでも幸せだったな。昭博のアドレス帳にあった女子高生の皆にもちよつとだけ確認とったけど、おんなじようなものだったんだよー、これがさー。一ヶ月が昭博の引き所だったと思うんだよお……でもね、でもね、でもねでもねでもね！　あ、ああ、あんただけは違ったんだよ、新島春香っ！」

背から体育館倉庫に激突し、嗚咽をもらす新島を見ながら、川崎はコンクリート片を捨て、新島の首に両手を思い切りにぎりしめ、力を込めた。それを見た丹羽が「直美！　お前、何やってんだよ！」と仲裁に入るが、「うるっせーんだよこの浮気者のロリコン野郎が私を好きでもないくせに私に触るな！」と聞く耳を持たない。

「か、かわさき、さ、やめ……て……」

「やめないんだー。ハルカちゃんがそういつでも私はやめられない

んだー。だってそうじゃない。昭博と一緒に二人であんな場所に行ったハルカちゃんはさー……不純異性交遊の罪でシンジャエバイイトオモウヨ！」

ギリギリと、新島の首に徐々に川崎の爪が食い込む。息をするのもきつくなりながら、意識が遠くなるのを感じながら、新島は静かに安心していた。

そっか。私は、昭博にとって特別だったんだ。

忘れもしない、丹羽との思い出。コンプレックスともいえた金髪を褒めてくれ、自分に色々なことを教えてくれた丹羽の笑顔。好きな食べ物は焼肉。好きな映画はオールウェイズ。好きな音楽のジャンルはロック。好きなテレビはバラエティー。

好きな人は、新島春香。

一年間。

それだけの期間、丹羽と新島は付き合っていた。一年目になったある晴れた日に、新島は丹羽から別れを告げられた。

忘れたかった丹羽の言葉。元々不安定だった自分達の間係を解消しようと言った、丹羽の言葉。楽しい思い出は残しつつ、嫌な思い出は自分の中から消えていっていた。

だから、新島は思い出せなかった。丹羽がどんな言葉を自分に言っただけ、自分に別れたのかを。

「すまん、ハルカ。このままだと本気になっちまう」

本気になったら、自分は社会的に終わる。

丹羽は、そういう理由で新島と別れたのだ。

そうだよ。昭博は、私を好きになってくれてたんだよ。

新島は一つの目的を持って、息が続かない状態のまま瞼を限界まで開く。体育館倉庫に差し込む朝日。暗い影に包まれた川崎。

川崎を止めようとする、丹羽の姿。

それを見て、新島はほっとした気持ちになった。確かに丹羽は川崎と付き合っていたのかもしれない。十人以上の女子高生と付き合い合っていたのかもしれない。

川崎を止める為に、「俺が愛してるのはお前だけだ！」と大声で叫んでいるけれど。

狭い視界の中見える丹羽の顔は、自分が知っている顔の中に一部分だけ含まれていたから。

その顔は、外見では真剣に見えるけれど、本質では本心を取り繕うとする　丹羽の顔だった。

昭博の部屋に入ってエツチな本見つけて問い掛けた時に、見た顔だ……。

呆然としながら、新島は少しだけ笑った。首からは既に川崎の両手が離れており、「ホント！　ホント！　じゃあ早くこんな糞金髪の前から離れてさ、私と一緒にやってよ！」と丹羽に詰め掛けている声が聞こえてくる。「ああ、わかった。大好きだ、直美」という丹羽の声も聞こえていたが、新島は晴れ晴れとした気持ちでそれを聞いていた。

そして、静寂。体育館倉庫の中に自分しかいないことを、新島は確認する。ゴホツゴホツと息を無理矢理吐き出しながら、新島はゆっくりと立ち上がるうとした　だが、無理だった。緊張が途切れてしまったのだろう。川崎は恐らく自分と同じように『瞬間移動』の能力を手に入れていた。それを使って丹羽と共に消えたのなら、今は二人して校舎の外に居るのかもしれない。

「……改めて考えると、昭博って最悪だよな」ニヤニヤと笑いながら、体育館倉庫の天井に向けて本心を吐き出す。「でも、しょうがないんだもん。好きになっちゃったんだから」

このまま横になっていよう。いつかは助けが来て、また日常に戻れる日が来る筈だから。その時には、丹羽にもう一度詰め寄ろう。

詰め寄って、本気にさせてやる。

「あー、眠くなってきた」

そうして、新島はゆっくりと目を閉じようとした。痛みはもうない。このまま目を閉じたら、すぐに安眠の世界に行けることは新島自身がよくわかっていた。

寝ようとしたのだ、新島は。この時この時間、新島は寝ようとしたのだ。

けれども。

轟音が、響いた。体育館倉庫の横。正門の前。そこで、隕石が落ちるような　と表現してもいくらいの大きな衝撃が、地面を揺らした。体育館倉庫のすぐ側だったから気付いた。校舎の中に居る人間では恐らく気付かないであろうその轟音。

「な、なに」言いながら、新島は不安になった。

なんともいえない不安。何故かはわからない。だが新島は、不安を感じずにはいられなかった。閉じようとしていた目を開け、両腕を使い腹を床に隣接させた状態にしながら瞬間移動の能力を使い、正門前へと移動する。

グラウンドの土を制服伝いに感じながら、新島はそれを見た。

クレーターを。そこから巻き上がる大量の白い煙りを。握られた強固な拳を。周りに広がっている、誰の者とはわからない血を。

その中心人物は。

新島が、よく知る人物だった。「……………」無言のまま暗い顔でこちらを見る人物。

「そんな……………」それを見て全てを悟った新島は、地面に腹をつけながら、変わり果てた人物の名前を呟いた。

「昭博、なの？」

丹羽は申し訳なく感じていた。川崎に対しても。他の女の子に対しても。いつもいつも一ヶ月はしたら、彼女らに飽きてしまう。自分の一時の感情の揺れで付き合うことになっていた彼女らに対して、いつもいつも申し訳なく感じていた。

だが、新島だけは。新島春香だけは違ったのだ。一ヶ月経っても飽きがこなかった。深い関係に陥ろうなど、これまでの経験では考

えもしなかったのにも関わらず、新島だけは違い、付き合い始めて二、三週間で一泊したのだ。信じられなかった。今まで女子高生が好きで女子高生と付き合ってきた丹羽だったが、いつもいつも世間の目を気にして行為に及ばなかったのに。それなのに、新島に対してだけは何の躊躇いもなく行為に及んでいた。きらびやかな金髪を揺らしながら、ニツコリと笑う彼女。

丹羽は、泥沼にはまっていた。

いつか別れよういつか別れようと思っただけでも、いつになっても別れを切り出せない。「ねえ昭博、結婚式って憧れるよね」と軽口で言ってきた新島を力いっぱい抱きしめてしまいたい欲望を、抑え切ることが難しくなっていた。

気付くと、新島は高校二年生になっていた。始業式で「今年もよろしくね、丹羽先生」と他の生徒と同じように振る舞う彼女に詰め掛け、大声で叫んでやりたかった。「よろしくな、ハルカ」と。

付き合い始めて一年がそろそろ経つと新島が言った時、ふと、丹羽は思い立った。一年だ。一年で、終わりにしよう。このままでは本格的に危ない。自分の心が「新島春香と別れよう」と言っている今だから、別れを切り出さなければならぬ。

このまま関係が続き、別れたくないという感情が自分を襲ったその時に。

自分はもう、職を失っているかもしれないから。

だから言った。「別れよう。このままだと本気になっちゃうからさ」と、新島に言っただけだった。泣き喚く彼女を見たくなかった。宥めようにも宥めきれなかった。彼女の体に触れる度に、別れたくないという思いが自分を責めるから。

川崎の能力により正門前へと移動した時、丹羽は川崎の顔を柔らかい表情で見つめながらこのことばかり考えていた。「今のね、瞬間移動っていうらしいんだ」。学校の外に行きたかったけどなんか壁があって移動出来なかったよ」という川崎の言葉が耳を素通りする。何も入らない。新島。新島春香。ハルカ。ハルカが居てくれ

ればいい。ハルカが無事なら、自分はどうなってもいい。

そう思っていたにも関わらず。

丹羽の口から、丹羽自身予想だにしていなかった言葉が漏れた。それはある一つの合図で。丹羽の終わりを告げ、そして始まりを告げる汽笛のような言葉だった。

「僕らの所にやってきたー、やーつらっのなーまえっはサイキックー」

「え？ 何そ」

川崎の言葉が途切れ、二度とその続きが発せられることはなかった。

恐怖に陥ったり、もう無理だと思った時に呟いていたその歌詞。

午前八時十九分。丹羽は何故、職員室の中に居なかったのか。普通なら、この段階で職員会議の為に職員室の中にいなければならなかったのに。

谷山皆瀬、三嶋勇気が新聞部の操り人形、二体目、三体目。

ならば、一体目は誰なのか。

何故、丹羽は谷山と三嶋に命を狙われなかったのか。

誰が、新聞部に操られているのか。

シャットアウトされた意識の中、丹羽の頭の中に声が響く。

丹羽先生は実験だよ。僕の人形以外の人が能力を発動したのを見たら、覚醒してね。いやはや、それまでは何も知らない一般人を取り繕ってよ。その方が面白いからさ。

男性にしては少し高い声。いけ好かない程整った顔をした少年が、校長先生を助けに来た勇敢な教師に対し敬意を払い、操り人形にしようとしている場面が頭の隅に浮かび、やがて消えた。

暗い暗い闇が、丹羽の頭の中を包む。何者も何物も介入を許さない頑丈な壁の存在を少しだけ感じる。

意識はない。意識がないまま、丹羽は自身に課されたプログラム通りに動く。そうして正門の前に右拳を叩き込み、地面に大きな穴をあけた。その間にいた能力者の耳や内蔵や顔頭鼻目瞼指爪肌毛肉片を、赤い液体に混ぜて粉々に撒き散らしながら。

丹羽は。

見つけた能力者を片っ端から力尽くで粉々にする能力を与えられた。

『肉体強化』の能力。

光りがない丹羽の視線が次に捉らえたのは。

瞬間移動により自分の目の前に現れた、新島春香の姿だった。

「あー、あー、あー。僕らの所にやってきたー、やーつらっのなーまえっはサイキックー。……よし、元通り、元気だ。どうだい霧島君この歌。歌詞が訳わかんないんだけどテンポとノリがいいから僕は好みなんだけどさ。……ねえ、霧島君。悲しみにうちひしがれるとかもしくはテキストに残念がるとかまあどっちでもいいけどさ、霧島君、口を開けたまま呆然とするのはやめてくれないかな。つまんないっていうかそもそも動かないから、展開が。僕のやりたいこともそろそろ大詰めだし、ここで一旦リセットしたい気持ちもあるんだけど、うーん、まあこれだけじゃあいわせてもらっよ」

そう一気にまくし立てると、道端に転がる石を見下ろすかのような冷たい表情のまま、膝を廊下につけて動かない霧島に向けて、新聞部は言った。「悪いのは僕だからさ。とっと立ち上がったととと僕を攻撃するなりなんかしてほしいところなんだけどなーって感じ」

新聞部の横　霧島の視線の先には、二つに分かれた人体があった。縦に分かれた、紛うことなく人間だった物体。ついさっきまで動いていた。霧島と共に笑い合い、叫び合い、名前を言い合っていた

た。その顔は。その体は。股から一直線に裂かれ、半分に分かれている。新聞部により裂かれた直後、ゆっくりと境目と境目から右半分と左半分が分かれ、バタンという音をたてながら職員室前の廊下に倒れた光景を、霧島は遠目ながらに見ていた。今現在、その半分とその半分は内蔵を血流と共に押し流し、二つの小さな血の池を着々と象っている。制服が血に沈み肉体が血に沈み、先程まで生きていた人間が血に沈んでいく。その光景を、ぶつ切りになったカラーフィルムの映画を観るかのように、スローモーションで霧島は眺めていた。

斉藤伊里が、死んだ。

今までに見たことがないようなむごい死に方で、呆気なく死んだ。「い、り？」小さく彼女の名前を呟く霧島。「……なんだ、これはよおー！」

「おー、待ってたよ霧島君。君の激昂。うんうん、やっぱりこうでなくっちゃつまらないんだよ。その質問には切実ながらどんな情報でも敵に簡単に喋ってしまう調子に乗ったボスキャラの如く、僕に言わせてくれ」

なんとか立ち上がるうとしながら斉藤に叫ぶ霧島を確認し、笑顔になった新聞部は二ヘラ二ヘラと笑いながら霧島に喋りかけた。

「そもそも君達二人は僕が使える能力が『弾』だけだと思っていたのが間違いだっただよ。僕の能力は無限大だ。何でも出来るし、何でもやれる。限界はないんだよ、僕の能力に。それでも君達二人に『弾』しか使わなかったのは、一種の縛りプレイってやつなんだね。ほら、よくあるじゃん。ゲームとかでさ、あの武器しか使わないで全クリとか、あのキャラしか使わないで全クリとか。そういう所謂絶対的に自信のある強者にしか出来ないありつたけの侮辱を込めた行動を試してみたかったんだ、僕はね」

それでもブチ切れて『刃』の能力を使ってしまったのは僕の負け部分だよ。だからこれだけは言える、斉藤伊里という人間は凄かったんだって。

新聞部はそもそも、斉藤伊里はすぐに逃げ出すと思っていたのだ。学校に無理矢理侵入したのはわかっていた。だから何も言わずに学校を取り囲む壁を直し、斉藤を閉じ込めようとしたのだ。突如自分の目の前に現れた死体の大群。これを目の前にし、正気を保っていないらるる筈がないじゃないか、と新聞部は考えていた。

だが、実際は違った。斉藤は、逃げるどころか立ち向かったのだ。三嶋を殺そうとした川崎にも立ち向かい、動き出した。霧島と向き合いながら『障害を全て無視する透視』の能力でそこまで確認していた新聞部だったのだが、そこまで見て透視の能力の発動を止めた。斉藤伊里も、霧島巧と同じように自分を楽しませてくれるかもしれないと思っただから。

そして、斉藤は実際に予想外の行動をしてみせた。自分に蹴りをいれたり、無能力者にも関わらず自分に盾突いてみせた。

何が斉藤をここまでつき動かすのか。

それに対して少しの好奇心を持った新聞部は、校長先生の浮気相手の容姿を確認した時と同じ能力 『過去視』を使い、斉藤の内に潜む斉藤の成分表示を確認しようとした。

そこにあつたのは、阿鼻叫喚の渦だった。自分などとはまるで比べものにならない程暗い過去。母親が父親を殺し、自分も殺そうとした母親を殺す斉藤の姿。正当防衛で片付けられた、母親殺しの真実。前々から斉藤が忙しいことは知っていた。何人もいる兄弟達姉妹達の世話を毎日し、その上で高校生活に浸かる斉藤を新聞部は感心さえしていた。

けれども、その裏に潜む過去は知らない。知る訳がない。こんな事実が露見していたら、斉藤は間違いなく副会長には当選していなかっただろう。有り得ない。こんな過去は有り得ない。それなのに、斉藤伊里という自分と同年の少女はそんな闇を背負って生きていたのだ。

僕とは違う覚悟をもって、斉藤さんは毎日勤しみながらそれでも朗らかに生きていたんだ。

覚悟の質が違う。

そんな斉藤に、新聞部は簡単に嫉妬した。斉藤の行動がいらだたしい為に斉藤をターゲットにしていたのではない。斉藤が斉藤であるが故に、新聞部は斉藤をターゲットにしたのだ。

結果、斉藤は真つ二つになった。自分の能力によって、『斉藤伊里を殺す』という大量にあるやりたいことの一つを達成してみせた。しかし、新聞部の心は充たされない。絶大な力を持っている。絶大な力によって、学校を血の海に変え、その中の一部として校長先生や斉藤を殺してみせた。

それなのに。

新聞部の心は充たされない。

「……………」と。柄にもなくセンチメンタルに浸ってしまったようだね。えーと、何分経ったのかな。よくわかんない」

新聞部の言葉は、しかし、自分の足元に居る人物の存在を確認したところで止まる。

そこには。

斉藤の半身と半身を抱き抱えながら、膝を丸めて泣き叫ぶ霧島の姿があった。元々無理があったのだ。狩谷のような精神を持っているならまだしも、斉藤のような過去を持っているならまだしも、ただの一般人でしかない霧島に、この状況に堪えられる訳がない。今まではなんとか耐えていた。初めは新聞部に対する怒りだった。次は斉藤を守ろうとする意志だった。

だが、斉藤が死んだ。目の前で、体をスパンと切り裂かれた。それと同時に、霧島の意志も切れた。裂かれた。体力も精神力も限界が訪れた。斉藤を心配させないようにと、トイレの中『瞬間移動』の能力が自分のものになる時に発生する激痛にも堪えていたその強靱なる精神力は、ここで途切れた。

霧島という存在を繋ぎとめる糸は、もう切れてしまったのだ。

「……………」泣き叫ぶ霧島を見て、沈黙した新聞部。「がっかりだよ。がっかりだ。残念だ。君には正直僕を最後まで楽しくしてくれ

ると思つていただけ、僕の近くでこんなにも堂々と泣かれちゃあ、君に興味を失わざるを得ないよ」

君は、斉藤さんと同じように僕自身が手を降すまでもない。

霧島にこう言った新聞部は、「あ、そうそう」と、最後の最後で霧島を嘲笑うかのように忠告した。

「校舎一階に僕は予め中途半端な密室をつくりだす壁を発動させておいたんだ。だけどこれがまた他の壁とは違う性質でね。入るのにも制限があるんだ。まあでも入る方は簡単で、音以外は誰でもどんな物でも自由自在。だけどね、出る方は違うんだよ。無能力者と僕の操り人形と僕しか出られないんだ。だから瞬間移動を使って校舎の外に出ようなんて無理だし、叫び声も何も通らない。君はだから今まで正気を保っていられたんだろう？」

外を見てみなよ。その程度で泣いている君じゃあ想像もつかない光景が広がっている筈さ。

言いながら、新聞部は『空中浮遊』の能力を使い、重力法則を無視して空中に浮かび上がる。そしてそのまま開けっ放しの校舎一階のドアから飛び去り、一気に次なる目的地へと急いだ。

本当は、『瞬間移動』が使えば一瞬で彼女の元へ行けるのになあ。

心の中でため息をつきながら、新聞部は校舎を横目に上昇し続ける。

新聞部の誤算。それは、自分が分け与えた能力を、自分で使うことが出来なくなるといふものだった。何度も使おうとした。けれどもその度に新聞部はため息をつき、残念がった。いくらランダムで分け与えたとはいえ、瞬間移動の能力は僕も使いたかったな――

と思う新聞部だったが、時は既に遅く、二度と使えないようになっていた。

「諦めるしかない、ね。まあいいや。そんな些細なことはどうでもいいんだよ。僕が唯一選んであげた能力を持つ彼女が、ようやく能力を解除したんだ。いやー、どんな障害も無視して見通す透視の能

力が効かないなんて、どんだけ強いんだいって感じだよ、あの能力」
新聞部は口では悔しがりながらも、笑っていた。とても楽しそうに笑っていた。霧島と斉藤は前座に過ぎない、ここからが本番だともいいたげな雰囲気、宙を浮かぶ。

「待っててよ、美香さん」

新聞部は。

自分のあだ名が新聞部となった原因の少女 高柳美香の名前を
呟いた。

「何で貴方がウキウキの能力を使ってるの！　話が違う、話が違う！」

綺麗な髪を両手でくしゃくしゃにし、相も変わらず車椅子に座りながら咆哮する谷山を見る狩谷。その表情は疑念にとり付かれていた。先刻まで新聞部によって操られていた谷山。それにより喋ることは出来ず、ただ淡々と目の前に居る人間を自身の能力であるレーザーによって殺傷することだけをインプットされた人間。それが谷山だった筈。

だから、こんな風に叫んだり出来るなんて有り得ないのに。有り得ない、筈なのに。

谷山皆瀬は、三嶋の能力である『瞬間移動』によって屋上に現れた自分と高柳、そして諸悪の根源である新聞部に対して怒りをあらわにしている。

「ちょっとミサオ。あの人ってミナセちゃんよね？　さっきまでと全然違うんだけど」屋上と踊り場を繋げる扉の前で同じように佇む高柳も、狩谷と同じように困惑していた。狩谷の耳に口を近づけ、小声で話す。

谷山の身に何が起きたのか。二人の頭の中に、疑惑が浮上する。だが、狩谷は谷山の変化についての理由を大体把握していた。「多分、僕がミカと一緒に瞬間移動したから谷山さんは混乱しているんだと思う」

僕やミカみたいな人が死んだら、その人が持つてる『能力』ってというのが色々な人に移るのは間違いのないことだから。

狩谷は死者の『能力』が他の能力者に移行すること、そして、谷山の様子についてあらかたの予想をたてていた。前者については確信をもち、後者についてはまだ断言は出来ない微妙な段階。けれども狩谷には、間違いなく断言出来ることが一つだけあったのだ。

それは、則ち。「谷山さんは三嶋君の『能力』が僕とミカに移ったことを知った。それで混乱して、喋れるようになったんだ」

三嶋が死んだことを、谷山さんは知ったんだ。

誰かに操られていた。谷山皆瀬は、今の今まで誰かに操られていた。誰かに操られていたせいでレーザーを使い、人という人を殺していったのだ。三嶋と共に、惨殺していったのだ。誰かによって。

狩谷は思索していた。その誰かさえわかればこの不可思議な非日常から抜け出せる、ミカと霧島君と共に楽しく生活出来る普通の日常に戻れると。その為には、何がなんでも犯人を探し出さないとけない。自分におかしな『能力』を与え、学校全体を血の海に沈めた誰かを探し出さなければならぬ。

静かに決意した狩谷は、自身の能力を使った。他人の思考を読み取れる能力。未だに「何で！ 何で！」と叫んでいる谷山単体に範囲を確定し、能力を発動する。「ねえ、ミサオ。どうしたの、黙っちゃって」という高柳の言葉を無視することになってしまったが、視線を鋭くして神経を尖らせた狩谷は仕方がないと判断した。

『何で何で何で！ ウキウキは！ 何でウキウキが、ウキウキが！』
通常の声とは違う伝達方法により、自身の頭に直接響く声を聞いたため息をつく狩谷。今の谷山は心で思ったことをそのまま口に出している状態だったからだ。

だったら。

隣で自分を心配そうに見る高柳の視線に気付きながらも、狩谷は谷山に向けて口を開く。「谷山さん」

「何で何で、な、何よ！」

俯いていた顔をあげて、叫ぶ谷山。その頬には、涙が流れていた。顔が赤くなり、目が両方とも充血している。

狩谷はその様子を見て悟った。谷山さんは三嶋君が死んだことに間違いなく気付いている、それによって誰かから受けた洗脳が完全に解けていると。

だったら、話は早い。

「谷山さん」もう一度ゆっくり、目の前で泣く同級生に問い掛ける。
「谷山さんと三嶋君にこんなことをさせて、その上三嶋君を結局殺しちゃった奴は誰なのかな」

「ッ！ 死んでない、ウキウキは死んでない！」

彼氏が誰かに殺され、学校の屋上で同級生二人を前に泣き叫ぶ少女という『非日常』を目にした狩谷は。

「チッ」と舌打ちをし。

その様子を見た高柳の目が大きく見開かれたことに気付かないまま、谷山に向けて言い切った。

「いいや、谷山さん。三嶋君は死んだ。死んだんだ」

わかつたら、復讐でも心に決めてくれないかな。僕達はそれに協力したいんだ。

静かに、淡々と言う。無表情で、事務的な口調で、今さっき彼氏が殺されたことをうつすらと把握した少女に向けて言う。

「だから、誰がこんなことをしたのか、教えてくれな痛あ！」

「うるっさいわミサオ！」

それを見て聞いていた高柳が。

大声を出して狩谷の鼓膜を響かせながら、右の掌で狩谷の頬を叩いた。

「あんた、正気？ 何考えてんの信じらんないんだけど！」

「何がだよミカ！」いきなり頬を叩いた高柳に対して憤慨する狩谷だったが、隣で自分を睨む人物の表情がとてつもなく恐ろしいものになっていることに気付き、一瞬臆す。しかしもう一度思い直し、再び憤慨しながら高柳に向けて叫ぶ。「この状況から抜け出す為には、今すぐ、こんなことをした誰かを特定しなきゃいけないんだ！ その為には少しの時間も惜しいんだよ！ 過ぎ去ったことをグダグダと悩まれても、困るんだって」

「……………」

狩谷の発言を聞いた高柳は。

無言で、狩谷の顔に向けて右ストレートを繰り出した。

当然のように「痛ぁ！」と叫ぶ狩谷。何か反論しようとしたが、その時には既に高柳がその場から移動していたので間に合わなかった。辺りを見渡してみると、高柳は谷山のすぐ側に駆け寄っていた。レーザーの能力を未だ持ち、錯乱状態に陥っている谷山のすぐ側に。

あ、危ないってミカ！

そもそも狩谷は、当初、洗脳が解けたとみられる谷山相手に能力を使う気はなかった。洗脳が解け、自分達に危害を加えないということは則ち谷山が自分達の敵である誰かと敵対関係を持つということになるからだ。

だが、谷山は混乱していた。三嶋が死んだということを受け入れられず、ぐずぐずと自問自答していた。だから狩谷は『能力』を使ってまで谷山と交渉をしなければならなかったのだ。

何をしでかすか、わからないから。谷山が、何をしでかすか全く見当もつかないから。

それこそ、自分の側に駆け寄ってきてくれた生徒会のメンバーに対して突然レーザーを放つかもしれない。

「近寄らないでミカちゃん！ う、うとうう、うとうとう！」

狩谷は見た。

涙を流し、絶望で表情を染めた谷山が、光りを燈す両の掌を高柳に向けるのを。

「ミカ！」叫んでいた。狩谷は自然と叫び、駆け出そうとしていた。しかし、高柳は狩谷に向けて一言だけ呟いた。「大丈夫。大丈夫だから」と。

「ミナセちゃん」

「黙って！」

「……ゴメン。私からは何も言えない。ミナセちゃんがどんな気持ちなのか全くわからないから」

「黙って！ 黙ってよ！ こ、殺す、わよ！」

「でも、これだけは言わせて」谷山の脅しに全く屈服することなく、

高柳は谷山へ向けて申し訳なさそうな表情をする。狩谷は心配だった。今すぐ高柳に何かをしてあげたかった。だが、その何かが、何も思い浮かばなかった。「さっきのミサオの発言は有り得なかった。本当にゴメンね。多分あいつもこんな状況だからテンパってるのよ。私達、とりあえず他の場所行って手当たり次第こんなことした奴を捜すからさ。ミナセちゃんも、落ち着いたら手伝ってくれるかな」

落ち着いたらでいいからさ。
落ち着くまでは、泣き叫んでいいから。私達はその間、ここから離れるから。

いつの間にか谷山は呆然と高柳を眺めていた。そして、燈していた光りを消し、両手を両目にあてて再び泣き始める。その口からもれる悲痛な叫びは、高柳の心を突き刺した。

狩谷はその間、高柳の言葉を頭の中で繰り返していた。僕は、ミカの言う通り、混乱しているのか。

学校で初めて死体を見た時。死体と化した同級生の姿を見た時。自分は、何も感じなかった。

「僕は、普通じゃないってことなのかな……」
「何言ってるのよ、ミサオ」誰彼問わず小さく問い掛けた狩谷の言葉に、狩谷の横を通りすぎた時にこたえる高柳。「この状況で普通とか普通じゃないとか、もうないわよ」

狩谷は見た。

そういう高柳の目に、うつすらと涙が溜まっていた光景を。

学校の生徒、教師が殆ど死んでしまったこの状況。何人かに『能力』を与え、下らないゲームを繰り返している巨悪の根源が何処かに居る。

狩谷と高柳はわかっていた。

非日常をいつもの日常に戻す為には、その巨悪の根源の力が必要だということ。

「うわっ!」「っ!」

そんなことを考える二人の頭に、再び激しい痛みが訪れる。谷山

の叫び声は屋上に響かない。響くのは、狩谷と谷山の叫び声だけだった。何度目かになる痛み。痛みが訪れ、それが引くにつれ、自分にどんな能力が舞い降りたのかわかっていく。しかし、高柳は喜べなかった。『能力』が新しく自分のものになるということは、つまり、誰か他の能力者が死んだことと同意だからだ。

痛みが完全に引いた。屋上の床に膝をついていた二人が、無言で立ち上がる。目の前には踊り場へと繋がる扉。後方からは苦しみを吐き出す泣き声が聞こえてくる。高柳は一刻も早くこの場から離れようと足を前に踏み出し、狩谷もそれにつられて足を前に踏み出すとした。

その時だった。

「あー、谷山さん、まだ生きてたんだ。ゴメンね。もう君、要らないや」

後方から。後方の斜め上から。空中から。

この学校の生徒ならば誰もが知っている声が聞こえてきた。成績優秀スポーツ万能、誰もが羨む生徒会長。

新聞部。

狩谷と高柳はその声に気がつき、急いで振り向いた。だがしかし、もう遅かった。

谷山の体と車椅子が、右と左に分かれていた。断面が見える。血液を撒き散らす谷山の中身。顔が、腹が。真ん中を境に線が入れられ、そこから右と左にそれぞれ崩れ落ちる、谷山の身体。

「キヤアアアア！」

屋上に、高柳の叫び声が響く。それを聞きながら、狩谷は真剣な眼差しを前に向けながら、新聞部は軽やかに谷山だったものの前に着地しながら。

互いを睨んだ。

「新聞部君。何を、してるの？」

「あれ？　もしかしてもしかなくても君は狩谷操君かな。あーそうかそつか、君にも『能力』が行き渡ってたねー。そうだねそうだ、そうでもないよ、君みたいなのどうしようもないのがここまで生き残れる訳ないもんね」

虫けらでも見るかのような冷たい目で狩谷を一瞥すると、直ぐさま興味を失ったかのように視線を移動させ、高柳を見る新聞部。「僕はね。ミカさん、君に会いたかったんだよ」

「あんたか、新聞部！　全部、あんたのせいか！」その言葉に、今の今まで叫んでいた高柳は激昂する。何も考えずに、自身が発動出来る『能力』を何も発動しないまま新聞部に向かって走り寄ろうとする。それを見た狩谷が、「近寄っちゃ駄目だ、ミカ！」と叫んだが、遅かった。

「情熱的な近寄り方するね、ミカさん」

心の底から生まれる感情を元に笑顔になった新聞部は、その顔のまま『能力』を二つ、同時に発動した。

新聞部と、近寄って来た高柳だけを囲む立方体の小さく赤い『箱』。

そして、学校全体を囲む『壁』を更に囲むように、もう一つの無色の『壁』を作り出す。『新聞部以外が発動する能力を全て無効にする壁』を。

そうして。

高柳は閉じ込められ。

狩谷は一人、屋上に取り残された。

「……………」「……………」昭博、なの？」

新島の口から出た言葉は、確認の意を示していた。今の今まで新島の目の前に居た男。川崎によって痛みつけられた自分を救ってくれ、そして消えた新島昭博という一人の男。

何か、違う。

粉塵の中、新島はうつすらと見える丹羽を見て、率直にそう思った。目の前に自分が居るにも関わらず、相も変わらず無言で佇み続ける丹羽。直立不動で、動く気配がない。それなのに。ただ、一度見ただけなのに。足が動かないせいではふく前進をするような状態に陥っている新島は、丹羽の様子がおかしいと判断した。

「……………」
何故ならば。

丹羽の隣に居る筈の川崎が居らず、尚且つ、丹羽の目が 何も捉えていないのではないかと思う程無機質な光りを放っている丹羽の目が じつと自分の方向を向いているからだ。

まるで、獲物を識別するような、そんな野性的な視線。それを、先刻、川崎の暴力から助け出してくれた丹羽が放っている。

「昭、博？」もう一度。再度、確認の意味を込めて。周りに広がる砂煙りが引いていく中、新島は声を震わせながら呟く。そうだ、自分の勘違いだ、昭博は何もおかしくなっただけなんかない。そう断言する為に。丹羽が笑いながら、「だから学校で名前を呼ぶなって」と言ってくれるのを信じて。

そうして。新島が『瞬間移動』をしてから数秒が経ち、完全に周りを包む粉塵が消え去ると、新島は見た。

見てしまった。

「え、え、え」

思わず口に出る戸惑いの言葉。仕方がなかった。誰だつて。例え、阿鼻叫喚の渦の真中に居たという経験を持つ新島でさえ。こんな光景を見たら戸惑うのは仕方がないのだ。

無言で自分を見る丹羽の右横に。

大きな窪みと、その近辺に広がる血と肉片の跡があった。顔の破片、内蔵の破片、黒い髪の毛の先。全てが全て、とてつもない力により粉々に吹き飛ばされ、元の形を成さないただの肉塊と化してしまっている。

まさか。

頭の中に浮かんだ想像を、瞬時に取り払おうとする新島。しかし、遅かった。一度浮かんだその考えは、やがて全ての記憶を繋ぎ、一つの結論へと結び付ける。

昭博が、あいつをこんな風にしたの？

嘘だよ。

そう言おうとした新島だったが、瞬時にその思考を消し、目の前の光景に驚嘆する。

「……………」無言で、一直線に、今までに見たこともない尋常ならざる速さで自分の方へと向かってくる丹羽の姿が、そこにはあった。

「……………」

何も捉えていないのではないのかと思われたその目の中には、間違はなく自分が映っている。大きな音と、地面の振動と共に駆け出した丹羽の右拳は、間違いなく自分を狙っている。説得をしよう、と思うことも実行することも不可能な程、短時間で自分の方へと丹羽がやってくる。

明確な、殺意を携えて。

新島は、瞬時に『瞬間移動』の能力を発動していた。先程の川崎とは違い、冷静にとまでは言えないが、それでも完全に避け切れるタイミングでの能力発動だった。川崎の場合と新島の場合は違っていた。川崎の場合、手を伸ばせば相手の体に触れられる距離に丹羽と川崎は居た。だからこそ川崎は逃げ遅れ、見るに耐えない粉々な体となってしまったのだ。けれども、新島の場合は違う。ある程度の距離があり、砂煙りが立ち込み、しかも、新島の足は動かない状態だったのだ。それにより、新島がよける為には走って逃げるという選択肢はなく、『瞬間移動』によって違う場所に移るという選択肢しかなかった。行動が制限されていたが故に、新島は川崎が行えなかった行動に移ることが出来たのだ。

そうして丹羽の攻撃から逃れた新島は、今。
グラウンドの真ん中に、存在している。

数多の生徒、幾多の教師の死体が並ぶ狂った空間。横になってい
るせいか、鉄分の匂いと強烈な拒絶感が新島の頭を揺らす。視線の
先には自分を攻撃する為に振られた丹羽の右拳。肌色だけではなく、
赤色にも染められた攻撃手段。その色が誰のものなのか、新島は考
えたくはなかった。

もう嫌。昭博が何でこんなことをするのかわからない。も
うやだ。やだ。嫌。嫌、なの。嫌なのに！
嫌なのに。

この場をなんとか凌がないと、丹羽を元に戻す方法を探すどころ
か、丹羽の手によって自分が死んでしまう。

それだけは、何を天秤にかけても嫌だった。嫌なこと尽くめの自
分の人生。染めるのが怖い金髪を理由に三人の同級生達に閉じ込め
られ。使う宛のない「能力」が自分のものになり。大量の断末魔を
聞き。川崎に暴行を加えられ。揚げ句の果てには、自分を助けてく
れる唯一の存在である丹羽さえも自分に向けて拳を向ける。考える
だけで頭が痛くなった。身が引き裂かれるような痛烈な感覚。だが、
新島は呻き声一つ出さなかった。涙が出る。苦悶の表情になる。何
も考えずに、痛みの流れに身を任せて意識をなくしたいと思った。
けれども新島は、両腕を地面に付けながら、しっかりと前を向いて
丹羽を見ていた。

何もかも嫌だけど！ でも！ ここで諦めるなんて、昭博を
諦めるなんて有り得ない！

新島は決意した。

この騒動が終わらない限り、自分は泣かないと。それが、自分を
助けてくれた丹羽に向けての精一杯の誠意だと思ったからだ。

新島は今、死体に囲まれてうつぶせになっている。それは一つの
考えからだった。丹羽がおかしくなっているのは間違いない。しか
し、丹羽なら。丹羽昭博という男なら。生徒や教員を掻き分けてま

で自分を殺そうとは思わない筈だ、と。

そう、新島は考えた。

けれども、その考えは安直で、かつ矛盾だらけだった。新島自身を攻撃しようとする時点でおかし過ぎる丹羽の心境、新島がはかり切れる筈もない。

いや。

今の丹羽には、『能力を使える者を排除』するという思考しか与えられていない時点で、新島の些細な企てなど無意味となる。

「……………」

無言で。

丹羽は、駆け出した。足から生まれる巨大な衝撃により、グラウンドに発生する大きな窪み。その度に、新島の元へと近づいていく。一步。たかが一步。それなのに、新島と丹羽の距離は狭められ、多くの死体が無残にも宙を舞う。その光景はあまりにも見れるものではなく、新島は嗚咽感と悲しさに唇を噛みながら、自分に近づく丹羽を見続ける。初めは二十人分くらいの死体が丹羽と新島の間にはあったのに、今は数人分くらいの死体しか存在しなかった。

たかが一步にも関わらず。

新島は、窮地にたたされた。

「やめてよ、昭博！」

叫んだが、丹羽は止まらない。その事実を目の前に突き付けられた新島は、頭の端で思い描いていた逃走経路を思い返し、そして『瞬間移動』を使った。

新島は、空中に居た。

『瞬間移動』は自分の見知っている場所に移ることが出来る能力。それならば、自分が今さっき見た、グラウンドの真ん中から上の空に移ることも可能になる、ということになる。

うつぶせのまま、新島は空に浮かぶ。一瞬得た浮遊感。目の先には住宅街が見える。後ろを見たら、校舎の三階が見えていることだろう。新島は改めて確認もせず、下を眺めた。やがてやってくる重

力に身構える為に。丹羽の同行を確かめる為に。

地面にとてつもない力がたたき付けられる音が真下からした。それは砂を巻き上げ、空中にいる新島の顔にも少しだけ降り懸かる。二度目の空振り。二度目のしくじり。砂煙りのせいで新島はよく見えなかったが、丹羽は瞬時に新島が上空に逃げたことを『強化』された目により探し出し、跳んだ。

あらゆる者を震撼させる音が、たった一人の人間の跳躍により生まれる。「……………」

「……………」

新島の体が重力によって落ちるよりも先に、丹羽の拳が新島に向けて放たれた。

その事実を把握すると、新島はすぐに、『瞬間移動』を使う。ほとんど条件反射だった。考えていた行動ではあったが、あまりにも丹羽の攻撃が早過ぎたせいで発動が早くなった。しかし、そのおかげかどうなのか、新島は三度目も丹羽の攻撃をよけることに成功する。

次なる新島の移動先は、校舎の入口の前。言い換えると、グラウンドの端だった。

新島は考えた。

今、自分が使うことの出来る三つの能力を、どう使えば丹羽から逃げられるのか。

いつの間にか一つ増えてたのはビックリしたけど、二つ使えば昭博を止められるから別に関係ないし。

周りに死体が存在する状況下。新島は、空中に飛び上がった丹羽に視線を向ける。顎をあげ、自分を狙う為に次の行動に移す丹羽の姿を、しっかりと目の中に入れる。

丹羽は。

新島の予想通り。

空中で新島の姿を見つけ、空中で方向転換し、空中で自分を攻撃する為に落下速度を早めた。なんとかして新島が居る方向へと行こ

うとする丹羽。だが、空中で落下速度を早めるなど不可能に近い。だから丹羽は、体全体を『強化』し、それによって生じた余分な自重により、地面にたどり着くための時間を少なくした。

新島は、思い返す。『瞬間移動』とは別の、新島自身が持つ能力。新島の元にやってきた、使うあてのない無力な能力。だが、しかし。今。

今、この瞬間にだけ一度使えば。

丹羽を止めることが出来るし、自分が助かることも出来る。逆に、今使わなければ、新島は丹羽とずっと攻防戦を繰り返さなければならぬ。

今、この瞬間。

丹羽が空中に浮かんでいるこの瞬間に使えば。 。
けれども。

「……ダメ、だ」

使え、ない。

新島は、自身の能力を発動しなかった。

発動、出来なかった。

もし新島が自身の能力を使い丹羽を止めると、それによって丹羽に危害が及ぶ。

昭博を傷付けるなんて、ダメ。ダメ。出来、ない。

新島は諦めた。能力を使い、丹羽を止めることを。だが新島はめげなかった。すかさず『瞬間移動』を使い、次なる移動先へと意志を向ける。意志転換、場面転換。丹羽との攻防戦に、一時の油断も許されない。何か別の方法がある筈。そう思い、新島は苦しみながらも『瞬間移動』を使おうとした。
その時だった。

新聞部により、新聞部以外の人間の能力は使えなくなる『壁』が発動された。

「何、これ」

瞬間移動が出来ない。『瞬間移動』が、発動されない。疑問という疑問が新島の頭を占領する。何で能力が発動しないのか。『瞬間移動』なしでどうやって丹羽から逃げるのか。考えても答えの出ない意味のない疑問。それらが新島の頭の中を占める。

そのせいで。

「……あ」惚けた声を出す新島は、気付くことが出来なかった。それを見るまで、気付けなかった。

『肉体強化』が発動されないまま。

丹羽が、校舎三階の高さから一直線にグラウンドへとたたき付けられた、その様子を。

「搜したよ。随分と搜したよ、君を。ミカさんを。ただ単純に、『ミエナイチカラ』を使いながら屋上に居ただけとは思わなかったよ、うん。ああ、大丈夫大丈夫。今、『ミカさんが何故見つからなかったのか』という疑問に対する答えがわかる能力』を発動したからさ。いやはや、やっぱり僕の場合は便利だね！。便利過ぎて嫌になっちゃうよ」

なんてことは、これっぽっちも思わないけどね。

そう言おうとした新聞部に対し、高柳は近寄ろうとしなかった。聞く耳も持たないと言った方が正しいのかもしれない。高柳は押し潰されていた。何の前フリもないまま、谷山皆瀬を軽く殺した新聞部に。先刻まで殴ろうとしていた。そのために新聞部に向かって駆け出したのだ。だが、高柳は恐怖を覚えた。そして、止まってしまった。

人を殺した後なのに、平然と笑う新聞部の異常性に、恐怖を覚えてしまった。

声にならない声を出しながら、高柳は泣き叫ぶ。髪をくしゃくし

やにしながら。その場にへたりこみ、何も考えたくないといったげなほど狂い、泣き叫ぶ。

「何に対して泣いているんだい、ミカさん」その様子を見ながら、新聞部はゆっくりと高柳に近付いていく。「沢山の人死んでいたから？ 目の前で、谷山さんの体が半分に分れたから？ それらのグロテスクな情景がトラウマになったから？ それらを引き起こした僕の近くに、閉じ込められたから？ それとも、僕と一緒に居られるのが嬉しいから、かな？」

ニヤニヤと口の端を歪ませながら、高柳の側に立つ。

「ふざけないでよ！」泣いていた高柳だったが、新聞部の言葉を聞くと突如いきり立ち、そして新聞部に詰め寄った。「何言ってるのよ、あんた何言ってるのよ！ 何言ってるの！ あんた、自分が何やってるのかわかってるの！ こんな、こんな……」

高柳が涙を流しながら力一杯吐き出した心のだけ。最後が言えず、徐々に声を失わせていく高柳に「やっぱり、ミカさんはいいいね」と言いながら、自分の学生服に食い込められた高柳の手をゆっくりと握る。即座に高柳は、「嫌っ！」と叫び、新聞部の手を払った。

「遠慮しなくてもいいんだよ、ミカさん」しかし新聞部は動じない。高柳との距離を縮め、もう一度高柳の手を握ろうとする。逃げようとした高柳だったが、視界の先は赤い『箱』の壁だった。つまりは、行き止まり。「遠慮する必要はないんだよ、ミカさん」

言つと新聞部は、「出して！ 出して！」と叫びながら壁を思い切り叩く高柳の手を出来るだけ優しく握り、高柳の顔を自分に向けた。高柳は逃げようとしたが、新聞部の力と赤い壁により、逃げる事が出来なかった。

「ハハ。ミカさんの手、柔らかいね」

「うるさい！ 離して！ 離してよ！ 気持ち悪いのよ、あんたの手なんて！」

「気持ち悪い？ 何でだい、ミカさん。生徒会で一緒に頑張ってきた仲じゃないか。ほら、思い出してみなよ。六月から始まった文化

祭準備。五月の生徒会活動。四月の生徒会選挙。……全部、一緒にやってきたじゃないか。笑いながらさ」

「……じゃあ、何で！」苦痛に顔を歪ませながら、高柳は新聞部に問い掛ける。「何でこんなことをしたの、新聞部！ あんた、そんな奴じゃなかったじゃん！ 真面目で、運動出来て、頼りがいがあるって、生徒会長で！ なのに、なのに！」

新聞部へ向け、叫ぶ高柳。それは処理出来ない感情を吐き出していた。先刻までは狩谷が居た。狩谷に慰めてもらい、そのおかげで少しだけがんばることが出来た。しかし、今、狩谷の姿を確認出来ない。この叫び声が届いているのか、狩谷は自分の姿が見えているのか、全くわからない。わからないが故に高柳は、自分の感情の暴走を新聞部に向けるしかなかった。高柳の頭の中に浮かぶ新聞部の過去の姿。ラジオ局に電話をかけたたりし、文化祭に協力してくれる人を血眼になって捜していたあの日々。その中心に居た新聞部の顔は、真面目で、堅物で、輝いていた。

なのに。

「何でって言われてもね」目の前に居る同一人物は、不気味に笑う。「ある朝目覚めたら、何でも出来る『能力』が僕のものになっていた。だったらさ、こうするしかないじゃん」

こうするしかない。

生徒と教師を皆殺しにし、日常をぶち壊すしかない。「知ってる、ミカさん。僕の能力さ、『高二病』って言うんだってさ。由来は多分中二病からきてるんだろうけど、僕はなんだかこの名前に親近感を覚えてね。ほら、僕自身高校二年生だし。それになにより、能力なのに病気ってというのが気に入ったんだよ」

新聞部は語る。高柳が力の限り両手を振り回し、「嫌！ 離して！」と泣きながら懇願している様子を無視して。高柳の泣き顔に自分の顔を近づけて恍惚の笑みを浮かべながら、尚も語る。「病つてことは、それにかかっている僕は患者なんだよ。おかしいよね。体に何の異常も見られないのに患者だなんて。全くもってお笑い草だよ。

なーんにも身に覚えがないのにも関わらず、患者呼ばわりだよ。病気持ちだよ。そう思うと同時にさ。このなんとも言えない感覚をさ、なんか、皆にも分けてやりたかったんだよ。よくわからないけど、そんな思い付きが僕の中に芽生えたんだ。気付いたら僕は考えていた。ベッドの上で、どうしたら面白くなるか。ただ単純に皆に分けてやる訳にはいかない。何人に分けるか。どんな状況で行うのか。どうしたら、一番面白いのか。そうやって考え始めたら、やっぱりさ、皆を殺すしかないよね。学校の皆を巻き込んでさ。二、三人に人を殺させてさ。僕と戦ってくれる人も『造り』出したかったつてもあつたね。僕は僕の欲求を完全に満たすため、満たし充たしミタシ切る為ただそれだけの為に、巻き込んだんだ」

笑いながら、未だに泣き叫ぶ高柳の様子を不審に思いながら、新聞部は首を傾げる。「え？ 何か間違ってるかな？」

「……っ！」高柳は悟った。目の前に居る新聞部は、自分の知っている新聞部じゃない。目の前にいる男は、もはや人間ではないと。「黙ってよ！」

気付くと高柳は自分の手を握る新聞部の手に噛み付いていた。無意識に行われた攻撃行動。噛まれた新聞部は、「痛い。痛いよミカさん」と言い、高柳の手から自分の手を離す。「何でだい、ミカさん。何で僕をそれ程までに拒絶するんだい。僕らは言うならば仲間だよ。同じ病を共有する者達だ。特にね、ミカさんには僕が考えたとおきの『能力』をあげたんだよ。『ミエナイチカラ』。無敵だよ、この能力。僕でもやられちゃうかも。まあでも今は発動さえ出来ないから関係ないんだけどねー」

「あんと同じだなんて、考えたくもない！」自分の危険性もろくに考えず、高柳は感情を爆発させる。「あんだ、有り得ないことしてるのよ！ いい加減気付きなさいよ！ こんなもの、とつとと無くして元通りにして元の新聞部に戻ってよ！」

「元通り？ うーん、元通りか……」言われて、新聞部は気付いた。確かに自分の能力ならば、今日あった出来事をなかつたことにし、

日常を取り戻すことが可能だ。だけれども、「うん。そっか。だったら、何回も皆を殺せるってことか」。いいねそれ。流石だよミカさん」

「なっ……」

高柳はもう一度、悟る。目の前の男には、話を通じないことを。

しかし、高柳はそこでこう考えた。自分は能力が使えず、新聞部は能力が使えるのに、新聞部は自分を一向に殺そうとしない。

もしかしたら。

新聞部は、自分を殺す気はないのではないか。

「もう、いい。黙ってて、新聞部」

そう言つと、高柳は無表情で赤い壁を叩き始めた。生徒会室で、何時の日か斉藤が言っていた言葉を思い出し、口に出す。「叩いて壊れない壁なんてない。何回も殴って壊れない壁なんてない」

「……斉藤さんがよく言つてたね。懐かしいなあ。今はないんだけど」

「っ！」新聞部の言葉の意味を探ろうとする自分を諫め、新聞部という存在を無視して一心不乱に壁を力の限り叩く。新聞部は高柳の様子などお構いなしに、「ねえミカさん。覚えてるかな。僕とミカさんが初めて会った日のこと」と語りかける。高柳は無視をし、壁を殴り続ける。しかし新聞部は高柳の無視さえも無視し、高柳の背中に向けて話し始めた。

「高校一年の四月の始めくらいだったっけ。どの部活に入るか決める用紙を持って職員室の前に立っていた僕に、ミカさんが話しかけてくれたんだよ。「あ、何あんた、もしかしてバスケット部に入る？」」

「っさ。覚えてる。一字一句間違えずに覚えてるよ、僕は。ミカさんは覚えてないかもしれないけど、僕はその時その瞬間、ミカさんと喋ったことを覚えてる。「いや、僕は新聞部に入るつもりだけど」

「アハハ。え、新聞部？ あそこ、今年は誰も入らないって噂だよ」「本当かいそれ」「うんうん。まあ断言は出来ないけどね。私が見た感じ、新聞部に入ろうって人はいなかったからさ」「新聞部に入

ろうとする人が居なかったって、どういう意味だい」「いやいや！。だつてさ。私、バスケットに入る奴勧誘しろって部活体験の時に先輩に言われてさ。ずっとこうやって、バスケット入るの？ って聞いているから」「え、もしかして、ずっと？」「まあね。やれって言われたらやるしかないじゃん」その後、ミカさんは僕にバスケットに入るように奨めたんだよ。正直嬉しかった。こんな人と一緒に部活動出来たら凄く楽しいのは間違いないって思ってた。でも僕は恥ずかしかつた。恥ずかしかつたんだよ。目の前でキラキラ目を輝かせながら僕を見るミカさんを見るのが、恥ずかしかつたんだよ。「いや。僕は新聞部に入るよ」 気付いたら僕はそう言ってた。ミカさんは驚いてた。そして、まだいっぱい人が居た中で大声で叫んだ。「あんた、もしかして中学校で新聞部新聞部呼ばれてたんじやないの！ だから私の誘いけつて新聞部に行こうとするんだよね そうなんですよこの新聞部ヤロウ！」 って。何時のまにか、僕のあだなは新聞部になっていた」

今でも覚えてる。

僕は、ミカさんに会ったおかげで新聞部になれたんだ。「生徒会選挙の時、ミカさんが立候補しているのを知って感激したよああ、この人と一緒に生徒会の仕事が出来るんだ、これ以上に嬉しいことはないってさ。本心から、思った」

そこまで聞くと。

高柳は壁を殴る手を止めて、無言になった。体を新聞部に向け、赤くなつた頬のまま真っ直ぐに新聞部を見る。「じゃあ、何で。何でこんなことしたのよ。楽しかった。私も、新聞部と一緒に生徒会の仕事出来て、楽しかった。楽しかった、のに」

「そんなの、決まってるじゃないか」笑みを少しだけ収め、少しだけ真剣な表情で新聞部は言う。「狩谷操の存在だよ」

「ミ、サオ？ 何だよ。ミサオは全く関係ないじゃん」

「……ミカさんは、狩谷操に好意を寄せているんだ」

「そ、そんなこと！ そんなこと、ない……」赤くなっていた頬を、

更に赤くさせて否定しようとする高柳。だが、その語尾はとても弱々しかった。

「……っざけんな」全く笑わず。怒りだけを表情に出し、新聞部は叫び出した。「ふざけんなふざけんなふざけんな！　なんでだい、なんで僕じゃなく狩谷操なんだ！　あんなの何の特徴もない駄目男じゃないか！　僕は、僕は、僕は！　あんな奴を認めない！　僕があんな奴より劣ってるなんて認めない！」

「うるさい！　何様よ、あんた！」新聞部の叫びを聞き、高柳も怒りをあらわにする。「まあさっきは私もびびったけど……でも、それでも！　ミサオのことを悪く言う資格なんて、あんたにはない！」

「……そう、かい。わかったよ」
高柳の必死の訴え。自分よりも狩谷操を上認めるといふ発言。何をしても、高柳の気持ちは自分に向かないということをし、新聞部は理解した。

理解し、それを拒絶しようとした。『高二病』というなんでも出来る能力を持つ新聞部が、右の掌をゆっくりと高柳の顔の前へと向け、そして。

7 (後書き)

大変長らくお待たせしました。本当にすみません。

高柳が新聞部の元へと走り寄って行った時、狩谷は一切の迷いなく行動していた。それは、則ち、高柳が新聞部に近付かないよう、高柳と同じ様に走ったのだ。忠告の意味を込め、新聞部が危険だということを高柳にわからせる為に。

そう。高柳は谷山の死によって混乱していたが、狩谷は全くといっていい程平常心を保っていた。知り合いが真つ二つになったのに、今まで話していた女子生徒が真つ二つになったのに。にも関わらず、狩谷は冷静に判断し、新聞部が高柳を狙っているというこの一点がどれだけ危ないものなのかを理解していた。

巨悪の根源である、何をするか予想がつかない新聞部という生徒会長。どんな能力を持っているかもわからない。少なくとも『飛行』が出来、『刃』のようなもので人体を一閃することが出来ることはわかる。けれども、何故新聞部が二つの能力を使えるのかがわからない。『瞬間移動』や、今さっき死んだ谷山の能力である『レーザ』が使えるのならはまだわかるのだが。

「あ」走りながら。思考しながら。新聞部に走り寄る高柳の背を視界の中心に置きながら、狩谷は気がついた。

谷山が死んだ。谷山という能力者が死んだ。

ということは、つまり、狩谷と高柳に谷山の能力が付加し、その副作用として、常人では立っていられない程の頭痛が二人を襲う。

新聞部の、目の前で。「近寄っちゃ駄目だ、ミカ！」

慌てて叫んだが、襲かった。しかし、それは谷山の能力が狩谷と高柳のものになり、それによって頭痛の症状があらわれた、ということではない。

「情熱的な近寄り方するね、ミカさん」
そう言う。

新聞部は、二つの能力を発動した。

『新聞部以外が発動する能力を全て無効にする』能力と、高柳と新聞部を閉じ込める赤い『箱』を。

「へ？」何の音もしなかった。狩谷は二人をずっと見ていたのに、見ながら二人に近付こうと走っていたのに、高柳と新聞部の姿が赤い『箱』の中に消えた。「み、ミカ」

呟くが返事はない。赤い『箱』に近寄り、触ってみるが、ガラスのような感触が掌を伝うだけで、状況は何も変わらない。

「ミカ、ミカっ！」叫ぶと、狩谷は能力を発動しようとした。『他人の心を読み取る』能力を。瞼を閉じ、能力を発動しようと身構える。

だが、しかし。

能力が発動出来ない。「……どうなって」

どうなってるんだよ！と狩谷は激昂をあげたかった。けれども、それすら叶わなかった。

狩谷の視界の先で 赤い『箱』せいで狩谷には見えていないが 谷山が死んだ。そしてそれと同時に、校門の前で川崎が丹羽によって殺された。

二人の能力者の死によって、二つの風が小さく巻き起こり、現在生き残っている能力者に能力が分配される。丹羽は、新聞部に操り人形と把握されている為、死者の能力は分配されない。

つまり。

操り人形である丹羽、当事者である新聞部を除き。高柳美香、霧島巧、新島春香、そして、狩谷操に新たな能力を使えるようにさせる。

その為に、狩谷に頭痛の症状が表れた。「うわああ！」

思わず叫び、赤い『箱』の前でうずくまる狩谷。二つの能力がほぼ同時に発現する、それ故に狩谷の元に訪れた激痛は尋常ではない程のものだった。自身がうずくまる程のそんな激痛に対して、顔色一つ変えずに敵と化してしまった丹羽と対峙したいじめられっ子の存在を、今の狩谷に知る由もない。

やがて激痛が止まった。直ぐさま狩谷は新たに自分のものとなった『レーザー』の能力を使い、赤い『箱』を壊そうとする。しかし、構えた狩谷の右手には光りすら灯らなかった。灯る予兆も何もなかった。

「ハア、ハア……」高柳が新聞部によって発動されたのである。赤い『箱』に閉じ込められ、流石に動揺していた狩谷も、徐々におかしいと気付き始める。荒ぐ息をゆっくりと整え、まずは冷静に状況判断に徹することにした。高柳を新聞部の元から取り戻す為に。焦ってはいけない。冷静に、冷静に。

「えーと。まず、僕は今能力を使えない」赤い『箱』を見ながら確認する。最初に自分が持っていた能力も、谷山の死によって自分のものになった能力もまるで使える気配がしない。これが自分の精神状態によるものなのか、または新聞部によって発動された何らかの能力によるものなのか。現時点では判断がつかない。

「それと」狩谷は真顔で呟く。「新聞部君の能力は、もしかしたら……」
その考えを口に出そうとしたが、寸手のところで止めた。有り得ない。もし本当に新聞部の能力が自分の想像する通りのものだった場合 対処する術がまるでない。

「……………」
狩谷は、考えていた。

もし、もしも、新聞部の能力が『なんでも出来る』能力だった場合。

今自分の持つ四つの能力では、歯がまるで立たないということ。有り得ないって。

「うん、有り得ない有り得ない」

狩谷にしては珍しく、物事を楽観的に考えて、思考を続ける。その判断が果たして、考えだしたら絶望しか目の前に生み出さない考えから逃げ出したい、という狩谷の本能からくる判断だったのかどうかは、当の本人でもわからない。

「っ」試しに一度、無作為に赤い『箱』を力いっぱい殴ってみた。ただ、痛みが生じるだけだった。

すると狩谷は周りを見渡した。目の前には赤い『箱』が一つ。それ以外には何も無い、という先入観のもとでの行動だったのだが、ここで狩谷は思わぬものを二つ見つけた。いや、それが果たしてもなのかどうかもわからない。そんな、二つの非日常が、浮かんでいた。

二つの白い光球。

それらが、赤い『箱』の周りをぐるぐると巡回していた。

「……………」再び無言になる狩谷。ほんの数秒考え、ある一つの見解にたどり着く。「これってもしかして、ミカ能力になる予定のものなんじゃ」

その考えに至り、狩谷はある程度間違いはないだろうと確信していた。先刻自分のものになった能力の数と同じ数である点、自分には目もくれず赤い『箱』を旋回し続ける点から判断したのだが、多分間違いじゃないだろうな、と狩谷は思う。

そう、確信した。

つまりは狩谷は、こう判断した。「ミカはまだ、生きている」

高柳の能力の材料のようなものがまだ高柳を求めているならば、その高柳はまだ死んでいない。死んでいたならば、能力になる予定のものが高柳を求めてさ迷う筈がないからだ。

というよりも、新聞部君はミカに危害を加えようとは思っていないんだらうな。

心の中で狩谷は呟く。自分のことには目もくれず、高柳のことを名前で呼んだ後赤い『箱』の中に閉じ込めた新聞部の真意はわからない。『箱』の中で何が起こっているのか予想がたたないが、これだけは言える。

「ミカはまだ生きてる。ミカはまだ頑張ってる」

だったら僕が諦める訳にはいかない。

口には出さずにしっかりと意思表示をすると、狩谷は「スー、ハ

「と深呼吸をし、そして右拳を握り、赤い『箱』へと攻撃の先を向けた。

赤い『箱』の中にいる高柳をどのようにして取り返すのか。

この最も重要である問題提起に、狩谷は二つの答えを導き出した。則ち、赤い『箱』自体を壊す方法と、実際には赤い『箱』が面していないであろう屋上の地面を壊す方法。前者ならば単純なイコイルで狩谷の目の前に高柳が現れる。後者ならば、高柳が四階のどこかに落ち、新聞部の近くから離れることが出来る。

赤い『箱』を壊すか。それとも、コンクリートで出来た地面を壊すか。能力が封じられた今、狩谷が持つ武器は自分の弱々しい拳しかない。

「……そんなの、簡単だよな」少しだけ苦しそうに顔を歪めながら、狩谷は言う。「物理的にコンクリートは壊せないから、赤い『箱』を壊すしか道はない」

要は、消去法。

片方が壊せないとわかっているのなら、少しでも壊せる可能性が残っている方に挑むしかない。

コンクリートの地面と赤い『箱』。

日常と非日常。

非日常をとことん嫌う狩谷は、しかし、この時だけ非日常の方を選んだのである。

斉藤伊里という少女が居た。何度も殴って壊れない壁などないという考えが彼女の持論だった。

そのことも、狩谷には知る由もない。「まずは、一回っ！」

拳が赤い『箱』に直撃する。瞬間、鈍い痛みが狩谷の体を通る。それでも狩谷は、「もう一回！」と言いながら拳を振り上げる。不格好な構えから繰り出されるその一撃は斉藤や霧島のものに比べたら脆弱なものだった。だが、狩谷は、わずかな可能性を信じて諦めない。

二回目の攻撃が『箱』に当たると狩谷が思った、その時その瞬間

だった。

「わっ」握り拳が空を切った。力いっぱい振り下ろした拳が空振ることにより、自然、狩谷の体のバランスが崩れ、狩谷が前へと行く。「箱」が、消えた？

じゃあ、ミカは？ ミカは一体どうなったの？

狩谷は前に倒れ尻餅をつきそうになりながらも、懸命に高柳の姿を探そうとした。脳裏に移るのは、先刻の涙を流した高柳の姿。もうミカのあんな顔は見たくない、ミカにあんな顔をさせるもんか、と意気込んでいた。

その時には。もう、既に。遅かった。「もう、もうもつもつもつさ。いいんだ」

両手が地面に付いた状態から尻餅をついた状態へと移行した狩谷が顔をあげると、そこには無表情で自分の左方向を見下ろす新聞部の冷たくも整った顔があった。

左を見た。

瞬時に、見なければよかった、と狩谷は思った。

そこには、高柳美香が居た。

空に顔を向けながら横になり。両手を神へ祈るように胸の上で組み。両目を閉じ、生気を失った表情をしている、高柳美香が居た。

「ミカ！ ミカ、ミカ！」

慌てて立ち上がり、新聞部のことなど目もくれずに高柳の元へと近寄る狩谷。狩谷が大勢を整えている間に高柳に二つの能力が宿ったことを狩谷にはもう知ることは出来ないが、そんなことはもう関係がなかった。

新聞部の目は高柳しか映していない。途中に入る邪魔な存在などはもうどうでもいい。高柳美香は、新聞部という一人の人間を拒絶した。「だから、もう、今のところはどうだっていいんだ。そう、どうだっていい。何が正しくて何が正しくないのか、何が悪くて何が悪くないのか、もう何もかもがどうでもいい。ミカさんも黙ってればいいんだ。そうだ、そうだよ、ミカさんはこのままでいいんだ

よ。そうすればそうしたらミカさんは、ミカさんのままで僕を拒絶せず、そしてそうして僕もミカさんを好きになれるんだから」

新聞部はある能力を高柳にかけた。

『操り人形』の能力を、少しだけ改変した能力。「このまま見てて、ミカさん。僕がこれからすることを見ていてよ」

「……新聞、部、君」いくら大声で呼んでも全く返事をしない高柳を絶望の表情で眺めながら、膝をついた状態で新聞部の方を一切向かず、狩谷は尋ねる。「新聞部君さ、ミカに何したの？ ねえ、新聞部君。お願いだ、お願いだよ。頼むからミカを、元に」

「ああ、君は誰かな。誰かわからないけどとりあえずこのついでに答えてあげるよ」新聞部は嫌悪感を示しながら、下に居る存在に話す。「元のミカさんに戻すのは、僕が満足した時だ。もうどうでもいいんだよ。今日の朝、『高二病』が僕のものになってからずっと考えてた。やりたいことは沢山あった。でも、僕は、この世界自体には未練がない。全くないんだね。ただ一人、ミカさんを除いてさ。だから僕は学校を充分にぶち壊した後、彼女と話そうと思ったんだよ。思って考えて行動して、その結果がつまりは結局こういうことなのさ」

僕はこの世界に対して完全に未練がなくなった。「だから僕は、今から世界を滅ぼそうと思うんだ。僕とミカさんだけ残して、ミカさんと一緒に……」

狩谷は思わず後ろを振り返った。この新聞部という存在は、本当に世界を滅ぼそうとしている。新聞部自身と高柳だけ残して世界を滅ぼそうとしている。

わかっていた、狩谷は。

新聞部には、それが出来る『能力』があるのだと。

狩谷が後ろを振り返った時、屋上という場に新聞部の姿はなかった。「う、嘘」と小さく漏らしながら、周りを見渡す。

「じゃあねさようなら僕とミカさんは元気になっていますから皆様さようならお元気で、とかなんとかさういふ儀礼的な挨拶すらもう面

「倒だー」

グラウンドの中央の上、屋上の高さよりも上空に、新聞部は居た。新聞部は右手を天にかざし、そして『世界崩壊』の能力を発動する。

大きな音と共に丹羽が地面に落ちた、というその光景を理解するのに時間を擁した。

「う、そ」目を見開く新島。口をポカンと開け、目の前で起きた現状に対して頭が働かない。「あ、あ、あきひろ」

試しに一人の人物の名前を呟いてみた。だが、何も起きない。何もわからない。新島の目に映るのは、砂煙り。大人が一人、上空から何の対策もなしに落ちたことによつと巻き上がった砂煙り。それが新島の視界を遮り、同時に丹羽が今現在どのような状況なのかをわからなくする。

砂煙りが徐々に晴れていくにつれ、初めは全く思考がついていかなかった新島の頭もゆっくりと危険信号を放ち始めた。新島が丹羽から離れ、丹羽が空中に居た時。新島は当初自分が初めに持っていた能力を使う手筈だった。何故かはわからないが、突然自分のものになった能力。それを使い、丹羽を攻撃する筈だった。けれどもその時、丹羽も『肉体強化』の能力を使っていた。なので本来ならば空中にいて丹羽が避けられない状態であつてもどれ程のダメージを与えられるかわからない。しかし、新島の能力ならば間違えなく丹羽にダメージを与えられる。その確信が不本意ながら新島にあつた為、新島は作戦決行を決断したのだ。

だが新島は、臆した。丹羽に対して攻撃するなど有り得ないと思つてしまった。目の前にいるのは、川崎を何の躊躇いもなく拳で排除した存在。新島は思い込もうとしたのだ。丹羽ではない、丹羽昭博という存在ではない、あれは、あの人は、自分を殺そうとし

ている人なのだと。無理にでも思い込もうとした。
最終的に。

新島は躊躇い、丹羽へ攻撃せずに逃げ続けることを選択した。だから逃げようとした。『瞬間移動』の能力を上手く使い、どうにかして丹羽の攻撃を避け続けよう、と決断した。

それなのに。

新島の知らないところで、新聞部が『新聞部以外が発動する能力を全て無効にする』能力を使ってしまった。

新島は『瞬間移動』の能力を使えなくなり、丹羽は無意識に発動されていた『肉体強化』の能力を封じられた。

この時。そう、この時。新島は横になり、丹羽が空中に浮かんでいるのを見ていた。丹羽は、空中に浮かんでいた。『肉体強化』によって通常ならば不可能な程の高さにまで跳んでいた丹羽が、『肉体強化』をしたまま地面に着地出来なくなったのだ。

砂煙りが完全に晴れようとしている。新島は、「昭博、昭博」と力のない声で呟きながら、それでも懸命にはよく前進をして丹羽の安否を確認しようとしたのだ。目が砂によって痛むのも気にしない。ただ、ただ。丹羽の元へ近付こうとしただけだった。

新島が丹羽の元へとたどり着いた時、砂煙りは晴れていた。

丹羽の下半身が、下半身ではなくなっていた。両足とも膝の部分から曲がっている。それこそ、直角に。その先は潰れていた。靴がはげ、かわりに赤で塗れた足の皮が見えていた。そうして丹羽は、横になる。顔を上空に向け、目を開けながら。意識はかろうじてある。呼吸音が聞こえる。あんな高さから落ちたのにも関わらず、だ。「な、ああ」その惨状を見て、新島は嗚咽を漏らす。何、これ。何なの、これ。嗚咽を漏らしながら、両目から静かに流れる涙の存在を肌で感じながら、丹羽に近づき、丹羽の顔を眺めた。何も捉えていないであろう黒目。何も捉えていないが故に、体の半分が故障した為に、新島に攻撃しようとはしない。だがその代わりに、新島が涙を流しながらいくら問い掛けても、返事をせずに黙っていた。何

も話さない操り人形と化した丹羽の姿を見て。その悲惨な様子を見て。新島は丹羽の体に抱き着く。

「なんで」胸に丹羽の顔を埋めながら、新島は涙を流して呟く。つらつらと、つらつらと。「なん、で、私達がこんな目にあわなきやいけないの。ヒグツ、だ、だって私達、何も悪いことしてない！だのに、だのに、なんでこんな目に合わなきやいけないのっ！ヤダ、ヤダよう……昭博、昭博、ヤダよう、ヤダ！」

一人が一人に抱き着いていると、やがて『世界崩壊』が訪れる。新聞部が丹羽と新島の上部に浮かび、能力を発動し始めた。全てを終わりにする、能力を。

ゴゴゴゴゴ、と凄まじい音が上空から聞こえてくる。丹羽を抱きしめていた新島は少しだけ上に顔をあげ、一時は驚いたが、少し経つと視線を丹羽に戻した。もう何も考えたくない。だからもう私と昭博に干渉しないで。

そう、思っていたのに。

『聞こえますか。誰でもいいです。返事をしてください』
頭の中に、直接、声が響いた。

「そうだよ。もういいんだ。僕には何も無い。この世界に未練と呼べるようなそんなものはまるでない。だからいいんだ。ハハ、あー。うん、ま、そんな所な訳ですよ皆さん。でもですね。世界崩壊まで、少しの間だけ時間があります。だからその間、僕の僕による僕の為のたわいのない話をさせてください」

グラウンドの中央より上にあがった所。学校の屋上よりも上の上空。完全なる空中で、誰彼問わず新聞部は話しかける。その表情には、高柳に拒絶され幻滅していた先ほどのような暗い感情は浮かんでいない。今、新聞部の顔に浮かんでいるのは、喜怒哀楽の内の最初と最後の感情だった。

世界が崩壊するから、喜んでいい。という訳ではない。ただ単純に、高柳と自分を世界に残せるから、喜んでいい。

世界が崩壊するのが、楽しい。という訳でもない。ただ、ただ単純に。二人切りになった世界で、高柳が徐々に自分に心を預けていく様子を想像し妄想し、楽しんでいい。

最後の最後に自分の街くらいは観察しても罰はあたらぬ、と考えた新聞部は、学校全体を囲んでいた『新聞部以外が発動する能力を全て無効にする壁』を解除し、なるべく高くあがろうとした。結果、今、新聞部は学校だけではなく街並みが見えている。人、人、人。平日の朝にも関わらず、ここまで街並みの中にうごめく人という大群。新聞部はそれを見下ろして、「人がゴミのようだ、とかこういう時に使う名言なのかな。どこで聞いたのかどこの誰が使ったのか一切合切わかんないんだけどねー」と明るく笑う。

「アハハ、アハハハハハハハハハ！ あー、なんでだろ、今なんか物凄く楽しいよ、僕さあ！ なんてだろうなあ、よくわからないなあ、ミカさんと僕の理想郷が目前だからかそれともこのいっぱいの人や建物とかを一掃出来るからかなあ。わっけがわっかんないなあ、ねえ！」叫び、歓喜し、右の掌を広げながら天に掲げて、能力をとうとう発動してしまう。

『世界崩壊』の能力を、とうとう発動してしまった。「へー、そうかいそうかいそうなるのか。どうやって世界崩壊するかのイメージがいまいち沸かなかつたからテキストだったんだけど、まあいいんじゃないかな」

こんな世界崩壊も、ありだと思おう。

言いながら新聞部は、自身が作り出した世界崩壊を具現化させる『世界崩壊』の能力の全貌を確認する。

それは、刃で構成された竜巻だった。目に見える竜巻と表現していいのかもしれない。谷山の命を消した、あの刃。それが、それが、形を固定させないまま旋回し続ける。初めは小さな塊だった『世界崩壊』も、時間が経つにつれて少しずつ大きくなり始めた。へ

「へーどうやら世界崩壊出来るまで時間がかかるっぽいね、じゃあ僕はそれまで下の人達に攻撃されないんだろつかどうなんだろつかどうなんだろかね」と新聞部は思考の端で微かに考えたが、すぐさまその考えは意味のないものとして処理された。「だって、今の僕は『完全瞬間自動回復』出来る『不死身』のニンゲンだからね」

齊藤の死に際の攻撃。

霧島と齊藤の作戦は成功していた。齊藤の決死の攻撃は確かに当たっており、それによって新聞部も気を失う寸前の状態にまで持たされたのだ。けれども、新聞部は気を失ったりはしなかった。齊藤の攻撃が当たるとすぐに、『完全瞬間自動回復』の能力により、ダメージを受ける前の状態へと戻ったのだ。

そうして。予想外の能力により、齊藤は死に追いやられ、霧島の精神は破綻した。

全ては、『高二病』と呼ばれる新聞部の能力により世界は崩壊へと導かれる。『高二病』の能力の使い手として君臨する新聞部という男子生徒は、こうして笑っている。霧島巧は戦闘不能。狩谷操など問題外。その他の能力者 新島春香と丹羽昭博に対しては、何の感情も抱いていない。「……そういえば、ミカさん以外に四人、能力者が残っちゃってるってことなのか」。狩谷操については、まあ、『世界崩壊』が発動し切る前に僕直々に殺しに行ってもいいんだけどね」

それはとにかく、とにもかくにもとにかくさ。「今、僕は凄くキブンガイインダ」

予め、『世界崩壊』に自分と高柳美香は含まないことをプロگرامしてある。つまりは、例え今自分にかけている二つの能力の内いずれかが解除されたとしても、自分は『世界崩壊』に巻き込まれない。つまり、もう『世界崩壊』を止める術はないのだ。

能力には、優劣がある。

『盾』が『弾』を防いだように。

『ミエナイチカラ』が『レーザー』を防いだように。

一言で能力といいくるめても、それぞれの能力の性質上必ず優劣が出来上がる。強さと弱さのピクアップ。それこそが、新聞部の生み出した能力の本質だった。「そして、『世界崩壊』は二番目に強い位置に設定したんだね、これがさ。あ、勿論一番目は『ミエナイチカラ』さ。ミカさんに死んでもらったら困るからね！。無意識下だったら自動的に発動されるようプログラムして、それで僕は沢山の輩かミカさんを守ってやったんだ。言うならば僕がキングでミカさんがクイーンで、後の皆はポーンレベルなんだよ。ポーンがどうあがいたらキングに勝てるんだい、ポーンがどうあがいたらキングの側からクイーンを助けられるんだい？ あ、手駒に出来るのは将棋の方だけだっけ？ まあいいや、どうでも」

そろそろかな、と笑いながら新聞部はかざした掌の上を眺める。既に『世界崩壊』は天高くまでのぼっており、縦の端が見えなくなっている。横にも広がっていき、『世界崩壊』に突っ込んだ飛行機が切り刻まれるのを新聞部は見た。細胞レベルまで切り刻まれた飛行機は、塵も液体も何も残さなかった。一瞬にして存在を消した。何の余韻も残さないまま。

「圧巻だね、圧巻だよこれは」依然微笑む新聞部。ゆっくりと右の掌を下におろすと、『世界崩壊』が下にも拡がり始めた。世界崩壊までどれだけの時間が残されているのか。それに対する答えは新聞部さえも持ち合わせていない。

やがて、うごめく人達が上空で起こっている異常事態に気が付き始めた。少しずつだが学校に近づく人の姿も見える。あー『壁』無くしちゃったから入り放題だー、と軽く考え、新聞部はそれら全ての動きを完全に無視する。もう、誰にもどうしようもない。『世界崩壊』は必ず発動しきり、世界崩壊は必ず起こる。これは確約された事象であり、揺るぎようのない一つの未来だった。

しかし　だが　けれども。

「うわあああ！　うわあああ！」　「許さない許さない許さない！」

「ふっざけんなよ新聞部ゴリア！」

「な、なんだいこれ、なんなんだいこれ」新聞部が驚くのもつかの間。三人の声が学校から発せられた。「だ、誰、って、えええ！」

三人の声を尻目に、新聞部は屋上が崩れたのが見えた。そう。高柳が眠ったような状態で自分を待っている屋上が、崩れたのだ。「何が、一体全体何が起こってるんだい！」

「……………」「うるさい。黙って」「ウルセーってんだよ」高柳のことが心配だった。

けれど。それ以上に、三人の存在が新聞部に恐怖を与える。

「……………」と狩谷操。

「あんたのせいなんだよね、昭博がこんなにされたの」と新島春香。「散々俺を馬鹿にしたのはどうでもいい。けどな、お前はあいつを殺した、殺したんだよ！」と霧島巧。

三人は三人それぞれ自分に敵意と復讐心と、それから一端の殺意を向ける。新聞部には何がどうなっているのかわからない。この三人は確かにさっきまで戦意喪失していた筈だ。それなのに、何故、今になってこのような視線を向けながら自分と敵対するのかかわからない。

そして。

三人は、新聞部に向けて叫んだ。

「…………反論は」「許さない！」「とつとと黙れ、新聞部！」

「ミカ！ ミカ！」叫びながら、狩谷は高柳と自分以外誰も居ない屋上に膝をつける。目の前には瞳を見せることもせず横たわる高柳の姿。誰も助けが来ないであろうその状態で、狩谷は混乱する頭を必死に制御しつつ、この場に対する打開策を導き出そうとしていた。神へと祈るかのように両手を胸の上で握る高柳。

その前方斜め横の空中で、新聞部がこちらには目もくれずに何かをしている。狩谷は、最初、それが何かわからなかった。理解することが出来なかった。小さい竜巻、だが、視界に捉えることが出来るというこの世の法則と矛盾する竜巻。それが宙に浮かぶ新聞部の頭上に展開され、徐々に、徐々に広がっている。

「……………」二つの驚愕の事態に、何をすべきなのか判断がつかなかった狩谷は屋上の端に備えられている金属のフェンスを、ぼうつと眺めていたが、「ああっ！」と何とか我を取り戻し、頭を下方へと向ける。

そこには、高柳が居た。

「…………ミカ！」改めてその事実を直視すると瞬時に、狩谷は高柳に呼び掛ける。「起きて、起きてくれよ！ このままじゃマズイって！ 僕だけじゃ、僕だけじゃあ、僕には、何も、出来ないっ！ 出来ない、からあ！」

本当は、出来る。何かをかいわんやとまではいいないが、何をすべきかまではわからないが、それでも、何かをすることは出来る。

例えば、新たに自分の能力となった『レーザー』を新聞部、もしくはあの竜巻へと発動する。例えば、『瞬間移動』を使い新聞部の近くへと移動し、何らかの攻撃を加える。前者も後者も完全なる現状打破とまではいかないだろうが、それでも、少しくらいは新聞部が何かをやり切るまでの時間を稼ぐことは可能だ、と狩谷は一瞬で思考していた。

だが、狩谷は言う。「僕だけじゃ何も出来ない」と、高柳へと言う。自分が困った時、いつも自分の側に居てくれた彼女。その逆もあった。その中に霧島が居たこともあった。彼ら彼女は助け合い、助け合うことを絆の代わりに行っていた節もあったのかもしれない。

「ミカ！」

故に、叫んだ。狩谷は叫ぶ。彼女の名を。と同時に、彼女をどうすれば元通りにすることが可能なかを考える。ただでは凹まない。狩谷操という少年は、非日常をとことんまで拒絶しようとする少年は、日常に一刻も早く戻る為、非日常へと行ってしまいそうな少女を引きずり戻そうとした。

ミカの体を揺らしても、ミカは起きない。でも息はある。脈もある。ということは、気絶してるとっていうことなのかもしれない。いや、でも、これは新聞部君の能力によるものだ。そして新聞部君は、その能力を谷山さんや三嶋君にかけた能力の改造版だとかそんなことを言っていた、ような気がする。

「ミカ！ 起きてよ、ねえ……」言いながら、狩谷は着々と高柳の状態を把握する。自分の叫び声は、恐らく新聞部には聞こえていないのだろう。距離の問題もあったが、それ以前に竜巻からゴゴゴゴと大きな音が発せられている。

だから。

狩谷の叫び声は聞こえておらず、狩谷が高柳の状態を把握しようとしていることも悟られず、更には 狩谷がある一つの行動に移そうとしていることも、新聞部はわからない。

「……………」叫んでいたのを一瞬止め、冷静になった状態で能力を使用する。

ミカにかけられている能力が谷山さんや三嶋君を操っていたものと似ている能力なら、ミカの意識は途切れていなくて、僕の能力で意思疎通くらいは出来るかもしれない。

そうして、狩谷は。

谷山の攻撃を避ける為に使用した『心を読み取る能力』を、高柳

に使った。

『ギャンギャンうるさいっての。犬かあんたは』

一秒も経たずに、狩谷の頭の中に高柳の声が響いてきた。狩谷の表情に光りが灯る。彼女に会う度に言われているような気がするその憎まれ口も、今だけは心地良い。「う、うるさいって言わないでくれよ、ミ、ミカ」

『あれ？　なんか今あんた、私と会話しなかった？』

「うん、うん。聞こえてるよ、ミカの声」

やっぱりミカは、意識を閉じてはいなかった。

その事実にはっとし、狩谷は全く表情を変えない高柳と、口頭と心中で会話をする。「僕の能力だ。『心の声を読み取る能力』。それで、ミカの声を聞くことが出来たんだ」

『……へえ。あんたの能力ってそんなだったんだ。へー』

「へー、って何だよ。なんかミカ、やる気なくなってるじゃない？」

『そりゃあんた、どうでもよくなるでしょ、こんな状態になったらあ、と依然目を開けないミカがため息をついたように狩谷には見えた。』だってさ、私、この通り何にも出来ないのよ。やれることといったら、こういう風に頭の中で何かを呟くことと、能力を発動することだけ』

「え、能力発動出来るの？」

『うん。まあねー。出来るっばいよー、うん』

「……だったら、何で」本気でやる気がなくなっている様子の高柳に対し、非日常から脱しようとしないう高柳に対し、憤りを感じてしまう。「何で、何かしようとか思わないんだよ！」

『あんたがそれを言うか！』

「ええっ！」勢いで叫んだ狩谷だったが、その勢いも高柳の怒声により途切れてしまった。「そ、それってどういう」

『どういうもこういうもあるか！　なあにが、僕は何も出来ない』

から助けて」よ！ ざけんじやないわよミサオ！」

頭の中では怒っているが、実際の表情には何も変化はない。けれども、そんなことはお構い無しに、高柳は頭の中で叫ぶ。「私だけに助けを求めてどうすんの、自分が何も出来ないとか勝手に決めてどうするの！ 二人でやればいいじゃない、二人でやればいいじゃない！」

「で、でも、さっきミカはやる気も出ないし何も出来ないって」

「はんつ。何言ってるのよミサオ。あんた正気？」高柳は、尚も叫ぶ。「私のやる気が尽きることなんてありえない、私は今、猛烈にはらわたが煮え繰り返ってるのよ！ 私達をこんな目にあわした新聞部に、そして、あんたにっ！」

「僕にっ……」

「そう、あんたよミサオ！ あんたが何も出来ない訳ないでしょうが！ 私を助けてくれて、私は、私は……ああああ、もう！」

とにかく、わかったわね。「私は今、動けない。だったら、あんたが新聞部を止めるしかないじゃないのよ」

「……………」狩谷は、今の今まで頭を響かせていた声を思い出しながら、高柳を見る。一指も動かさないであろう彼女。それでも、自分を叱ってくれた彼女。

「ありがとう、ミカ」

彼女の存在に感謝して、狩谷は新聞部を打破しようと立ち上がる。「おうよ！ こんな私でも手伝えることがあったら言って！」目は開けられない。だから、今、狩谷がどんな状況にいるのかわからない。そんな極限状態の中でも、高柳美香という少女は狩谷を少しでも勇気付けようとした。

「あれ？ ミサオ。あんたさっき、喋った？」と、心の中で思いながら。

その質問に、狩谷はこう答える。「ううん、喋ってない。能力を使ったから」

狩谷は現在、四つの能力を持っている。

最初に自分のものになった、『心を読み取る能力』。

三嶋勇気のものであった、『瞬間移動』

谷山皆瀬のものであった、『レーザー』。

そして、もう一つの能力。狩谷には、これが誰の能力だったのか知る術はない。

その能力。

丹羽に殺された、川崎直美の能力 『二つ以上の能力を同時に使える能力』を。

『多分新聞部君は、僕達に能力を分けるとき、二つ以上の能力を同時に使えないように制限をかけたんだ。だから僕は、今までこんなことを思いつかなかったし、こんなことをしようなんて思おうともしなかった。ミカにミエナイチカラを与えたのもこの制限があったからだと思う。ミエナイチカラは無敵だけど、それだけしか使えないなら暴力しか攻撃手段がない』

でも、出来た。

こうして僕は、『心を読み取る能力』と『瞬間移動』の二つの能力を同時に使うことが出来た。「これなら、なんとかなるかもしれない」

狩谷の発言に、高柳は何の反応もしなかった。ただ、『……うん』としか、思わなかった。

川崎が所持していたのは、『二つ以上の能力を同時に使える能力』というものであった。だから川崎は、一つか二つしか能力を持っていなかった川崎は、自分の能力が意味のないものだと呼びかけたのだ。

そして川崎は死に、『二つ以上の能力を同時に使える能力』が狩谷達の手に渡った。

二つ以上の能力を同時に使うことが出来るならば。

合わせ技も、出来る。

非日常の扱いに長ける少年はその結論へとたどり着くと、直ぐさま自分が今持つ能力の組み合わせで何が出来るかを考え始めた。

『心を読み取る能力』と『レーザー』の組み合わせでは、何が起

こるかわからない。

『瞬間移動』と『レーザー』を合わせれば、掌を射出台にすることなく攻撃を敵に向けることができる。

『心を読み取る能力』と『瞬間移動』を組み合わせれば 自分の心を自分で読み取り、その心情を離れた場所にいる誰かに大声を出すこともなく、かつ新聞部に見つかることもなく、瞬間移動させることができる。

狩谷は新聞部がいる屋上より上には広げずに、『心を読み取る能力』の適用範囲を学校全体に広げた。と、同時に、今現在、学校という空間で何人生き残っているかを確認する。

ざっと、六十人ないし七十人。校舎の中で生き残っている人が少しだけでも居た。その事実を知りつつも、どうでもいいといったげに狩谷は、『二つ以上の能力を同時に使える能力』を含めた三つの能力を同様に発動する。

『聞こえますか。誰でもいいです。返事をしてください』

『お』 『おい』 『……』 『なによこれ』 『なんか声が聞こえる』
『なんだ、これは』 『皆死んじまった、伊里だけじゃない……』 『……』 『誰の声だ』 『……狩谷、か？ 狩谷だよなこの声』 『うるさい！……』

その言葉に反応を返した者は多かった。生きていてはいるものの、重度の怪我やショック症状などで意識を失っている者はいる。しかし、それでも四十人くらいはいる。

すると狩谷は、その四十人くらいの声を、判別し始めた。四十人という人間の声を、狩谷は無表情で聞き取り聞き分け、判別する。狩谷のことを知っている同級生も少なからずいた。一年生もいれば、三年生もいる。その中で、新聞部を打破することに使えるような自分のような、能力を持つ者を判別する。

結論は、「わからないよこんなの」だった。「というか、四十人

の声を完全になんて聞き分けられない」

だったら。

狩谷は瞬時に頭を切り替え、頭の中でこう思い、発信した。
『能力を持つてる人は、自分の能力を一つだけでもいいので思ってください』

何故頭の中に自分とは別人の声が響くのかわかっていない人物達に、狩谷は依然無表情で問い掛ける。

狩谷はこう考えた。「どう考えても僕の言ってることがわからない人から順に、発信を途切れさせればいい」

『はあ？ 意味わか』 『能力つてな』 『なに馬鹿な』 『頭いかれ』
『訳わか』 『ふざけな』 『大丈夫、あなた』 『し、知らな』 ……。

一気に二十人。

候補が、減る。それから狩谷は待った。能力者が自分の能力について吐露することを、待った。無視は出来ない筈だ。例え絶望のふちに立っていたとしても、能力などという不可思議な単語に反応しない訳がない。

十三人が、候補から消える。その頃には残り人数を数えられる程度になつていた。

残り、五人。

『能力？ 能力、能力ねえ。能力能力能力……俺みたいに、いかれ
てんだろ、お前』 残り、四人。

『う、ううううううう、ううう、し、しし、しら、知らない』 残り、三人。

『……すまない。散々考えたが、わからない』 残り、二人。

残り二人。

残りの、二人。

狩谷の『心を読み取る能力』は、人が何処にいるかはわかるが、その人がどんな人なのかを知ることが出来ない。その人が今どんな態勢をしているかに対しての、おぼろげなシルエットしか捉えることが出来ない。

その二人は、別々の場所に居た。

『昭博が、昭博が』と、グラウンドの中央付近で何かに寄り掛かっている人物。狩谷の頭の中に響く声の高さから、多分女子かな、と判断する。その女子はどうやら錯乱しているらしい。狩谷はその女子にもう一度発信するのを後回しにすることを決め、もう一人の人物と意思疎通することを試みる。

その人物は校舎の一階の職員室に居た。グラウンドが見える窓にへばりつき、握り拳を何回も何回も窓に振り下ろしている。

『皆死んじまつてる。新聞部の奴が言ってたのは嘘じゃなかった。

先生だけじゃ、い、伊里だけじゃ、皆、皆、死んでる』

最初は誰の声かわからなかった。弱々しく、頼りなく、死の塊にただただ絶望しているだけの声。

『……まさか』だが、こうして一人だけに集中して聞き取るうとしたことにより、その人物が誰なのかを悟る。『霧島君？ 霧島君だよね！ ねえ！』

『み、ミサオ、か？』自分の名を呼ぶ声に、ようやくその人物

霧島巧は反応する。『なんだこれ。ミサオが周りに居ないのにミサオの声がするぞ』

狩谷はその声に安心感を覚えた。正直、霧島君は死んでしまった、と思っていた。もし霧島君が生きているのなら、新聞君を放置する筈がないから。『霧島君……もしかして、何かあったの？』

『……ああ。目の前で、友人が死んだ』その声は、絶望のふちに立っている者の声だった。『何も、出来なかった。訳わかんねえ能力が俺にはあつてあいつにはなかったのに、能力がある俺だけ生き残った。職員室の前でもグラウンドにも死んでる奴らがいる。なのに俺だけ、能力を持つてる俺だけが！ のうのうと生きてやがる！』

『……霧島君』その叫びを聞き、狩谷はこう思った。何の配慮もなく。しかし、はつきりと。『どうでもいいんじゃないかな、そんなことは』と思った。

『な……。ど、どうでもいいわけねーだろ！ 死んでるんだぜ、こ

んな、こんなに……こんなに!」

『新聞部君に生き返らせてもらえばいい』ゆつくりと、はっきりと。霧島の思考が止まったことも確認しながら、狩谷は狩谷が思い描く最後の手段について、話した。『霧島君は、能力を持ってるんだよね。しかも、新聞部君のことまで知っている。だったら答えは簡単だよ。新聞部君に、今日のことをなかつたことにさせればいい』

初めは思いがけない提案に驚くだけだった霧島も、『……そ、そうか、そうか、そうか、そうか!』と声を明るくする。『そうか、そうか! 新聞部に……伊里を……皆を、生き返らせればいいのか!』

『うん』
『そうだな! そうだな! ……よし、よしよしよしよし!』
俄然活力湧いてきたぜ、ミサオ!』続けて霧島は、こう言う。『もうダメかと思ってた。おしまいだとか、思ってた。でもまさか、ミサオが助けしてくれるなんてよお! ありがとな……ありがとな。これで俺は、皆を助けられる! やれるやれるやれるやってやる!』
いつでもいいからよ! 何か考えがあるんだろ! 俺ならいつでも準備万端だ!

狩谷が『じゃあ、待ってて霧島君。他の人とも話す。タイミングが来たら僕から連絡するから。次に僕の声が聞こえたら、すぐにグラウンドの中央に瞬間移動して』と言うと、霧島はこう答えた。最初の様子には驚愕したが、少し、ホツとする。

続いて狩谷は、もう一人の候補である新島春香という同級生とも同様に話しをつけた。話しをつけると同時に、彼女の能力についての詳細を聞くことにも成功する。どうやら新島春香という女生徒が持つ能力はこの場において重要な役割をもちそうだ。

後は。

そう、後は。「新聞部君を止めるだけだ」

今もなお宙に浮かぶ新聞部の姿を一瞥する。狩谷はそうして、ため息をひとつつき、決意を固めた。

狩谷の頭の中には今、どのようにして新聞部を止めるかに対しての

問題提起が渦巻いている。『何でも出来る』能力を有し、更には頭上に展開している理解不能な竜巻も何とかしないといけない。その為にはどうすればいいのか、何をどのようになれば元の日常に戻れるのか。ありとあらゆる方法を考えては消し、そしてまた考え出す。消し、考え、消し、考える。

「……無理じゃないかな、これ」だが、やはりというべきなのかどうなのか。「僕と霧島君と新島さんの能力じゃ、出来てもあの竜巻を消すことくらいしか出来ない」

そう呟くと、狩谷は再度ため息をついた。絶望ともとれるこの状況下で果たして自分はどうすればいいのか。わからない、わかる筈がないのかもしれない。

答えのない問題にぶちあたったような感覚。

それが狩谷を包み、離れない。

『……………』

『……………ん？ 手詰まり？』狩谷が能力を使ったとわかると、直ぐさま高柳が心の中で呟く。

『……………うん。もしかすると』

『もしかしなくてもそうなんじゃない？ 新聞部の奴、何でも出来るんでしょ？ 霧島とか、その、新島さんって人がどんなの持っているかは知らないけど、どんな能力があっても新聞部には敵わないんじゃないの』

『そうなのかな』

『うん』高柳は動かない。微動だにしないまま、二の句を告げる。

『今のままだったらね』

『え？ 何を言って……………』

言われて狩谷は、はっ、と思いつく。自分が最初に考えついた方法。今までに考えついた方法の中でも、何でも出来る新聞部に対して一番有効的な方法。

それだ。

絶対に使ってはいけない方法。『決まってるじゃん。私が死ねば

いいんだよ』

「なっ……」その返事に驚き、思わず狩谷は口に出す。

確かにそうなのだ。そうすれば、新聞部を倒せる可能性は格段に上がる。否、そうしなければ新聞部は倒せないと言っても過言ではない。

新聞部は言っていた。「ミエナイチカラは無敵だよ」と。

それ則ち、新聞部に対しても無敵であるということと同意になる。

「駄目だ！ 駄目だよミカ！ 何言ってるの！」

「はいはいうるさいよミサオ。口に出ちゃってる口に」

「っ！」指摘されて気付いた狩谷が能力を使う。「そんな、何言ってるんだよ。新聞部君を倒す為にミカが死ぬって、そんな、有り得ないよ」

「でもさ。わかってるんでしょ、ミサオなら」尚も無表情のまま。

けれども狩谷には、高柳が無理矢理笑っているように見えた。「私の能力と他の能力を合わせて使えば、新聞部をなんとか出来る」

「でも……それでも、それしか方法が無いとしても、何もミカが死ぬ必要はないじゃないか」苦悶の表情のまま、高柳の握られた両手をその上から握る。「それに、ミカは自分では死ねない。動けないから。いや、例え動けたとしても、僕が止める。ミカが死ぬなんて有り得ない」

「……ねえ、覚えてる？ 私が、ミサオに助けてもらった時のこと」

「いきなり何だよ」

「覚えてるっ？」

それはまるで遺言のように。

静かに、つらつらと、頭の中で紡ぎだす。「どうせあなたはテストの時とか宿題提出の時とかだと思ってるかもしれないけど、違いのよ。ねえ、覚えてるかな。私ね、ストーカーに付き纏われてたのよ。ちよつど仮入部した時だったっけ。夜な夜な付き纏われて、それがずっと続いてね。怖かった」

でもね。

あんたが助けてくれたのよ。

学校では見たこともないような、真剣な表情で。『覚えてるかな。覚えてたら、嬉しいんだけど』

『……覚えてる。覚えてるよ。忘れる訳がない』

忘れる訳がない。夜道をランニングしていたら、少しだけ気にかけている女子生徒がいた。その女子生徒の後ろに、黒い合羽を全身に羽織りフードを被り、誰だかわからないように扮装している人物が電柱の陰にいた。そして、勇気を振り絞って、大声を出したのだ。『それで、私は引越した。あんたの家の近くに。私は、あの時から。いや、もしかしたらもっと前からなのかもしれないけど』一気に入何の躊躇もなく、高柳は心の中で呟く。『ミサオ。あんたのことが好きだった』

ねえ。ちよつとだけ私から離れてくれない？

突然の告白に頭が真っ白になった。

だから狩谷は、何も考えずに高柳の両手から手を離し、高柳の側から離れた。何も考えられなかった。狩谷の視線は高柳から離れない。

気付くべきだった。

この場この時に気付いていれば、高柳の行動を防げたのかもしれないのに。

『はー。やっと言えた。こんな時になって、しかも頭の中でしか言えないなんて。私もバカだよな』高柳は能力を使い始めた。その能力は発動から使用までに三秒かかる。故に高柳の握られた両手には白い光りが灯りだし、音を響かせ始めた。

『レーザー』の能力。

高柳の両手は今、下を向いている。『怖いけど……ミサオが私を生き返らしてくれるもん。だから、怖くない。今までありがとう。またね』

「あ、あ、駄目だっ」

狩谷が気付いた時には遅かった。三秒が経ち、レーザーは屋上から校舎一階までを貫き、その間にあった高柳の体も貫かれた。狩谷が高柳の最期に聞いてしまったのは。

無表情のまま痛みに悶える、高柳の断末魔だった。

「み、みか、ミカが！」

混乱した狩谷は、そのまま『ああああ！』という感情を能力にのせて発信した。適用範囲は以前と同様に新聞部以外の生存する生徒全員。多くの生徒はそれが何の叫びなのかわからなかったが、二人の生徒だけ、それを何らかの作戦決行の合図だと認識した。同時に狩谷の目の前にあった高柳の死体が生み出された風に乗って消え去り、浮遊する白い球を三つだし、飛び散る。かつて高柳が横たわっていた場所には血も何も残らず、ただ、円形の穴だけが象られていた。

頭の中に痛みがほとばしる。

心中で叫んだ狩谷だったが、渦巻く思考の端で微かに覚えていたのだろう。ほとんど無意識のまま『瞬間移動』を使い、二人の生徒と共にグラウンドの中心へと集まる。

「うわあああ！ うわあああ！」

ミカが死んだ。ミカが死んじゃった。

最初はそう思い、歎き叫んでいた。だが、いつの間にか自分の右隣と左隣に居た二人の生徒の姿を見て、思い出す。

そうだ。

新聞部君を倒せば、ミカを生き返らせることが出来る。

「……………」沈黙のまま決意を固めた狩谷は、そして頭を上げて新聞部へと叫ぶ。「……………反論は聞かない。ミカを生き返らせてくれ」

「聞こえますか。誰でもいいです。返事をしてください」

その声が高柳の頭の中に響いた時、何故頭の中から自分とは別の

声がするのか疑問を少しだけ持ったが、直ぐさま無視をすることにした。目の前には下半身が血で濡れる丹羽の姿。何も言わず何もしようと思わず、新島を見るその目には生気がない。大怪我をしているにも関わらず、悲鳴をあげようとも全くしていなかった。

「……誰だかわからないけど、それどころじゃないから。昭博、昭博」腹やら胸やらを下にした状態で。口の中からは血が出ている。新島自身も無事ではないその状況で、新島の目は何も反応しない丹羽にだけ向けられる。「昭博」

実はもう、死んでたりしないよね。

思い付いたその最悪な冗談を、首を横にぶんぶんと振って打ち消す。何を言っているのだ、自分は。例え冗談だったとしてもそんな展開は冗談じゃない。

昭博が死ぬなんて。「そんなのって無いよお……」

「能力を持つている人は、何でもいいので能力を一つ思ってください」

すると、新島の頭の中にまた知らない人の声が響いた。柔らかいけれど、緊張感を持つ声。声の高さからと声質からして男子生徒なのは間違いない。

「能力って」言われて思い出す、自分の中の四つの能力。だがその声はあまりにも力が無く、頭の中を響かせる声の主には届かない。そんなことも露知らず、呆然と丹羽を眺める。

移動方法はほふく前進しかないこの状況下。

丹羽は動かない。動けないのかもしれないし、意識をとっの昔に失っているのかもしれない。ふいに、丹羽を抱きしめたくなった。その欲求に抗うことなく、原型を留めていない丹羽の下半身のすぐ上部にある腹周りに両手だけ抱き着く。その際、血が目一杯服に浸透する。顔にも付着し、金髪の前髪部分と下の先端を赤く染める。顔に伝わる筈の丹羽の温もり。

丹羽の体から、人間が持つ温かさというものを感じることが出来なかった。「昭博」

目尻に涙が溜まる。その状態のまま少しだけ丹羽の体を押ししてみた。ほんの少しの力を入れただけなのに。丹羽の体は丹羽自身に対して後ろに倒れ、新島は前へと体を持って行かれる。

昭博が、昭博が。

アキヒロガ、シンジャツタ？ 「そんな、そんな、昭博、昭博お」
べちやべちやと不愉快な液体が自分の体全身を浸すのがわかる。

けれどもそんな些細なことはどうだってよかった。自分が大好きな人が、死んでしまった。もう何も考えられない。もう何も考えたくない。頭の中を楽しかった思い出が駆け巡る。二人で喋り、二人で笑い合っていたあの頃の記憶。それが新島の頭の中を占め、新島は泣くこと以外の動作をしないようになった。動かない丹羽の冷たい体に寄り掛かり、ただただひとえにひたすらに、泣き叫ぶ。

もし昭博が生き返るなら。

私は何だつてするのに。

『新聞部君に生き返らして欲しいと思えば、生き返るよ』

「え？」あの声がかまた頭の中に響いた。先刻まではどうでもいとい蹴っていたが、ただし、今度ばかりは違った。

『昭博が生き返る？ 生き返るってそれ、本当なの？』

『うん。間違いない。ところであなたは誰ですか？ 名前と、出来れば能力を教えて欲しいんだけど』

『ちよ、ちよっと待ってその前に！ 本当なの！ 昭博が生き返るって本当なの！』

『うん』再度、声の主 狩谷は肯定する。『新聞部君はまず間違はなく何でも出来る能力を持っている。だったら、死んだ人を生き返らせることも不可能じゃない』

新島は、今日一日で幾度となく流した涙を流し始めた。しかしその涙は以前のような苦しみから出る涙ではなく、嬉し涙だった。

昭博が生き返る。

その言葉が、新島のぼろぼろな体を奮起させる。急いで頭の中で自分の名前と能力をつぶやき、同時に狩谷操という名前と、どのよ

うにして自分の頭の中に声を響かせているのかに対する方法を聞いた。

「成る程」何ともいえない開放感に包まれた新島は、明るい顔で感心する。「能力の合わせ技ってことなんだ」

その可能性については全く考えていなかった。いや、正しくは考えられなかったということになる。その方法を思い付かないように新聞部に細工をされ、その細工がほつれる結果に結び付く『二つ以上の能力を同時に使える能力』も、元々は川崎のものだ。操られていた丹羽から逃げる時、『二つ以上の能力を同時に使える能力』に気付いてはいたものの、気にしないようにしていた。川崎の手を借りて丹羽から逃げるなんてことはしたくなかったから。

新島は自身が最初に手に入れた能力について思い出し、それと他の能力との合わせ技というのを考え、そしてふいに思い付いた一つの疑問を頭の中で展開してみる。

『昭博を、学校の皆をこんな風にしたのって、結局誰なの』

『新聞部君だよ。新聞部君だ』

『え！』言われて驚く新島。『てことは何、昭博を操って私を襲わせた奴に、昭博を生き返らせてもらうってこと！』

『……そうなるね。その昭博ってというのが何組の誰なのかはわからないけれど、そういうことになる』

どうやら狩谷は昭博という名前の人物を生徒だと勘違いしているらしい、と新島は気付いたがあえて指摘しないまま通りすぎた。その心の声が狩谷の元に届いているのは言うまでもない。そのふしだらな事実が、狩谷にとってどうでもいいことであるのも言うまでもない。

『じゃあ、また何かあったら合図を送るよ。その場から動かないで何人かそこに移動すると思うから』

『わかった。あの……ありがとうございます……』

礼を心中で呟いた時には既に狩谷は能力発動を止めていたが、そのことは新島にとってもそれ程重要ではなかった。

「あ、そつだ。狩谷君が言うように誰かが来るなら、昭博を移動させないと」

思い付いたがすぐに、新島は丹羽を抱きしめたまま『瞬間移動』を使い、丹羽と自分を校舎のすぐ側に移動させる。下半身が見るに絶えない状態になっている丹羽の背中を校舎の白い壁へと寄り掛からせ、じつと眺めた。

「待っててね」瞬きすらしない丹羽を直視しながら、新島は言う。

「私、頑張るから」

もう一度抱きしめた。口付けをしようとしたが、後にしよう、と思いつく。新島は、丹羽を残してグラウンドの中心へと移動した。体は以前、横のまま。グラウンドの土と自分の体が完全に隣接している。

頭の中に浮かぶのは、丹羽と過ごす未来だった。「全部元通りになつたら、昭博に気持ち伝えよう」

丹羽に嘘だとわかっていても拒絶されたからか。人と人の繋がりはいつ切れるかわからないからなのか。何故なのかはわからない。それでも新島は、自分の気持ちを丹羽に伝えたくなった。

校舎の屋上が崩れた。

狩谷の、『うわあああ！ うわあああ！』という声が頭の中に響いた。

その頭に、激痛が走った。

『ミエナイチカラ』という能力が、新島のものになった。

そして集う、三人の生徒。

狩谷操。新島春香。霧島巧。

三人は空中に浮かぶ新聞部を見上げ、各々自分勝手に口走る。「あんたのことは絶対に許さない！ とつとと全部元に戻して！」

何が起こってるんだ、何が起こってるんだ！ 「どういふことだ

「これは！ 君達三人は僕に立ち向かえるような状態じゃなかった筈だろう！ それなのに、何で！」

「そんなのは決まってる」「決まってるの、そんなことは」「決まってるに決まってるだろうが」

全てをなかつたことにしろ。

そうして、自分の大切な人を生き返らせるんだ。

新聞部に立ち向かう三人の要求の種類はほとんど同じものだった。違いはそれぞれが大切に思う人だけだ。そしてそれに気付いた時、新聞部は狩谷へと声を荒げる。「まさか……狩谷操！ 君、ミカさんはどうした！」

「ミカは、僕達に『ミエナイチカラ』をくれた。新聞部君がミカを守る為につくった能力を、ミカは、僕達を守る為に……」

二の句を告げない狩谷の様子。屋上にある円形の穴。先刻視界の端で見た、屋上の小さな竜巻。

それらが全て、一つの事実へと結び付ける。「狩谷君！ まさか君、ミカさんを殺したんじゃないだろうね！」

「そんな訳ないだろうが！」 狩谷に対して発した疑問だったが、しかし反応したのは霧島だった。「なんでミカが死んだのかはわからねえが、ミサオがミカを殺すなんてのはありえねえ！」

「……僕は君とは喋ってないんだけどねえ、霧島君」ただでさえ訳のわからない展開が新聞部を襲ったのだ。それに加えて、高柳まで死んだ。霧島まで自分に歯向かう。そんなことが立て続けに起きて、新聞部という男子生徒が黙っている筈がない。「ふざけんな、ふざけんなふざけんなふざけんな！ お前らミカさんをどうした、僕の前に立ちほだかるなこのクソがつ！」

下で自分を見上げる三人を木っ端みじんにしてやりたい衝動に駆られた新聞部は、『爆発』の能力を使ってグラウンドに爆撃した。グラウンドだけではない。校舎も壊し、体育館倉庫もこわし、学校の領土内のものを全て爆発させる。煙塵が自分の下からまい上がる。立ち込める火薬のにおい。辺り一面に飛び散る火花。その衝撃。建

物が崩れる音など消え失せる程の大きさと規模で、新聞部は爆発を起こした。

煙りが晴れると。

新聞部に敵対する三人が立っていた筈の場所には、塵すら残されていないかった。「あはは……アハハハハ！ どうだ、みたか！ 僕に逆らったらこうなるんだよ！ 身に染みるかな、ああそうか染みる筈の体も残っていないのか！ アハハハハ！ 無力だ！ なんだよ僕以外は！」

そう高らかに叫んでいた新聞部の体を。

「な」何かが、貫いた。「い、な、なんだこれ、なんだこれは！」

右足の付け根。左手の指。右耳の外耳。

それらに、円形の穴が空く。

新聞部の体には今現在『完全自動修復』の能力がかけられている。なので新聞部は例え心臓を貫かれたとしても死ぬことはない。だが、痛みはあった。三箇所を貫く何かが消えると体は自動的に修復され、新聞部は痛みを消す為に『痛覚麻痺』の能力を自分に使う。

「な、何が。何かおこってるんだ！」そうこうしている間に、別の三箇所穴が空く。「今度は、痛くない。だけど何が……まさか、あの三人か！ ミカさんの『ミエナイチカラ』で爆発をかわしたのかい！」

いや、例えそうだとしても。「『ミエナイチカラ』を発動したまま他の能力を使うのは出来ない筈だろう！ だって僕は君達の能力に、それが出来ないよう設定したんだから！」

新聞部は気付いていない。

そのルールを設定した時に、「もしこのルールを打ち破る能力なんかあったら僕はピンチになっちゃうね」と思ったことを。

それと同時に『二つ以上の能力を同時に使える能力』を作り出してしまい、それが川崎直美という女子生徒に渡り、最終的に三人の反逆者達に行き届いてしまったことを。

『ミエナイチカラ』、『瞬間移動』、『レーザー』。

その三つの能力の合わせ技　避けることが出来ないピンポイント射撃により、攻撃を受けているということ。

この結果から『ミエナイチカラ』という能力は、他の能力も所有者の体の一部と見なしたらしい。

つまり。

新聞部は、三人の生徒の現在地を知ることと攻撃を避けることも出来ない。『わかったかな、新聞部君』

半ば錯乱状態の新聞部に、狩谷は心の声を発信する。「この声は、狩谷か！　君、何で僕の頭に声を！　汚いぞ！　姿を現せよ！」

『汚い？　何言ってるんだよ、新聞部君。汚いのは君じゃないか』
狩谷の声が新聞部の頭を響かせる。その声が、新聞部の頭を掻き乱す。『自分勝手に能力をばらまいて、自分勝手に谷山さんや三嶋君に皆を殺させて。僕達の日常を壊したのは君なんだよ、新聞部君。何の前触れもなしに僕達を殺そうとした君が、一番汚い』

恥を知れ。命拾いをしろ。はいつくばって、苦痛という苦痛を味わってから生きることをやめろ。『それでも僕は、君に対して同情しない』

「ああ、あああああつ！」

遂に新聞部は。

自分に歯向かう何もかもに向け、咆哮した。

『弾丸』 『刃』 『爆発』 『超重力』 『念動力』 『水流』 『雷』 『大玉落下』 『火炎』 『地震』 『核爆発』 『存在の削除』 ……。

何もかもを消す為に、何もかもを発動する。学校があつた場所には何もなくなっており、それどころか街一つなくなった　ようにみえた。

「消えるよ、痕跡も跡形もそこに居たつていう事実も全て全部全部分消えて消えて消え失せてくれよ！」

なのに。

新聞部を狙う攻撃は止まらない。

そればかりか、街に崩壊した部分はどこも見当たらない。学校は

間に合わなかったが、街に被害が拡散することは免れた。言わずもがな、霧島の『盾』と『ミニナイチカラ』の合わせ技　傷付かない盾の所為だった。

霧島は『盾』の能力が他の能力と合わせやすいことに気付いていた。だから霧島は『盾』と『瞬間移動』を合わせることによって盾から入り別の盾へと移動する能力により、校舎一階から脱出したのだ。

三人の攻撃は、新聞部の急所ばかりを狙い始めた。頭部、腹部、心臓。これは狩谷の判断によるものだ。痛む様子も見せず、すぐに回復する新聞部。『心を読み取る能力』で新聞部が『完全自動回復』と『痛覚麻痺』の能力を使っていると知った。そんな畜生を戦闘不能にするためには、致命傷を狙うしかない。

「やば、い。ちょっと待ってくれよ、これは、冗談抜きでやばい」
心臓や腹部はまだいい。

だが、頭部は駄目だ。貫かれた部分には、何もなくなる。つまり、その部分の脳が一時的ではあるが削られ、思考を強制的に停止させられてしまう。「あ、あ、くそ、くそがああっ！」
何も出来ない。

新聞部が動けるのは、頭部に攻撃が行き届いていないほんの数秒だけだった。

『ま、まあいい』ふらつく意識をなんとか保ちながら、新聞部は顔を上へと向ける。『もう少しで、世界は崩壊するんだから』
その能力は。

『世界崩壊』は、既に地球の空を全て覆っていた。全人類がありとあらゆる場所でありとあらゆる抵抗を試みるが、刃に削られ通じない。敵う筈もない。それは新聞部にも止めることが出来ない大規模破壊。世界に終止符を打つその能力の拡散は、誰にも止められない。

筈だった。

その時、新島春香が最初に手にした能力　『能力の発動をなか

ったことにする能力』が発動された。

しかも、合わせ技。

『ミエナイチカラ』との合わせ技。

それ則ち、例え能力としての序列が低い『能力の発動をなかつたことにする能力』の序列でも、第一位まで上げることができる。

第二位の序列を有する『世界崩壊』の拡散が、止まる。

「な、ああ、ああああ！ 何でだ、何でだ！」新聞部は『世界崩壊』が収束している事実を知ると、取り乱す。「『ミエナイチカラ』だけじゃこんなことは出来ない筈だろ！ かといって二つ以上の能力を同時になんか使えない！ ましてや、全ての能力の中で二番目に強い『世界崩壊』を崩壊させるなんて、不可能だ！ なのに、何でだああ！」

新聞部の敗因を敢えて挙げるとすれば、大きく三つにわけて、挙げることが出来るだろう。

『二つ以上の能力を同時に使える能力』を作ってしまったこと。
ランダムに能力を配ったこと。

そして、最大の理由。高柳美香という女子生徒を守る為に、高柳美香が自由に使うことの出来る能力を、無敵であり序列一位の『ミエナイチカラ』にしてしまったこと。

『世界崩壊』は遂に北半球にまで範囲が狭まった。『世界崩壊』が消えるのも時間の問題だ。後は、何も出来なくなった新聞部を三人が追い詰め、全てを元通りにする。

校舎や体育館を元に戻し。

死んだ人間を生き返らせ。

再び、日常を取り戻す。

「させるか」

新聞部が体に穴を開けながらそう呟くと、消える筈の『世界崩壊』が形を変えた。刃の集まりではなく、白い光りの集合体へと変わる。そしてその白い光りはあつという間に地球の表面を覆うと、神々しく地面を照らし始めた。

新聞部は。

『世界崩壊』を、準備段階のまま発動させた。「させるかよ。何が起こるかわからないけれど、もういい。もうどうだっていい。こいつらが僕に歯向かうのを止めるなら、何だってしてやる。手段は問わない、何が起きたって構わない。中途半端でいい、『世界崩壊』を何が何でも発動しきってやる！」

未だに姿を見せない三人は焦った。新島の『能力の発動をなかったことにする能力』を使っても消えない『世界崩壊』に対して。しかし、『世界崩壊』が消えないのは同然至極道理の上でのことだった。

例え『世界崩壊』が序列二位の能力だったとしても、強力なことには変わらない。そして、発動の前段階の時間が溜まり過ぎていた。いくら『ミエナイチカラ』と『能力の発動をなかったことにする能力』の合わせ技といっても、ベースは『能力の発動をなかったことにする能力』。しかもこの能力は、新島が一度も使わなかったからわからなかったことなのだが、霧島の『盾』を消すことすら出来ないレベルの能力だった。

それを『ミエナイチカラ』で強制的に序列一位にしたところで、底は見えている。

狩谷は、新島は、霧島は。

各々が出来る最大の攻撃を、新聞部の頭部へ向けた。

狩谷は今まで通り『ミエナイチカラ』と『瞬間移動』と『レーザー』を組み合わせた攻撃を。

新島は、狩谷のそれに加えて『能力の発動をなかったことにする能力』を組み込み、新聞部の体にかかっている二つの能力をなかったことにしながら攻撃する。『能力の発動をなかったことにする能力』を直接『完全自動回復』などの能力に使用することは出来なかった。もしそれをしたら、『世界崩壊』が今にも発動しきってしまう。

霧島は『ミエナイチカラ』と『盾』を合わせたものを新聞部の頭

部の周りに囲むように配置し、二人の攻撃を反射させて新聞部に追撃を与えようとした。

そうして、遂に新聞部の頭部がなくなった。首から血が流れる。頭部のない人体が空中を浮遊する。だが、動いている。『世界崩壊』はまだ動いている。怯まずに三人は新聞部の体の三箇所穴を開け、新聞部の反応を待った。

新聞部の体は。

地面へと、落ちた。

『やった……』と三人は思う。直に『完全自動回復』により新聞部は元通りになるだろう。その時、その時に新聞部を追い詰めて非常を日常に戻せばいい。

「ねえ」「ミエナイチカラ」を発動したままの新島は呟き、絶望した。「空の光りがまだ消えてない」

地球が、中途半端なまま発動された『世界崩壊』の能力で包まれる。地球上の全てのものが白い光りに包まれ、次いで地球の外も白い光りで包まれた。

何も、見えない。

そこには何も無い。

プロローグ

見渡す限りの白。

直立不動で寝ていた。目覚めたばかりの狩谷の眼前が、白色で包まれる。「う、うっ……」

ここは、何処？

その状況に至った時にまず狩谷が思ったのはこの疑問だった。視界だけではない、足場さえも白色のその場所。動こうとした足がおぼつかない。足場は何か白い綿状のもので構成されていた。その足場が、見渡す限り、延々と続いている。上を見ると、何もなかった。文字通り何も無い。何も、ない。雲一つない快晴というものだろうか。しかしそれにしてはおかしい。太陽が照っていないのだ。そう、狩谷の頭上には太陽がない。

「僕は、一体何を……」様々な疑問の渦が吹き荒れる頭を冷静に整理しようとし、今まで自分が何をしてきたかを思い出す。

そうだ。そうだった。

「僕は、今まで新聞部君を何とかして、『世界崩壊』を止めようとしていたんだ！」思い出したがすぐに、狩谷は再度周りを見渡した。狩谷は、霧島と新島の手をかり新聞部を倒すことに成功する。そうだ、成功したのだ。あの頭部のない新聞部の体が空中から地面に落ちる場面を確かに見た。

なのに、これは一体どういうことなんだ。柔らかい足場。この白い綿状のものもしかしたら雲かもしれない、という仮定が一瞬だけ脳裏をかすめたが、それだったら太陽のない空というのはおかしい。漫画な何かで見たことのある雲の上の世界。自分がもしそこに居るのなら、太陽が頭の上を蹂躪している筈だから。

「じゃあ、ここは何なんだ。そうだ、結局僕達はどうなったんだ。

学校は？ 新島さんは？ 霧島君は？ ミカ、は？」

何人もの人物の顔が思い浮かぶ。彼ら彼女らは一体どうなったの

だろう。生きているのだろうか。「いや、生きてるのは間違いない。僕は今、五つしか能力を持っていないから」

『心を読み取る能力』。

『瞬間移動』。

『レーザー』。

『二つ以上の能力を同時に使える能力』。

そして、『ミエナイチカラ』。

他の二人は生きている。新聞部はどうなったかわからない。高柳は、死んだままだ。高柳の能力であった『ミエナイチカラ』の発動はいつの間にか解けていた。かといって発動出来ないという訳ではない。体に異常な部分は全く見当たらなかった。

異常なのは、この現実だけ。狩谷はすぐに悟った。最終的に何が起こったのか。何が起こった結果、自分はこんな場所にいるのか。

狩谷は悟った。

『世界崩壊』は、中途半端なまま発動されてしまったのだと。そうして『世界崩壊』は雲の上なのに太陽が照らない世界なんてものを作り出してしまい、『ミエナイチカラ』を使っていたおかげで『世界崩壊』に巻き込まれなかった自分は、今こうして生きている。

霧島も、新島も、生きている。

同様に、新聞部も生きている。

「……………」終わった、と思った。見渡す限り何も無い場所にいきなりほうり込まれ、何も出来ないしどうしようもないと思った。「だけど、他の皆が生きているなら。新聞部君が生きているなら、僕はまだやることがある」

高柳美香を生き返らせる。

そして、世界を元に戻す。

「……………」よし」

決意を新たにし、狩谷はふらつく足場を気にながら走り始めた。『瞬間移動』を使った方が早いかもしれないとは思ったが、即座にそれが不可能であることを理解した。ここは自分の今まで生き

てきた世界とは別の世界なのだ。自分の知っている場所しか移動出来ない『瞬間移動』では、今の段階だと何処にも移ることが出来ない。だから、走った。それは全く意味のないことかもしれない。だが狩谷は、自分を包む不安を打ち消す為、走ることしか出来なかった。

数分が経った。

太陽がないのに明るい雲の上で、狩谷はため息をつく。

変わらないのだ、視界が。

延々と続く雲の足場。全く途切れる気配がない。しかし、狩谷には走ることに出来なかった。冷静になれば他にも出来ることはあったのかもしれないが、少なくとも今の狩谷ではそれを実行するのは不可能に近い。

「うん？」すると、遠くの方に、人影らしきものが見えた。ぼんやりと視界に写るシルエツト。人間かどうかもわからなかったが、それでも雲の足場の他のものを見ることが出来た、ということが狩谷を歓喜させた。「おい、おい！ 聞こえますかー！」

急いで走った。あちらからこちらを見ることは出来ているのだろうか。そうだ、目印が必要だ。そう考えた狩谷は、「こつちです！ こつちです！」と叫びながら空に向けて『レーザー』の能力を発射させた。挙げられた右の掌から発射された光りの直線は、何も無い空間を貫く。

今まで何の反応も返さなかった人影が。

ピクリと動いた気がした。

「……………」

「えー！」

それは。

その、人影は。

能力を使った狩谷に目掛けて、一気に近付いてきた。「……………っ！」

白い柱が噴水の如く目線の先の先で垂直にあがったと思った直後だった。その人影が通常の間人では有り得ない速さと圧力で、狩谷

に襲い掛かる。

『肉体強化』の能力を持つ丹羽昭博というその人物は、新聞部のプログラム通りに、能力を所有する狩谷を粉碎すべく強靱な拳を振り上げる。

その拳は。

そこにあつた足場の雲ごと、狩谷を攻撃した。

「うつつ」

目を覚ますと新島はまず自分が先刻までとは違い、横たわっていることに気付いた。うつぶせのままほく前進をしていた記憶。あれは一体どれくらい前の記憶なのだろう。あれから一体、どれくらいの時間が経つたのか。「ここは、何処……なんだろ……」

足の痛みに耐えながら何とか上半身だけ起き上がらせ、状況把握を開始する。

見渡す限り、緑色だった。

草が生えている。自分が居るこの場と、その先に見える場所に。雑草の類にしてはおかしい。何故なら、全く一様の長さを持つ草が延々と同じ様に生えているからだ。

視線の先、自分が今居る場所より遠い遠い場所に、何かが見える。灰色のような白色のような、そんなような色で構成された大きな壁のようなものが見える。遠すぎてそれがどんな形をしているのかわからない。柱のようにも見え、通行を妨げる門のようにも見える。いずれにせよ、近付かなければ話にならないようだ。

とりあえず、こうして周りの状況を把握することは出来た。土に生えた草がチクチクと下半身を痛み付ける。ただでさえぼろぼろなのに、人の足の付け根に届くか届かないか程度の長さの草が、地味に痛い。「うつつ」と苦悶の表情をしながら、それから新島はぼつととする。地毛である金髪には所々血の跡がこべりついている。制

服も同様だ。川崎との悶着で破れている箇所すらある。痛みが身体
のあらゆる場所から響くが、特に両足と口の中が酷かった。今更な
がらに新島は気付いたのだが、どうやら歯が何本か折れているらし
い。口を動かそうとすると、顎からも痛みが走った。

私、こんな状態でよくあんなに動いたり喋ったり出来たなあ……。
感慨深く、そう思う。過去と照らし合わせても、あれだけ泣いて、
あれだけ暴力を受け、あれだけ何かの為に動いたことはなかっただ
ろう。

その、何か。

丹羽昭博という、掛け替えのない存在。そして勢いよく目を見張
り、大声を出す。「そうだ、昭博は！ ……皆は！ ……ここは何処、
学校はどうなったの、ああああ私は誰！」

うわあああと叫びながら、両手で混乱した頭を挟んで振り回す。
そうだった。ここは何なんだろう。あの白い光りはどうなったんだ
ろう。思うことは色々あったが、新島は自分の情報処理能力では一
度に二つも三つも答を導き出すのは不可能と判断し、詰まるところ
一番に重要な人物の安否について確認しようとする。

「昭博は、何処！」叫び声が草原に響く。上空に立ち込められた雲
光りが少なく、暗いその草原で新島は叫ぶ。「生きてるの！ 生き
てるんだよね！」

そう新島は誰彼ともなく叫んだが、当然返答どこからもない。「
……グスツ」と顔を俯き、とうとう泣きそうになってしまった。誰
もいない。丹羽どころか、狩谷のような知り合いもない。自分を
虐めていた川崎も既に死んでしまった。川崎の取り巻きであった二
人の女子はどうなったのだろうか。

それに。

新聞部は、どうなったのだろうか。

「わかんないよう」「小さく、呟く。「ヒグッ……昭博お……皆あ……」

皆、死んじやったの？

私だけ、遺して？ 「あれ？」

ここで、新島は自分の推測におかしな点があることに気付いた。そうだ、思い出せばいいんだ。あの時。そう、あの時。新聞部が自分勝手にルールをつくって、暴虐の限りを尽くしたあの時のことを。新聞部が作り出したルールのことを。

川崎が死んだ時 川崎の能力は自分のものになった。狩谷やもう一人のあのヤンキー風の男子生徒のものにもなっていた。能力を持つ人が死んだらその能力は他の皆のものになる。

「そっか、死んじゃったのは……川崎さんとかだけ……」
だったら。

狩谷の『心を読み取る能力』や、霧島の『盾』や。丹羽の『肉体強化』の能力が、何故自分のものになっていない？ 「誰も、死んでないのかも」朱く染まっている顔を上げる。涙を両手で拭き取り鼻水をすすり、前をしつかり見て言う。「昭博も。狩谷君も。あの男の子も。新聞部君も、死んでない」
それならば。

新島はくじけそうだった自分の気持ちを何とか立て直し、痛みに耐えながらほふく前進が出来る体勢になる。

ゆっくりでいいんだ。

狩谷とあの男子の安否を確認する為に、新聞部を見つけてここがどんな場所なのか教えてもらおう為に。

丹羽を見つけたして、自分の気持ちを再度伝える為に。

「よし。行こうっ」

そう言いつつも、体は震えている。

気を抜いたらまた泣き出してしまいそうだった。丹羽の姿を思い出し、なんとか留める。

こうして新島春香という女子生徒は、不安で自分の体が押し潰されそうになる非道な現実には、希望を糧に立ち向かうことを決意した。

「僕らの所にやってきたー、やーつらつなのーまえっはサイキックー」
新聞部は生きてはいなかった。間違いなく、生きてはいなかった。頭部を完全に損傷した時には既に、新聞部の中に魂と呼べるような代物は存在しておらず、狩谷と新島と霧島の三人の生徒の反逆は、充分過ぎる程に成功していたのだ。

だが、新聞部は今も尚、こうして歌っている。

あの時。

『世界崩壊』の能力を中途半端ながらに発動しようとしたあの時、新聞部は頭の中で自分は負けるのかもしれないと悟った。『ミエナイチカラ』と他の能力が合わさっては、いくら『高二病』が新聞部の手にあるとしても敵う筈がない。否、時間さえかければなんとか強さを上回るような感情の塊を能力に込め、作り出せばなんとかなのかもしれない。

「うーん、でもやっぱり無理なのかもしれないね、『ミエナイチカラ』を越す能力を作るなんていうのはさ」

だって僕は、ミカさんのことを守る為なら何だってする覚悟だったんだから。

こうして『世界崩壊』が中途半端に発動し、中途半端に滅んだ世界にほりり込まれたと悟った直後に、新聞部は高柳を生き返らせようとした。無理矢理『死者復活』の能力を作り出し、高柳を生き返らせようとした。

けれども、叶わなかった。「どうやらどうやら、『ミエナイチカラ』がミカさんの一部だと判定されたみたいだねー。まだ『ミエナイチカラ』は三人の手元にある筈だから、厳密にいうとミカさんは生きてるってことになるわけか。アハハハハ、つくづく邪魔をするねえ、あの三人は」

まあ、いいや。

不可抗力とはいえ、こうして一人　消すことが出来たんだから。新聞部は今現在、『空中浮遊』の能力を使って宙に浮いている。頭のすぐ上には大きな穴が開いた雲の運河が存在しており、足よりずっと下の方向には草原が広がっている。

「アハハ」と笑う新聞部は。

丹羽昭博の姿をしていた。

「『人格交代』と『能力輸送』の能力。上手くいって本当によかったよ」

あの時。

新聞部は『爆発』の能力にも耐え切った丹羽の肉体を視界に入れていた。丹羽に与えたのは『肉体強化』の能力。「それがまさか自己回復能力の強化にも繋がる能力だとはね」。おかげさまでこの体は無傷だよ。何の怪我もしていない、まさしく健康体の中の健康体だね」

丹羽の能力の意外な強さに気付いた新聞部は、三方向から攻撃を受けながらも『人格交代』の能力をつくり、次に『能力輸送』の能力で『人格交代』を除く全ての能力を丹羽の体に移した。そして、それと同時に『人格交代』の能力を使う。

『完全回復能力』も『痛覚麻痺』も『空中浮遊』もなくなった新聞部の体は、損傷した頭部が治ることもなく力尽き、地面に落ちた。その体の中には丹羽の人格が埋め込まれていた。

そうして、新聞部は丹羽の体の中に移動することに成功したのだ。やがて起こった中途半端な世界崩壊。強大なそれから身を守る為、『ミエナイチカラ』を持たない新聞部は『肉体強化』の能力を『能力強化』の能力で序列二位へと強化させた。

狩谷、新島、霧島の三人は『ミエナイチカラ』で『世界崩壊』から身を守り。

新聞部は、丹羽に渡した『肉体強化』で『世界崩壊』から身を守ったのだった。「やつぱり、他の人達に渡した能力が使えなくなるのは痛いね。『瞬間移動』とか使ってみたかったんだけどなー。うん、でもまあそれでも、こうして僕は生きてるんだ。色々計算違いはあったけど、絶対絶命の窮地にたったけど、なんとか生きている。僕は、三人に勝ったんだよ」

計算違い。

他の人に渡した能力が使えなくなった。新聞部以外の能力者は二つ以上の能力を同時に使えないように設定した筈なのに、何らかの理由で使えるようになってしまったこと。『ミエナイチカラ』という無敵の能力を持つ高柳が、自殺を謀ってしまったこと。

『人格交代』をした直後は新聞部の思い通りになっていた丹羽の体が、中途半端な世界崩壊の跡、新聞部自身が作り上げたプログラムによって動き始めてしまったこと。

「でも、うん」丹羽の姿のまま、ニヤニヤと新聞部は笑う。丹羽の声を聞いて新聞部は言う。「そのおかげで狩谷を消せたんだから、結果オーライってことでいいよね」

まあ、多分狩谷は死んでないと思うけど。「触れたことすら感じない拳なんて、そんな、漫画じゃないんだからさ。寸手の所で『ミエナイチカラ』で避けたのはまず間違いないだろうね」

ハア、と新聞部は一つため息をつく。やれやれとでもいいかげん様子であった新聞部だったが、少し間を置くと、「よし」とあることを決意した。直ぐさま『変身』の能力を使い、新聞部は元の自分の姿へと変身した。そこにはニヤニヤと笑う元生徒会長 新聞部の姿が、確かに存在した。

「常に『肉体強化』を発動している体プラス『高二病』の能力。この世紀のコラボレーションに、君達三人は果たして勝つことが出来るのかなー？」

本当だったら、もう一度『世界崩壊』の能力を発動して君達三人を一掃した後、ミカさんを生き返らせることだって出来るんだ

よ。

でも、しない。してやらない。

「君達三人は、身内や知り合いとの再開も食べ物も飲み物の確保も誰かからの助けも全く期待出来ないこの状況下で、じつくりと死んでもらおう」

どうせ、絶望にうちひしがれて何も出来ないんだろうけどさ。「昔だったら君達三人を追っていたらどうけどね……僕も若かったのさ、昔はね。ストーカーとか、もう卒業したんだ、僕は。君達が死に逝くその間、僕は観光でもしてるよ。中途半端に崩壊した世界っていうのも、なかなかどうして乙なものさ」

そう言つと。

新聞部は、『空中浮遊』の能力で飛び去って行った。目的地はない。ただただ飛行する、時間の無駄ともとれるその愚行。

しかし、新聞部は気付いていなかった。

霧島巧という 白い空間から脱出しようとする、打倒新聞部を心に誓った存在を。 斉藤伊里を生き返らせる為に、生き続けることを選択した存在を。

新島春香という 怪我や不安で蝕まれる体を、涙を流しそうになる虚弱な性格を、無理矢理鞭で叩きながら動き出した存在を。 丹羽昭博を捜し出す為に、生き続けることを選択した存在を。

狩谷操という 丹羽の体を媒介にした新聞部の強襲を『ミエナイチカラ』で避け、地面への直撃さえも『ミエナイチカラ』で緩和し、飛び去っていく新聞部を『ミエナイチカラ』で姿を隠したまま冷たく見上げる存在を。 高柳美香を生き返らせる為に、生き続けることを選択した存在を。

新聞部が三人を追っておらずとも。

三人は、新聞部を地の果てまで追い続ける。

じつして。

学校全体を巻き込み、揚げ句の果てに世界崩壊をしようとした高

二病患者の暴挙は終わりを告げ。

高二病患者達の暴挙が、始まった。

あ、因みに新聞部が歌っていた曲は相対性理論というグループの「
スマートラ警備隊」という曲です。もう本当に訳の分からない電波曲
なので、一回聴いてもらえると嬉しいですよ。（追記。スマートラ警
備隊という曲を用いていましたが、変更しました。もしまだ変更さ
れていない部分がありましたらご報告ください）

もう一つ因みに。中途半端に滅んだ世界は拙作における他作品の舞
台なんです。……すいません書かずにはいられませんでした（笑）。
なにはともあれ、読了ありがとうございました。

P.S.

出来たらこの作品を投稿したいと思っているので、誤字脱字とかこ
こは直した方がいいとかここは良かったとか言ってくれると助かり
ます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3656/>

高二患者の暴挙

2011年8月2日03時24分発行